

久 豊 公 自 應 永 廿 年  
忠 國 公 至 同 廿 七 年

前 編 舊 記 雜 錄 卷 卅 四

902 「西藩野史」

二十年癸巳

十二月、澁谷氏隅州に寇す、久豊公是を征せんか爲師を帥ひて鹿兒嶋を發し、先薩州吉田に到る、十二月 吉田若狹守清正吉田ノ主、盛饌を獻す、伊集院頼久虚に乗し、夜の鹿兒嶋清水城を襲ふ、傳云、頼久俛テ鹿兒嶋に遣して内應を求む、北原氏が臣東福寺ノ城中に有テ應ずる者有、於是頼久兵を發す、城中驚駭して自相蹂踐す、頼久火を縱て城を焼く、城兵益亂る、死する者百を以數ふ、傳云、北原彌三郎三郎・佐多三郎九郎・伊地知新左衛門等城中に戰死す、遠矢無覺大竹を執て賊數人を擊倒す、或云、清貧にし、火光竹を照す、賊望ミて以爲く、彼膂力絶て兵器に乏し、

倫太刀を振と恐怖して近つかず、須臾にして竹破る、於是賊群り進て無覺を斬り城終に陥る、賊又東福寺城を焼く、七日頼久軍を分けて清水城を守らしめ、自退て原良小野に屯す、久豊公吉田に在て變を聞キ、忽軍を班して頼久を討せんとす、吉田清正・蒲生清寛諫曰、頼久大兵を起し鹿兒嶋を略し、兵勢甚盛也、孤軍是に向は、危し、暫く爰に有り、檄を傳へて軍を四方に召し、聚れるを待て是を撃ハ勝たすといふ事なけん、久豊公聽す、輕騎を驅て直に鹿兒嶋に趣く、頼久既に退て原良あり、佐多伯耆守親久・大寺美作守川上・長野等餘兵を聚て東福寺城に在り、久豊公諏訪神を拜し、清水城を廻り精木川稱荷神前を隔て伏兵を置キ、東福寺城に入て小野・原良を討せんとす、時に下大隅及び向嶋の衆、船を岩下濱に着けて公に會す、谷山の軍も又到る、久豊公勢を得て原良に向ふ、十二月十日伊敷の賊頼久に應して、日田岩ヲ築テ守ル、に據る、川田三郎太郎義清或云、義清か父義祐とす、満家院河田之主、河田氏傳、忠昌公文明十七年ニ、是と四郎か坂に闘ふ、矢を發て、久豊公も又軍を進めて戰を挑む、公の軍甚疾し、頼久大に潰へ亂る、傳云、頼久か族日置肥前守・町田土佐守・大田三郎等粉骨碎身す、頼久か軍數百人戰死すといふ、頼久退て原良壘を保つ、公追ひ進んて是を圍ひ、頼久遁るゝに途なき

を見て自殺せんとす、吉田清正・蒲生清寛 公に告て曰、  
頼久か罪萬死贖に足らずといへとも、正しく公の外親た  
り、頼久か妻ハ公ノ妹也、元久公ノ母ハ頼久か祖父忠國ノ女也 今是を赦さは頼久再造の恩  
を感じ、永く國家の藩屏たらん、 公是に従ふ、頼久罪  
を謝して伊集院に歸る、初頼久軍を發するに及て、老臣  
野田入道道篤固く諫て不可也とす、頼久聞す、以盡なり  
とす、道篤五子あり、又父か言を以盡なりとす、爰に至  
て初て信す、

二十一年甲午

八月、久豊公師を帥て薩州給黎を攻む、此時給黎ハ伊集院頼久領に反て争亂多、久頼す谷山・揖宿の故に征すといふ 頼久援を伊作大隅守久義久義初て叛す、頼久に親きを以て歎  
其故詳らかならず、嶋津上總介久世河邊に求む、二人是に應し兵  
を會し、知寛の大山を越て松平・荒平共に給黎の地に軍す、

久豊公頼久と戦ふ、本田信濃守重恒老軍を分けて久義・  
久世を破る、傳云、伊作家の土上原氏以下許多戰死す、本田が族五郎次郎大隅等亦死す 頼久突進て  
城に入る、或云、此時求磨より援兵到る 久豊公進て駒通より城邊に至  
て陳す、列ねて攻め撃こと急なり、頼久思へらく、給黎

の地たるや指宿・谷山共に久豊公に屬すに間りて長く保ちかた  
し、獨り知寛頼久か叔父今給黎、長門守久俊領すに隣りといへとも、大山の  
峻ありて急事の變援ひ難し、是を捨んには如しと、夜八

六、に乗して遁れ去る、知寛・川邊・伊作を經て帰る 於是下長吉を和泉

又四郎直久、傳云、本領之地として賜ふ、按、初和泉氏の領なるへし 上長吉を二十大寺美  
作守元幸元久公・久豊公に仕て國老に任す、長野左京亮に給ふ、軍を班す、

久豊公鹿兒嶋に歸り頼久を憤て止まず、然とも黨與多を  
憂ふ、故に人をして上總介久世に説曰、我固り汝と仇な  
し、只に佞姦の徒に誤らる事久し、今より後好を結び、

吉凶相共にし患難相助、永く唇齒たらは豈善らずや、久  
世悦ふ、遂に山城守忠朝・市來備後守家親等と議して和  
を約す、 久豊公大に喜び、日を定て平等寺薩州日置郡郡山郷厚地

に會し、頼久を討せん事を約す、期に至て 公先至る、  
三人言を食て至らず、頼久一千餘軍を卒し來て 公を襲  
ふ、事不意に起て軍大に亂る、吉田清正・肝付某後殿し、

且戰、且走る、暮に及んで滿家の民蜂起して頼久か軍に  
逼り、馬を奪ひ兵器を取らんとす、 頼久軍を収て歸る、  
二十二年乙未

伊作四郎左衛門尉勝久大隅守久義ノ子初久世に黨して頼久に與  
す、傳云、勝久之妻ハ久世ノ妹ナリ、故ニ是ニ黨ス、按ニ、元久公ノ季女亦勝久ノ妻ナリ、頼久ノ初室久世の妹ニシテ早ク卒スル歟  
又ハ出ル歟、然シテ元久公ノ女ヲ娶ルナルヘン、 忽悔て曰、甚人倫の道に背けり、

終に久世に勧め相共に 久豊公に降る、 公是を嘉し河  
邊に至て久世に會し、歡を盡して歸る、又久世を諭して

鹿兒島に朝せしむ、

二十三年丙申

伊作勝久鹿兒嶋に朝し前非を謝す、 公嘉納す、

十二月、久世又朝す、宴を開て是を饗す、千手堂坊或云、

丸観首堂なり、古今ノ内に館す、歸るに及て 久豊公忽兵を發し

て是を圍ミ責て曰、汝重罪あり、河邊を獻して贖わは歸

る事を得ん、然らずんは汝に給ふに死を以せん、久世死

を甘んじて罪を謝するに意なし、福昌寺僧大田或大轉

坊に至て是を論す、久世曰、我既に囚虜たり、我封土の

取合といへとも專にする事を得ず、命を河邊の衆臣に傳

て後に決せん、於是家臣本田伊賀守を河邊に遣る、本田

辭して曰、事既に急なり、不慮の變知るへからず、須臾

も君に離へからず、固ク辭して往す、久世止む事を得ず、

更に小田原彈正・柳田大膳に命す、二人則河邊に至り命

を傳へて曰、我死生を以念とする事なかれ、審に議して

事の宜に従へ、老臣天辰見庵・天辰安房介見庵、大に衆

臣を會して是を議す、今給黎長門守久俊知寬、も又來り

會す、胥議して曰、河邊ハ父祖傳領の地なり、一人の故を

以除せられん事百世の遺憾ならずや、譬ひ久世君死を給

ふといふとも嗣子犬太郎年五歳、後ニ久林ト稱ス、永享二年

立て、社稷を全ふせんに何の不可かあらん、小田原歸て

久世に告ぐ、傳云、柳田ハ止テ河邊ニ在

二十四年丁酉

正月十三日、久世小田原か語を聞き、自盃を取て從者と宴

し堂中に自殺す、年三、從臣備中太郎久世一族ト、本田伊賀

守・小田原彈正・天辰助三郎・黒田・生駒・金田等十一

人、節を全して死に殉ふ、久世奴あり、暇を給ふて去ら

しむ、奴聞す、盃を給ふて自殺す、 久豊公狀を聞、大

に悔悟して曰、思わさりき、久世如此ならぬとは、遂に

除髮して存忠と稱す、以て過を衆に示すととなり、是より南

方靜ならず、愚謂ク、哀哉、学ヲ講セサル事、舜天下ヲ棄ルヲ見ル

事、敵タル蹤ヲ棄ルカ如ク、暫更ヲ負テ海濱ニ遁レン、

云ハスヤ、久世ノ諸臣何ゾ一人モ知ル事ナキヤ、惜哉、速ニ城ヲ獻シ、

匍匐シテ君父ノ死ヲ援ク事ナキ事、久世初ヨリ死を甘んずるハ可なり

國君社稷に死するの義なれハなり、本田伊賀守か使を辭して節に死する

ハ一介の士といふは、忠ハ未足、如何となれハ、久世匹夫にあらず、

此時生を全ふす共、勇なしとすヘからず、何ぞ勸るに、邦君に事るに赤

心を以し、義に従ひ、命を樂を以テセサル、聽すんハ何を速に河邊に使し、

衆臣に論すに、君父の死天下に易る事なきを以して、久世を援へざる、

衆臣に論すに、君父の死天下に易る事なきを以して、久世を援へざる、

衆臣に論すに、君父の死天下に易る事なきを以して、久世を援へざる、

衆臣に論すに、君父の死天下に易る事なきを以して、久世を援へざる、

九月、犬太郎内城河邊に在り、老臣酒匂紀伊守ハ松尾城邊河

麓に在て其間二十、潜に久豊公に通す、公軍鹿尾島あり、大隅を遣して松尾城に入れ、紀伊守と謀て内城を攻しむ、犬太郎の諸臣大に驚き、急を四方に告て援を求む、

於是今給黎久俊、知覧の軍を卒し來て内城に入る、伊集院實久は伊作伊作勝久既に久世と共に降る、久世伏誅して後又叛する歟、田布施先に元久公賜、阿田・別府・山田の兵を會して河邊野頸に軍し、松尾城を圍む、久豊公松尾の危を聞、神速に兵を發し、半途

絃カ尾山ノロ、に出て後軍を俟つ、吉田若狹守清正薩州吉田之主、蒲生美濃守清寛入道 隅州蒲生ノ主、長野左京亮給黎郡上永吉ノ主、田代肥前

守久助隅州田志布志ノ主、本田信濃守重恒隅州清水之主、新納近江守忠臣日州北郷中務少輔知久 城ノ主、桃山安藝守教宗日州野々

称寢左馬介清平隅州根占ノ主、佐多伯耆守親久佐多氏 和泉又四郎直久和泉氏 和泉又五郎忠次 鹿屋周防介忠兼入道玄兼 隅州五世 鹿屋

の、鉄肥伊豆守隅州廻山田氏 及び福島・鉄肥・栗野・菱刈・牛山・牛屎の軍糧を裏ミ甲を擔て至る、久豊公兵勢大に振ひ堂々として河邊にいたる、然ともいまた敵の虚實を知らず、輕んじて軍を進めず、頼久援の至るを見て陳を移し、内城を後にし、隍を掘り二ヶ所、河水を引き、柵を設て是を待つ、又軍

を分て松尾を圍む事益甚し、城中食盡て日を變る、紀伊守

夜に乘し竊に人をして圍を出て、急を久豊公に告く、公曰ふに、賊の衆寡、地の險易等を以す、使者是を審にせず、公曰、汝歸て紀伊守に告て、重て虚實に明なる者を遣らしめよ、不日に賊を破て難を援わん、使者又圍ひ

犯して歸り告く、城中是を議す、伊地知對馬・寄瀬戸或寄ルニ作帯刀か曰、頼久險ニ據り陳を列ぬ、公其前を撃とも破るへからず、薙野原に出て柵を破て進まは、若くハ破れん、衆是に従ふ、又人を出して 公に告く、於是軍

を分て二隊とし、一は和泉直久忠次或ハ兵部少輔 久國ニ作ル佐多親久・吉田清正・蒲生清寛・山田久興・伊地知將監を將とし、

栗野・菱刈・牛屎等の軍從ふ、薙野原に出つ、一は 久豊公自將とし、桃山教宗・北郷知久・新納忠臣・称寢清平・平田重宗・大寺・長野等是に従ふて内城に向ふ、九月十日、親久等薙野原を下り、川を隔て頼久か軍を射る、賊軍駭き亂る、

勝に乗し川を渡り柵を破て進む、先登の兵隍に陥る、後軍是を踏て進ミ戰ふ、頼久本營に在て動す、直久等か軍隊伍亂るゝに及んで、大に鬨を發し整々として逆へ戰ふ、

直久等か軍潰へ亂る、頼久機に乗して進ミ撃つ、直久・親久等猶退かず奮ひ戰ふ、於是死るもの百を以數ふ、直久・忠次

按に、和泉氏、其先忠宗の次子下野守忠氏に出つ、忠氏將軍尊氏に仕へ、建武中土所の奉行たり、其子右衛門兵衛尉

忠直亦將軍に近侍す、○或云、忠氏後に南朝に屬す、忠直の子能登守氏儀と共に豊後國にあり、一家悉く將軍に屬するが故に、國に帰ることあたはず、氏久邦の人と爲すこと憾なきに非ず、故に後に元久公氏儀を召て日州教仁院の内深川邑百町に封す、是に居す、其子式部太輔久親、其子直久也、是に至て和泉家断ふ、○忠氏初薩州出水郷を領す、故に以テ公トス、出水・和泉方音相同を以因循して和泉字を用ゆ、延享中、吉貴氏の子三次郎をして直久の後とし、顯姓・指宿二郷の内に封し今和泉と号し、一萬石を賜ふ、元服して因幡忠郷と稱す、寶曆四年十一月卒す、嗣子なし、福慶探左衛門清香の養子小松安之助、忠郷の季弟なるを以て、命を奉して忠郷に嗣す、蒲生清實、國老、田代久助、先平氏重盛の次子、因幡忠温ト稱す、故有て姓を建部と改む、二子あり、時盛初て隅州に來つて佐多を領す、宇治川に戦死、嗣子なし、次を田代次郎兼盛と稱す、田代を領す、其子彦太郎後肥前守道清と稱す、野峰ヶ崎・串良を領す、其子肥前守以久高限を領す、其子刑部少輔清久亦後肥前守と改む、其子宗次久助探題少輔肥前守と改む、應永五年、元久公復旧田を賜ふ、元久公に代て探題に關す、於是戦死す、年三十五、數世を経て家衰微す、伊地知將監・山本孫五郎・給黎・猿渡・吉田、清正、和田・下田・西村等戦死す、久豊公ハ内城に向て戦を挑む、新納忠臣先登して功あり、傳云、薩刀を取て賊數人を斬る、賊進來て忠臣の背を斬る、安樂農前守・河野土佐守趣き援く、此時戦急にして、新納家の臣隈江右京亮・上井筑前・八ヶ城四郎左衛門等悉く戦死す、城兵固く地の利を暗す、故に嶮を渡り組に因て戦ふ、公の軍利あらず、賊勝に乗る、平田重宗百餘人を卒し賊軍に突入る、重宗が族勳解由左衛門、田鍋・津田又敗て殺傷甚多し、退んとするに、賊等既に道を塞く、止む事を得ずして松尾城に遁れ入る、頼久又殺到す、公の軍潰亂る、福寝清平・清息、清平、力戦して死す、松尾城下田中に有り、又彌渡氏二人のために寺、頼久勝に乗り、公の諸軍大に勞を小根占に立て園林寺といふ、

る、於是吉田清正、頼久に説して曰、嘗て某蒲生清寛と共に足下を原良に援へり、久豊公の仁惠を忘るゝ事なくんハ、甲を解き兵を休め和平して松尾の軍を助よ、頼久曰、我に給ふに鹿兒島・谷山・給黎を以せは謹て命を奉せん、久豊公是を許す、於是頼久軍を収め、久豊公鹿兒嶋に歸る、或云、此時久豊公ハ鹿兒嶋に有り、然とも頼久猶松尾の圍を解す、城中には平田重宗か百餘人を加て益食に苦しむ、傳云、此時伊作勝久か臣平田民部・平田伊勢を平田重宗に贈らんとすれども、頼久か怒を長る、故に謀て城下に至り、重宗を呼戲言して磔を投す、重宗は糲に併也、頼久谷山に至、頼久谷山に至り、谷山・給黎を取て松尾の衆を鹿兒島に送る、又鹿兒嶋を請ふ、群臣胥議して曰、賊を征して利あらず、家臣命を墜し、諸軍死亡する事此時より甚きはあらず、又國都を以彼に與ん事大に恥へし、今や頼久谷山に有り、勝に奪り軍に怠る、我軍新に敗軍の後といへとも、親死し子殺され積怨心肝に徹す、一たひ靡ハ、嬉笑して刃を踏ミ奮發して賊を撃ん、機會失ふへからず、公大に悦ひ速に軍を發す、傳云、老壯を分て二隊とす、老ハ小旗を負、或ハ青屋・牛掛を經、或ハ紫原を越て椿山に至り、又ハ漁船に棹さし、左屋の脇に至る、志氣奮い發つて大に勇む、頼久は本城、現寺の在り、南方の軍、頼久山田・中村・五ヶ別府川口に

屯す、久豊公の軍是を撃破り、賊敗走す、迤るを追て

直に本城を圍ミ、堀を涉り岸に附く、其勢ひ當るへからす、堀忽に援んとす、頼久力窮り、復吉田清正に因て降を乞ふ、久豊公聽かす、頼久大に恐怖して曰、願くハ

掠奪の地及ひ石谷三十町、伊集院に屬ス、を獻して罪を贖はん、清正又諫て其言ふ處實に肺肝より出つ、若是を殺さは亂うす過思ま

ん、公是を可く、於是頼久悉く地を獻し恩を謝して伊集院に歸る、是より再び叛かす、傳云、頼久が軍谷山を出て南方に帰るを見て衆惡言して、河邊に敗るゝの辱に十日を出すして報ることを得たり、頼久が軍面を赤して去ると云、

二十五年戊戌

伊作四郎左衛門尉勝久軍を卒し阿多鮫島氏領、を撃つ、鮫島

氏援兵を四方に求む、於是頼娃・指宿・知覽・河邊・別

府是を援ふ、市來備後守家親ハ勝久を助く、勝久貝柄崎

田布施の道路に臨て陣す、又援を久豊公に求む、按に、勝久既に降る、又頼久に與して河邊を援ふ時、久世伏誅の後叛し、爰に至て又降る歟、久豊公阿多飛彈守を

遣して是を援ふ、然とも衆寡相敵せず、勝久敗て歸る、

十二月、先是久世誅に伏し、頼久降りて後總州家勢を失

つす、虚に乗して澁谷も又背く、於是入來院彈正忠重長

・市來備後守家親相謀て永利城薩摩郡山田の内、を攻む、大石か平

島津山城守忠朝固く防守る、

二十六年己亥

正月十一日、忠朝軍を督し撃出し重長・家親を敗る、重長援

を久豊公に請ふ、公聽かす、怒て曰、汝吾に叛する

事久し、何の面目有て如此や、重長重て告て曰、前罪至

て重し、臍を嚙に由なし、今や援兵を給ふて忠朝を亡す

ことを得は、誓て日月と共に永く叛かし、誓書を獻す、公曰、

彼忠朝と和して亂をなす、若其言信あらは一舉して二賊

を亡す也、遂に佐多讚岐守久信を將として重長を助く、

重長大に歡ひ、復永利城を圍む、忠朝援兵を諸所に求む、

於是求磨相良前續、眞幸按に、北原氏はに領河邊大木、の援兵至る、

八月十日、重長・久信以て久豊公に聞す、公大兵を督し

到て三方の援兵を破り、忠朝援の破たるを見て、城を棄

て走て隈城を保つ、後に降る事ハ應永二十八年二月有、公凱旋す、入來院

重長是より奉仕して忠を盡す、先是薩州指宿を奈良美作

守に給ふ、按に、指宿ハ忠久公就封日、指宿五郎忠光領す、元久公の時、阿多加賀守に給ふ、久豊公に至て奈良氏に給ふ、奈良氏

治政の道を知らず、驕縱にして百姓を荼毒す、衆

其憂に堪す、叛して奈良氏を逐ふ、指宿大に亂る、久

豊公往て征す、賊城に據て固く守る、公衆を勵して是

を援く、傳云、公の軍酒勾主計等死、公曰、奈良氏罪ありといへとも

勇功愛すへし、召て侍臣たらしむ、傳云、日州を征せんとす、故に勇士を募、奈良氏兄

弟あり、共に勇武を以て世に鳴る、於是召す、兄ハ罪を恥て就す、穎娃に走る、弟近侍す、

二十七年庚子

穎娃某穎娃城に據て叛す、按に、忠久公の時河邊平次郎道房カ次子三郎忠長穎娃を領し、因て氏とす、其子太郎忠方一女あつて男子なし、益山太郎兼純カ子忠純を養ひ、女を妻て穎娃を譲る、其後次郎左衛門尉久純、貞久公に仕ふ、元久公の時、太郎憲純叛す、公是を征して、久豊公を封す、公此に移る、故に南畷と稱す、應永十年、公日州に移るの時、先亡穎娃氏の族小牧氏に給ふ、又穎娃氏を、久豊公師を帥て是を討す、穎娃氏戦ひ敗て逃亡す、於是肝付河内守兼元カ二男次郎三郎兼政後美作守と稱すに給ふ、因て穎娃を以氏とす、穎娃氏傳云、此時、久豊公兼政男に準す、兼政辭して伴姓を冒す、子孫に至て山川を兼領す、義久公の時、左馬頭初て久字を給て久政と稱す、光久公の時國老に任す、義久より世々久字を賜ふ、近世、左京久周後内膳と稱す、繼豊公・宗信公に仕て國老たり、或云、小牧氏ハ久豊公日州に在の日、近侍して忠を尽す、故に穎娃に封せらる、按に諸貴、公日州に趣の日、穎娃を兼政に封すと云、大に非也、公日州に移るハ應永十年なり、小牧氏を撃ハ今年なり、其説攻スシテ破ル、公又別府を征す、別府氏降る、公其家老田

中周防・宮原兵庫を召て曰、別府弱冠に満たす、汝等謹て是を輔けよ、彼をして鹿兒嶋に在て我に事へしめは、女を以是に妻せん、二人謹て命を奉す、鹿兒嶋に移り、傳云、別府氏より鹿兒嶋に在て、公に仕ふ、後、今給黎長門守久俊、伊集院頼久に因て降る、傳云、公久俊降を聽す、頼久、公上木場城に入り、久俊を長里知覽に趣く、カ罪を數て、固請テ後可く、屬す、に封す、按に、久俊是ヨリ坂カス、三子アリ、長ハ久慶ト云、子孫喜入氏ノ臣トシテ鹿籠に任ス、次ヲ久昌ト云、其孫右衛門兵衛尉久道、後下野入道魯笑ト云、貴久公に仕テ功アリ、其子下野守久治入道抱節、義久公に仕テ老中タリ、其裔今ノ伊藤久郷是ナリ、久昌ノ弟ヲ久綱ト云、

其孫肥前守久春入道元榮、義弘公に仕へテ老中ニ任ス、共ニ伊集院氏ニ復ス、抑知覽院ハ佐多氏の本望たるを以、其祖忠光知覽院ヲ將、軍尊氏ニ封セラル、伯耆守親久佐多氏、四世、を上木場城に封す、山田小野町十八を大寺美作守に給ふ、是ヨリ大ニ移、阿多・鮫島も風を臨て降る、河邊城にハ衆大太郎を奉して未従はず、久豊公の威風靡然として南方を僣すを見て和を請ひ、城邊を棄て山門院に通る、後肥前國高ノ為ニ誅セラル事ハ永享二年ニアリ、南方初て定る、久豊公河邊に入り、坊泊を巡て歸る、北郷中務少輔知久、公に告テ曰、世子、貴久公又三郎ト稱ス、いまた夫人なし、新納近江守忠臣女アリ、貞淑婉容以て世子に配すへし、公可す、宮室を造て女を迎んとす、爭亂速に功なし、於是忠臣世子を中城志布に迎て婚禮を行ふ、

903 「豊州家元祖譜中」

季久

- 修理亮 豊後守 越後守
- 應永廿年癸巳誕生、母上原某女也、
- 九代之 太守陸奥守久豊主三男也、
- 居住于帖佐瓜生野也、

904 「正文在安養院」

御立願事

右、意趣者、如本意成候時者、日向大隅薩摩三ヶ國拾町并於當年中者、打圓次第、所領依大小、可奉寄進之狀如件、

應永廿年正月 日

嶋津修理亮久豊(花押)

「久豊公御譜中ニ在リ」

905 「一乘院文書」

奉寄進島事

堀堂王一所 東限山 南限横之谷 西立堀 北泊境之堀

右、此島者、中坊之内道通之重代之在所たりといへとも、談義所之内南坊覺本阿闍梨、限永代奉去渡事実也、此上者於子と孫とに異乱悩申すましく候、若自然申輩候へ、以此狀お可被爲本者也、仍寄進狀如件、

應永廿年癸巳三月四日 沙弥道通(花押)

906 以前田代村免許狀遺候、又依今度之忠節領知所、天役方

雜公事并追捕之事所相除也、仍爲後日狀如件、

應永廿年四月二日

田代殿

(元久) 玄忠(花押)

907 『福昌寺文書』

薩摩國谷山郡延命寺之領之事、任先寄進之旨、不可有相違之狀如件、

應永廿年四月廿五日

久豊(花押)

延命寺

908 「正文在樺山源三郎久清」

日向國宮崎郡戸次丹後守跡之事、任御下文旨、可令領知之狀

如件、

應永廿年卯月廿九日 久豊(花押)

(教宗) 樺山安藝守殿

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

909 「國史 義天公」

二十年癸巳夏四月二十九日、公使樺山教宗領戸次丹後

守舊領宮崎郡如故、據島津文 流系圖冬 公引兵擊菱刈院凶徒、



行至吉田、山田聖榮自記云、吉田氏、蒲生氏迎公而、伊集院賴久

聞之、夜襲清水城、北原氏家臣某守門、陰爲內應開門納

之、賴久縱火燒城、伊佐敷三郎九郎忠豐、佐多氏義、伊地知

新左衛門尉季兼、秩父十郎兵衛系圖、季、北原彌二郎、太郎三

郎、據義天公舊譜、山田聖榮自記、應、副田、澁谷族也、入來

馬系圖、澁谷重門二子、長曰彈正少弼重賴、少曰淡路守重良、重賴二子、長

曰彈正少弼重長、少曰副田伊豫守、下原羅合戰有副田淡路守、此云副田

某、然承譜言重良爲下村嗣、不言爲副田氏、俟考、重長在麥刈陣、一句

虛叙、別、十一月十二日、公引兵擊賴久、河田右衛門尉

無所考、右衛門尉無名、下文卒都婆銘有川田義祐弟助四郎、川田長右衛門系

圖、右衛門尉盛在玄孫、孫曰助太郎祐義、祐義子曰義祐、河田右衛門尉疑是

義祐、小山田伊賀丞範清、比志島、前田又四郎範國、比志島副田淡

路守等進與賴久戰於原羅、獲町田土佐守直久、門實彌五

郎、伊集院十右衛門家藏文書、有門實某、領伊集院石

谷村門實圖、因以爲氏、子孫死於川津之戰、無後、日置肥前守、

大田三郎四郎、島津支流系圖、伊集院賴久弟伊豫守久勝、等數人、

町田直久、助久之孫也、町田助久見第五、遂圍賴久數匝、賴

久自度不免、欲自殺、吉田清正、蒲生清寬使人止之、而

言於、公曰、請免賴久、不許、固請、公曰、我雖怨於賴

久、然亦不得不看二君之面、乃免之、賴久有臣、曰野田

入道道意、既老矣、賴久之襲鹿兒島也、遮道而諫之曰、

縱取清水城、將如後圖何、不聽、果敗、據義天公舊譜、島津

山田聖榮自記、應永記、比志島軍人、較島民部左衛門家藏文書、應永記、

十二月七日、賴久夜襲清水城、義天公舊譜、十二月七日、賴久夜襲清水

城、十三日與賴久戰、月日不知何據、而比志島軍人、較島民部左衛門家

藏文書、並以原羅合戰爲十一月十二日事、今從之、且賴久襲清水城、

在原羅合戰之前、而應永記、舊譜並云十二月者謬、又舊譜、聖榮自記並

云、公與賴久戰於小野、而比志島氏家藏文書云戰於原羅、今從之、然小

村之際、言小野亦可也、言原羅亦可也、十二月七日、比志島久範

、大寺美作守等迎入東福寺城、居亡何、下大隅等兵至、

船艦相衝、又副田某將數百人至、言於、公曰、重長方在

人、登東福寺城、乞師於下大隅、而伊集院殿引軍屯原良

村、麾下可百餘騎、公進升生殺坂、生殺坂在府城北、讀曰

改名嶺、降松尾坂、松尾坂在諫方社、至清水城下、佐多親久

見坂、左、距府城半里、

物六帖、譯爲保字、行前者問曰、自奚、曰、自鹿兒島、問鹿

兒島事曰、伊集院殿下清水城、北原三郎太郎殿以五六十

事、只當向城自刎而已、登時騎馬南馳、清正、清寬等騎

能屬者七十餘人行至宮腋、吉田鄉宮之浦、道逢戲師、戲師

加之、此云放下師、行前者問曰、自奚、曰、自鹿兒島、問鹿

兒島事曰、伊集院殿下清水城、北原三郎太郎殿以五六十

人、登東福寺城、乞師於下大隅、而伊集院殿引軍屯原良

村、麾下可百餘騎、公進升生殺坂、生殺坂在府城北、讀曰

改名嶺、降松尾坂、松尾坂在諫方社、至清水城下、佐多親久

見坂、左、距府城半里、

物六帖、譯爲保字、行前者問曰、自奚、曰、自鹿兒島、問鹿

與伊集院氏戰、八日復戰、僧仁久頼弟、郡山源左衛門尉・竹

下伊豆守範春入道尊仙比志島氏支族、川田助四郎川田義祐弟、小山田又

九郎・前田源五郎等戰死、據比志島軍人家藏應永二十一年正月十六日死事家臣卒都婆銘合戰結局不詳

910 大隅國下大隅郡西方木志之村白石諏訪大明神御職地之事

神田ハ小はうさこのならひ二反

松崎そへ 二反卅

はたけへにしのかゝ山のたにをさかう、

南ハ松崎のはまをとほりたる中ほりをさかう、たるはか

りの子孫信末ニ給所也、

應永廿年大藏 癸巳 六月一日

藤原忠元(花押)

911 『水引執印文書』

(編纂書) 「さちうのゆつり状」

讓与 豊前(執印友令)入道義忠所

薩摩國八幡新田宮執印職并五大院主職之事

右、於件所職者、願眞重代相傳之地也、然間次第相傳之

手継等相副而、限永代讓渡早、次所ニ散在之於田島等者、

本證文仁爲明白之間、任證文之旨、無他妨、永代可令領

知、仍爲後證之讓狀如件、

應永廿年六月廿九日

(執印友給) 沙弥願眞(花押)

912 『正文在志希志大慈寺』

奉寄進

大慈禪寺内龍護庵

日向國救仁院内伊崎田條中蘭村之事

右、水田蘭不殘一所、同百姓足臨時檢断共奉寄進所也、

天下安穩、一家繁昌、殊者道完爲菩提寄附之狀ニ如件、

應永廿年七月 日

(新納) 越後權守久臣(花押)

913 「久豊公御譜中」

「正文在福昌寺門前西郷休兵衛景州」

福昌寺大工職同田島敷地等事、申付此道廣禪門候也、

右、彼水田二町、蘭三ヶ所、於定後代不可有違乱之仁候

也、若其儀候者、出家在家弟子永爲不孝之仁、不可爲眞

梁弟子候也、仍爲後狀如件、

應永廿年癸巳 八月十六日

石屋(花押)

914 「正文在禪山源三郎久清」

日向國山東諸縣庄内嵐田四拾町事

右、爲給分所宛行也、任先例、可有領知之狀如件、

應永廿年九月廿五日 久豊(花押)

〔教宗〕  
栂山安藝守殿

〔上包〕「本書ノマ、」  
嶋津次郎三郎殿

久豊

〔此御書、栂山氏三代教宗譜中ニ在リ〕

正八幡三所大菩薩御寶前

右、大隅國竹子小山田村者、爲往古神領有重色社役云々、

而或由緒掠知行之、或依奉公之忠勲、申成恩賞地之条、

旁以叵測神慮者哉、所詮、於當敵加退治、專國家安全之

道、弥可奉仰神威之旨、比心底之上者、爭不令守給久豊

之武運哉、然間彼兩所之事、歸本源、今又所奉寄附之狀

如件、

應永廿年十一月十五日 修理亮久豊(花押)

915 「正文在安養院」

立願

山王御寶前

右、旨趣者、三箇國大方爲大綱之上、此刻殊折角也、然

間、人者依 神之徳副理運、異于他信心者哉、仍今度於

守弥武運給者、雖爲無差之計、以立錐之地、可奉寄附狀

如件、

應永廿年十一月八日 修理亮久豊(花押)

〔久豊公御譜中ニ在リ〕

917 『川上氏文書』

薩摩國河邊郡之内泊之津事、爲給分宛行所也、任先例、

不可有領掌相違之狀如件、

應永廿年十一月廿二日 久豊(花押)

河上三郎左衛門尉殿

918 應永二十年癸巳

十二月七日、佐多三郎九郎忠豊 伯耆守親久の弟にて伊佐敷も氏にす、此夜伊集院頼久

東福寺城を襲へるゆへ、城主の面ヲ拒き戦て死之、譜は 此夜伊集院頼久

毘沙門堂にて從兵十一人八日ニ戦死し、年三十三とあり、北原彦

次郎 聖榮記ニハ戦 北原彌次郎師純 彦次郎弟也 北原太郎三郎

政純 梶原ともあり、是ならん、應永廿四年に作 伊地知新左衛

916 『正文在國分宮内社家澤氏』

寄進

門尉季兼・天辰式部二郎聖榮記ニハ天辰打死ス、并ニ式部次郎云々トアリ、然レハ一人ノ名ニアラサル、遠矢某聖榮記に天辰討死す、并ニ式部次郎云々とあれハ、一人の名にあらざるへし、遠矢無覺といふも誤ならん、聖榮記に、遠矢無覺仕候而、兵具不持に依り云々とあり、無覺悟と云ことなるへし、此日頼久方にて小野村にて戰死するもの有り、町田土佐守直久・奈良八郎三郎皆敵方ならん

「義天公御譜中」

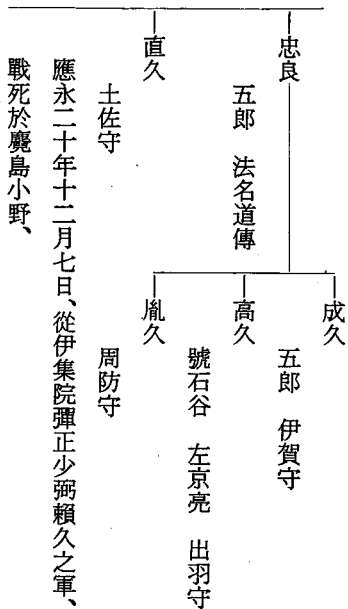
一應永廿年癸巳十二月上旬、欲討菱刈凶徒、發軍衆、久豊在途中吉田之際、伊集院彈正少弼頼久謂天之所與我也、且通北原某家臣之守鹿兒島本城之門戶者、同七日夜暗密入精兵於城中、于時北原之弟彌二郎・同太郎三郎在城裏、當家重器小十文字之太刀以下爲警衛、故早對敵兵、雖致防戰、忽兄弟共不免討死、佐多三郎九郎忠豊号伊佐敷、天辰式部二郎・伊地知新左衛門尉遂戰死矣、爰有珍事、有遠矢某者、雖爲年來家臣、不幸領地盡不知行、不帶一刀、欲防禦無干戈、忽然求得竹竿防所攻入之敵兵矣、今夜甚暗、宛如振大太刀、恐其所害也、楚忽攻寄無敵兵、漸城裏放火之餘光、顯竹竿之不足畏、丁此之時當敵前來、遠矢氏振竹竿能會釋、雖然自末至本、如編木被打碎、而後不免屠殺之害、無妻子無領地、無所以稱其名之人、悲哉、哀哉、翌朝告麿嶋沒落於吉

田來矣、久豊聞之則曰、吾運已盡矣、今也敢不有保一身之念、雖然一族家臣等死生存亡、不可去留之不知方所、且復向于歸路敵兵遂戰死是幸也、不可猶豫、已將發出、當此時也、吉田若狹守・蒲生美濃守相共進出、曳裾跪座諫曰、居太守之位好匹夫之勇、有急遽之爲發足、則誰有宗貴之者乎、今也蒲生之士卒大半候于吉田、雖爲無勢催吉田・蒲生之騎步、引卒以可相從、片時可有猶豫、久豊報曰、兩輩之志岱山不高蒼海不深、雖然非可徬徨之時、單騎馳到于麿島、幸而得入故太守之宅地、以爲自殺者實予之所願也、各廻思慮重生保身子孫繁榮之謀可有此時、於予者忽進發將駕馬、于時美濃守變色曰、吾思抽無二之忠功、而捨蒲生、一人之息男與三郎太郎俱將扈從、敢勿疑、若狹守亦無違意云々、而後各駕馬以進發、僅廿有三騎也、素從久豊來者共幾五十騎許、有勇氣無臆氣、解旗手於宮腋而到壇所、則會放家之裏鞠於網、挾篠竹於腰走來、先陣之輩問曰、汝自何所至何所乎、答曰、自麿島、且曰、伊集院之師亂入麿嶋放火本城、北原三郎太郎引士庶五六十人、入守東福寺之古壘、渡早舟於下大隅、請渡援兵、頼久返麿島、陣原良、其兵殆一百許輩歟、件之放家素所以久豊能知

之者也、丁此之時、川田氏・比志島氏馳以向至矣、久  
豐謂兩輩曰、面々來于此者厚意不淺、何以謝之乎、雖  
然面々思慮在此時乎、屬賴久之旗下則後日之榮何可疑  
乎、此言未終之際、川田某飛下於馬、拔太刀刺燒芝兩  
三次、而後向予曰、今度我之身命獻太守、敢勿疑駕馬  
矣、比志島同意云尔、久豐公欣々然向松尾坂、而未見  
敵兵、既馳到坂下、則自佐多伯著守・川上一族・大寺  
美作守・長野・北原以下一族家臣等至市人庶卒入東福  
寺古壘、此藪裏彼林間率從類以群聚、見之則載欣載奔、  
渠等歡迎各候路頭、先詣諏方大明神、而經清水入本城、  
往區々地留心密察曰、城裏雖多焦土行步人跡、無防禦  
鬪戰之地、只隔精木前川與總門之口有一戰之體耳、爰  
窺福昌寺之門戶、則有出入人坎、而後入東福寺城、臨海  
上則自廻・下大隅小舟之援來者、或二三艘、或五六艘、  
或八九艘、爭先、雖然疑未定到着地、於茲乎揚狼煙於  
東福寺、由是各上下三百人到于當城、又爰未知誰某幾  
率百人許馳以至矣、疑是非味方、蓋所以平山氏之救賴  
久來乎、少焉、見近來則法師武者也、然則副田某進我  
之前達旨趣曰、重長當日在菱刈之陣中、老體之兄不能  
冒嚴寒企行步、使予益勢、故走以參越云々、久豐聞此

言感深意無比倫、合掌流淚、如此漸々相加爲多勢矣、  
是以同月十三日、發向原良・小野、川田某對四郎之坂  
敵、相挑之際、谷山之兵賴久、動地來、對川田之兵、  
各盡筋力挑戰、漸攻入小野在家、于時賴久之族、日置  
肥前守・弟孫太郎・町田土佐守直久斬獲之矣、奈良八  
郎二郎與大田三郎四郎合戰移刻、漸捨干戈引組欲決勝  
負、已八郎二郎組負爲下、三郎四郎將斬首之際、忽兄  
四郎左衛門尉來于其場、斬獲三郎四郎矣、八郎二郎得  
兄之救、幸而免死、又捨干戈提太刀、向強敵、切通大  
勢之中、于時益山入道從後馳馬、八郎二郎願向將引落  
益山於馬下、其勇氣不可當、雖然一人何勝衆兵乎、八  
郎二郎遂所屠殺、漸賴久之兵敗而斬獲多矣、乘勝圍原  
良陣、賴久銳兵悉遂戰死、候左右者唯出家老人若冠被  
傷等耳、故失防禦道將自殺之際、吉田若狹守・蒲生美  
濃守不忍渠之見自殺、向我請有免、我答曰、今度兩輩  
忠功何以謝之乎、雖然此事敢難許容、其故何者、匪啻  
遂多年憤之未散耳、陷居城數輩之一族家臣等遂戰死、  
屠殺渠以宜祭亡神、何宥之乎、兩輩強請不止、於茲乎  
久豐不得已而許諾曰、忽雪會稽之恥者依兩輩之籌策也、  
宜報其忠以此求、如此則令居城與領地悉去之、亦不違

〔町田氏系圖〕



應永二十年十二月七日、從伊集院彈正少弼賴久之軍、戰死於麿島小野、

義理、然而以報兩輩之忠功、徒所以宥免也、兩輩欣然往達賴久、且陣中之士卒共使警衛之兵送伊集院、爰賴久之家臣有野田入道道意者、數年有執事之列、今也老去不拘政事、無爲之身任去留、只修念佛而已、今度賴久及發向之期、加諫言曰、吾既老衰不拘政事、爲二六時中念佛之身、而忠臣雖在吠畝、猶不忘君、是以曳裾止行、今度得勝利於麿嶋、而後來何不爲招覆敗之基乎、勿敢進發云、息男親戚等曰、首途之砌不思議之諫言、老耄之至退之、賴久亦不能許容、而敗軍之今雖悔無益、嗚呼不思也、因茲道意存生之間再所以不言也、

〔久清

號阿多 五郎 飛彈守 子孫記別紙、

高久

號石谷 左京亮 出羽守 法名善仲

領石谷爲履、故號石谷、

嫡家俊久早世而無嗣子、故高久爲家督、

高久奉仕于 久豊公・忠國公二代太守、于時伊集院

大隅守熙久嫉之讒、太守招入高久于伊集院、高久馳

到、熙久兼伏兵妙圓寺前圍高久、高久力戰數回而遂

死、熙久掠取高久之遺領矣、

賴本

左京進(亮) 法名月谷

高久爲熙久被害、時賴本在麿府、奉訴高久無罪被

害、以蒙恩免、而不數歲熙久積惡發覺、太守以大

軍攻擊之、熙久矢竭刀屈奔他邦、維大哉、

梅吉

伊賀守

親久

又太郎 伯耆守

永和元年乙卯誕生、

應永二十年冬、伊集院頼久叛 太守公、襲魔府本城、

且陣原羅、親久從軍 公、其功若干、

一 同廿年癸巳十二月上旬之比、匠作菱刈ニ一勢被遣而、

御身ハ吉田ニ中途成間トテ御座有處ニ、伊集院ヨリ鹿

兒嶋ノ本城ヲ忍落シテ被蹈之由告來、匠作打案シ玉ヒ、

弓箭ノ儀理雖不珍、今者當家之重城也、三ヶ國之益也、

伊集院ノ郎等ハ定テ屋形ニ取入、福昌寺ヲ焼拂、惠燈

院ヲ打破、本尊モ抵落散々式ニテソ有シ、左ハ可無行

方、只鹿兒島ニ一人馳越テ、故殿ノ屋形ニ而可腹切夏

本望也、面々御夏者、能々可有思安被仰出之處ニ蒲生

美濃守承、是者口惜キ仰哉、愚身ハ蒲生ヲ捨、一人持

候三郎太郎ヲ御供申サセ候物ヲト被申臬レハ、吉田若

狹守某茂如此馬ニ打乗々々鹿兒島ヘト而ゾ被越計ル、

其勢廿三騎心武クゾ見得ニケル、城者敵之大勢ニテ取

乘、御方ハ廷弱五十騎ノ内也、宮腋ト云所ニテ旗之手

ヲ解、壇成所ニ打上テ見給得者、放家之鞆ヲ繳裏襖脇

ニ指而參合、如何ニ汝者何ヨリソト問ヘハ、鹿兒島ヨ

リト申ス、左テ何夏カ有ソト被尋者、東福寺ノ古城ヲ

ハ北原三郎太郎殿取構ラル、地下之侍町ノ者五六十人

程ニテ被路候、谷山・下大隅ニ早船ヲ被遣候ト申、伊集

院殿者甲百計ニテ原良ニ被引退候由依爲申上、此放家

者御屋形之不便ニ被仰下臬ルハ其故也、斯リケル處ニ

河田・比志島參合、匠作御覽シ玉ヒ而、面々ノ夏社痛シ

ケレハ、只伊集院之手ニ付キテ後可落居被仰刻、河田

馬ヨリ飛下リテ、差刀ヲ抜テ燒芝ヲ二三度刺テ、今度

身上ヲ可奉任貴殿ト云テ馬ニ打乗ル、其時比志島・河

田同意申上計ル、屋形御惑ニ見得玉フ、然者則御勢ニ

爲被付也、去程ニ蒲生ノ在家寺家一字モ不殘、自平山

押寄テ燒拂夏者無情仕合也、是ヲ不爲夏共鹿兒島之生

殺ト云所ヨリハ、引懸々被打下計ル程ニ、河上金吾ハ親

ヲ幅而御馬ノ七寸ヲ不離、手繩ニ々々ヲ爲取違様見得

ニ臬ル、久豊ハ東福寺ノ城ヲ懸御心ニ給、長谷場者山

之嵐ニ御旗之足ヲ、敵方ニ吹掛サセテ見セタリケリ、其

時ニ御方ハ力付キテゾ見得爲リ計ル、御屋形ハ東福寺

城ニ打入給ヘハ、廻・市成・下大隅・向之島ノ小船共、鹿兒嶋ヲ差テ二三艘五艘十艘漕連タリ、下説之諭ニ萌又董ト、莖ヲ河水ニ切漬如爲、自東福寺之城被燻火、諸船ハ見之而力付テゾ、彼古城ニハ取上ルル、左手社上下三百人ニハ成ニケレ、爰ニ不知誰共其人數百人計、鹿兒嶋ニ向ヒテ足早打來、平山之人々敵方ニ成合力サラデハ、今程味方者不可有之被成疑慮、遁世者走參、清色殿申モ終ネバ、副田方ニ而屋形ヘ有對面被申ルルハ、重長菱刈參未歸候、兄ニ而候者雖可參上候、寒中之間先以愚身參候ヘト被申聞セ候間、急速ニ馳參候ト被申上、屋形モ生涯之御志トテ手ヲ合テゾ被成御感ル、昔漢ノ項羽カ沛公ヲ得テ其時軍ニ勝ツ、本朝之賴朝モ石橋山ノ合戰ニ打負テ、無爲方之處ニ舎弟九郎太夫判官ヲ得タリシカ如シ、今ノ屋形左社者喜覺ケメ、去程ニ伊集院方ニハ馳續人モ更ニナシ、東福寺之城ニハ彌成大勢間、霜臺之計トシテ、城ノ人衆宗徒ノ人ヲ撰拔テ被呼取ケリ、残ノ者共ハ中々心清ク思出之討死ニ成ヘシ、亦雖被寄召、傍輩ヲ捨可行カナンド云族有リ、去程ニ河田ノ勢ハ四郎ガ城ノ勢ヲ見付テ鏖鏖懸計レハ、谷山之勢ハ地ヲ動テ指合タリ、此人々霜臺ノ陣ニ成合

兼、一人モ不残被討畢、霜臺モ一足討死ニセント、陣中ハ彌瀆見得ニケル、然共吉田了心以媒介、霜臺モ城ノ人衆モ無支故被歸陳陳、昔平家之人々北國ノ軍ニ打負テ故郷ニ如歸、其ハ壽永ノ夏ノ事成レバ語傳タル計也、是ハ今日ノ前ニ見テ痛共愚也、

923 「國史 義天公」

二十一年甲子春正月二日、伊集院氏攻小山田範清於小山田城、範清與族人出羽守義村・淡路守貞隆・貞隆男孫次郎貞行等、伏兵大迫野首擊之、伊集院軍敗走、追至竹山村及石谷村而罷、據比志島軍人家藏文書、小山田村有古城墟二所、大迫不審、今大迫村有地名野首、而小山田村大迫村為隣、疑是大字誤欠一點、三月二十三日、村高辻、伊集院鄉有竹之山村、公賜比志島久範書曰、與君終身如一、久要不忘平生之言、有負此言、諸神殛之、公已免賴久、恐久範內懷疑阻、故以此書諭之、據義天公舊譜、比志島軍人承圖、夏六月二十三日、公使禰寢清平領大隅西俣村、據義天公舊譜、小松氏系圖、按應永十八年、公割西俣村之地以與清平、至是蓋以一村全地與之、二十五日、公許禰寢孫次郎元清以二十町地、曰、俟有闕所、然後授之、元清、清平之子也、同伊集院賴久使中村但馬守・野田某・時吉某、守給黎城、揖宿路絶、揖宿在給黎南、自鹿兒島如揖宿、道由谷山、給黎、故守給黎則揖宿路絶矣、公將吉田・蒲生等之衆、圍給黎城數日、



「久豊公御譜中」

弗克、頼久救給黎、乞兵於川邊・伊作等、皆許之、據義天公  
舊譜、山田聖業自記、應永記、喜入郷上之村有古城城、在肝付  
典膳別館西南二十餘町、川邊謂上總介久世、伊作謂大隅守久義  
 即位也、使伊地知縫殿助詣碓山城、謂久世曰、自今以後願  
 釋宿怨、久世聽命、復使本田安了謂久世、欲共討伊集院  
 頼久、久世許之、至是 公軍平等寺、久世與叔父山城守  
 忠朝出軍、至市來宮園而止、公使趣久世出桑波田寺脇、  
 久世觀望不進、頼久伺之、以精兵一千餘人擊 公軍、  
 公敗走、頼久逐窘 公、吉田某・肝付某・加治屋大藏等  
 還鬪甚力、公乃得免、而久世遂附頼久、頼久與之川邊、  
 由是久世從碓山徙川邊焉、同上、初久哲公獻怒翁公川邊、怒翁  
 公以與伊集院頼久、頼久又以與久世、  
久世遷居川邊、平等寺在伊集院郷、麦生田村、郡村高辻候、伊集院有桑波  
 田村、寺脇村、市來郷湯田村有地、名宮園、大里村亦有宮園間、吉田氏支  
 族有加  
 治屋氏、秋八月朔日、頼久率川邊・伊作之衆、至松ヶ平・荒  
 平、喜入郷上之村有松ヶ平、下  
 之村有荒平、相去一里十町、 公擊頼久、遣本田某、擊伊  
 作・川邊軍、本田某敗之、而 公與頼久戰不利、頼久乘  
 勢入給黎城而守之、會球麻遣兵助 公、絡繹不絶、頼久  
 見之氣沮、六日、頼久宵遁、公取給黎、分給大寺氏・長  
 野左京亮等上永吉二十町地、賜和泉氏下永吉二十町地、  
 蓋其本領云、同上、喜入郷今無上永吉  
 ・下永吉之名、其地不審

「久豊公御譜中」

「正文在比志島左京義時」  
 祝言千喜事舊候了、兼又今度依身大綱、前々のごとく依  
 申談候、領内わつらひなく候もその御儀をたて候し者、  
 無別子細候、今度又伊集院事、（頼久）後ハとも候へ、日本國の  
 聞得と申、手ニ着候もひたさら御志ならぬ事なくほとに、  
 是非身本意をへ、滿家面々よりとつけさせられ申たくに  
 て候程ニ、身生涯ハ不及申候、子孫々あいつき候ても、  
 日本國大小神祇 伊勢天照大神 熊野三所大權現 正八  
 幡大菩薩 諏方上下大明神御照覽候へ、誰々如何様方便  
 をもても、中あしき様ニ申候共、今度之御志をわすれ申  
 ましく候、目出成行候て、所領出來候ハ、力を付申候  
 へく間、於此内も荒説和譏申候とも、もちひ不被用、水  
 魚思ひたるへく候外、無他事候、恐々謹言、  
（上書）（久豊）  
（形永廿一年）  
 三月十五日 久豊（花押）  
（付巻）  
 八代久豊御年四十之時御書也  
 比志嶋殿  
 久豊

「久豊公御譜中」  
「正文在祢寢右近重永」

「正文在栲山源三郎久清」

嶋津庄之内蒲生七郎給分壹町九反、代用途拾九貫仁所令  
沽却也、早任先例、可被領知之狀如件、

應永廿一年四月二日 久豊(花押)

栲山安藝守殿

「此御書、栲山氏三代教宗譜中ニ在リ」

「上カキ(久範)  
比志嶋殿  
(付箋)

八代久豊御年四十之時御書也

久豊

祝言事舊候了、抑伊集院方依被悔前非候、同心仕候、御  
方様事、如前々申談候上者、於于生涯相替申事あるまし  
く候、伊集院方先知行之事候へへ、無心元もやおほされ  
候すらんと如此申候、日本國大小神祇 伊勢 熊野 天  
神 八幡も御爵候へ、令申談候分、違篇之儀あるましく  
候、委細者使者可申候、恐々謹言、  
三月廿三日 久豊(花押)

「全上」  
「全」

嶋津庄大隅方西俣村之事  
右、爲祈所々相計也、早任先例、不可有領掌相違之狀如  
件、

應永廿一年六月廿三日 久豊(花押)

祢寢山城守殿

今度現形之事、爲忠節之上、始而當參之間、爲其祝闕所  
出來時、二十町所可宛行也、仍證之狀如件、

應永廿一年六月廿五日 久豊(花押)

祢寢孫次郎殿

「載本田元親譜」  
「引返シウラニ」  
「ミヤ地の帳」

鹿兒嶋郡内宮地田島并御得分事

- 一所七百分文 いしきのたうけんかやしき
- 一所八百文 同所たうせんかやしき
- 一所七百分文 たかミたうせんかやしき
- 一所五百文 同所四郎ひやうへかやしき

一所一貫文 ひらのかくけんかやしき

一所二百文 おのにあり

一所五百文 みなくちのやしき

一所一貫文 たてのゝきたのその

一所八百文 かうすきのせと口たん六かやしき

一所六百文 同所せんかんかやしき

一所三百文 さよみさか

一水田の分

一町御ようさく代四貫文

一町三反代四貫九百文此内五段ハ御百姓給候、八段代ハくはうへめされ候、

以上せに十六貫文此内五貫五百文御ひやくしやうかと五のゆるしもの、四貫文御ようさくの分

一若宮神田の分

一所八百文 にしのあまりふくしやうしよりの

さうはくの所

一所二百文 わかみやその

一所八百文 たかみのわかみやのまつてん

一所百文 はたまほり

水田七反代二貫五百六文 まつてん

以上四貫四百六文 若宮まつてんにて候、

一みや地の内よそへ御つかへし候分

一所七百文 かは山との御かりや

一所七百文 いちゝとのゝめんの分

一所七百文 ひらたとのゝかりやの内はらまきその

一所六百文 やかみとのゝ御せん

以上二貫七百文

惣都合廿二貫八百六文

應永廿一年七月廿五日

930 應永二十一年甲午

八月朔日、本田五郎次郎伊集院頼久ト知寛ニ戦テ死之、一説給察ニテ戰死トモアリ、税所モ同シ、

税所助三郎・細田某指宿城主トアリ、中納某吉田ノ從兵ニテ、兄弟同シク死ス、加

治屋某、

931 「應永記」

一同廿一年甲午、匠作喜入ニ押寄取陣玉ヲ、霜臺・伊作

・河邊成一致有後卷、松平・荒平ト云所ニ打臨而、心

武モ八月朔日ニ一陣追破城ニ離成合共、重御方夏稀也、

匠作方ニハ從求麻大勢馳付糺利、自鹿兒島駒返ト云處

迄支タリ、左レハ此城難持トテ、同六日ノ夜城之衆ヲ

引連テ被引避云々、

932

〔義天公御譜中〕

一給黎者伊集院彈正少弼賴久之領地也、南方者知覽之隔  
大山、伊集院者數十里之路程、而救兵之往還亦不容易、  
其地在指宿與谷山之中間、爲往還之障不可不退治也、  
應永廿一年甲午、久豐自將率吉田・蒲生以下諸所軍來、  
到其地構陣營矣、城之守兵伊集院之野田・時吉・中村  
但馬守等也、日々發精兵雖侮敵城、防禦不怠而未得陷、  
故彌攻寄使敵兵不得出城外矣、於茲乎賴久請援兵於伊  
作・川邊、催南方之兵、八月朔日、諭知覽山欲構陣柵  
於松平・荒平致後攻也、陣幕未成之際、吾之軍爲二分、  
其一分久豐自將向賴久之陣、今一分本田某爲將向伊作  
某、南方陣本田某方得勝利、斬獲伊作・上原等、味方本  
田五郎次郎・大隅等遂戰死、久豐方軍敗、而指宿城主細  
田某及稅所助三郎、吉田之從兵中納兄弟・加治屋等戰  
死矣、賴久乘勝破一陣通城中、雖然無後來之援兵矣、  
丁此之時欲增久豐之勢、自求麻發軍衆馳至當地、是以  
我之軍陣自駒返至城邊充滿焉、賴久諒知當城之難長保  
也、同月六日俟得夜暗、引率城中士卒遁去者也、以故

933

〔上原氏文書〕

指宿往還自由也、給黎既入手裏、則下永吉廿町爲和泉殿  
本領、所以今又充行之於和泉庶子、而居處給黎也、上永  
吉廿町大寺某・長野左京亮等以下昇守夫城之勇士也、

重富跡事、爲關所上者、爲祈所被相計也、任先例、可被  
領掌之狀如件、

應永廿一年八月十九日

久豐(花押)

〔菱刈郡本城郷有重富村此也〕

934

〔伊久一流系圖久世譜中〕

〔正文在澁谷如兵衛重増〕

薩摩國薩摩郡於時吉名内八十町、此内串木野入一曲、  
有別紙之、同國河邊郡七嶋之内嶋一、伊集院内三十町、山門  
院内老松庄菓成河村塩屋一之事、  
右、爲祈所之進置也、早可有知行、仍之狀如件、

應永廿一年九月十六日

久世(花押)

935

〔大口高城氏藏〕

下温田の堤の在所之事、所望申候ニよて無子細給候、若

某身もちなとあひかへり申事候へん時へ、此在所御計にてあるへく候、仍爲後證狀如件、

應永廿二年乙未卯月十一日

(高志)  
重継(花押)

936 「戴山田聖榮譜」

加官

嶋津百王丸

「初忠豊」百王丸 三郎四郎 式部少輔 出羽守 入道名聖來 後志尚ト云

三郎四郎忠豊  
久豊(花押)

應永廿二年八月廿二日

937 「感應寺文書」

攝津國善住寺住持職事、任先例、可執務之狀如件、

應永廿二年十月四日

義持將軍御判

尚祐首座

「是へ感應寺八世大寂尚祐ト申候」

938 「正文在禪山源三郎久清」

加冠

嶋津鍋次郎丸

養子次郎三郎孝久

久豊(花押)

應永廿二年十二月十三日

「禪山家四代孝久譜中ニ在リ」

939

かわのへのこおりの内ミヤのむら松崎のすきのまるの内やけ峯、長興寺江御たいくわんかねたのさきやうとのはんと申候て、きしん申事実なり、四郎ゑもん入道か子と孫くにおいていらんはつらひ申ましく、又ハたのさまたけ候する時へ、此狀ニまかせて御ちきやうあるへし、仍爲後日きしんの狀如件、

應永廿二年十二月吉日

四郎ゑもん入道

政前花押

940 「國史 義天公」

二十二年乙未、公之攻給黎也、川邊・伊作遣兵救之、  
事在 去年、已而乞降、公許之、於是伊作克久之鹿兒島拜成、  
冬十二月、久世之鹿兒島、館于千手堂坊、二十七日、將還、公遣兵圍之、以求川邊、久世以爲縦獻土地、將不得免、欲自殺、福昌寺主大田和尚止之、乃遣本田伊賀守、

941

「伊久一流系圖久世譜中」

謀於留守群臣、伊賀守辭焉曰、見難而免、吾弗爲也、乃遣小田原彈正・柳田大膳、於是留守執事天辰丈徳庵等對曰、群臣願奉孺子以守宗祧、不欲獻地、若乃主之所以自爲、則非臣等所知也、孺子者謂久世長子犬太郎也、時年三歳、據義天公舊譜、總州家譜、應永記、山田聖榮日記、鹿兒島内丸巷口有觀音堂、古者在千手堂坊之内云、

寄心於我、一揆之輩漸變志而歸於太守、由是忽武威衰微、於茲乎、與伊作四郎左衛門尉勝久俱爲評議、止鬪亂成和睦計、而後勝久已往于麿島、見于太守矣、太守先來川邊見我、我亦應永廿三年丙申十二月、往麿島見久豊、會合之懇志酒燕之和樂超過尋常不可勝言、同廿七日、丁欲歸川邊之時、圍千手堂坊之旅宿曰、數年鬱憤無所欲止、以故如斯、雖然去川邊居城者、有罪科可解圍、如有所辭者不許誅戮云云、忽將自殺之際、福昌寺大轉田歌和尚來入旅宿、而曳裾執袂諫曰、或去領地、或去居城、以爲和諧屈同僚之簷下、依時之運、所以古今之不能無也、去公之居城何爲恥辱乎、保生全身宜後來之俟佳時不止、故不得已而使小田原彈正・柳田大膳、達件旨於川邊息犬太郎、其返言遲延不至、空越年矣、小田原彈正反命曰、群

942

「應永記」

臣等共議云、去居城不能、於茲乎、嘆曰、容和尚之言徒逾年、今也雖悔無甲斐矣、乃正月十三日、遂自殺於千手堂坊畢、年三十一、法號惟馨久徳大禪定門、殉死一族家臣、侍中太郎・本田伊賀・小田原彈正・天辰助次郎・黑田・伊駒・金田已下勇士共十一人、中間等戰死也、

一同廿二年乙未、河邊麿島ノ合躰仕給ヒ、匠作河邊ニ有御越、久世ヲ被成御奔走候也、匠作懸テ歸院仕給テ爲其禮、久世ハ麿島ニ有御越也、月迫之事成レバ、可有御歸處ニ、久世ヲ年内者可有御逗留、河邊之城ハ請取可申也ト云、其時久世之御心底於勞難申盡、侍中太郎・本田伊賀守被仰聞者、河邊ノ城ノ開クレバトテ、不可有命生叟、左有人ノ孫、去ル人ノ子也、左テハ一ツ足ニ可思定、河邊之叟者犬太郎アレハ、伊集院・伊作ヨリ不被見離者其迄也ト被仰而、匠作ニ御返叟ヲ切畢、同廿三年丙申正月十三日、被召御腹候畢、御年卅一、侍中太郎・本田伊賀守・天辰助次郎其外人々腹切畢、平等寺之陣引ノ時ニ、匠作息ヲ空ニ突玉フ、泪酌給シヲ語傳怖シク思シハ是也鼻利ト、舌ヲ卷人多カリ

「義天公御譜中」

一爾來伊集院・伊作・川邊各不犯侮我之領土、徒未有屬旗下之意而已、應永廿二年乙未、上總介久世與伊作四郎左衛門尉勝久擬評議定和睦、達其故於我、々亦應諾、由是勝久已來遂一面之參會、而後久豐先往川邊見久世、同年十二月、久世來于麿島匪音遂對面、備盛膳進旨酒、而後及將歸于川邊之期、相圍于手堂坊鹿兒旅館、差价使曰、數年鬱憤無所欲止、去川邊居城則有死解圍、如不然者、令不得去旅館乎云云、久世聞此言、熟以爲縱使雖去居城、豈得保身命乎、速可自殺、於茲乎福昌寺大田和尚入久世之旅館、證古今之例、諫曰、或去領地以爲和融、或去居城以屈同僚之旗下、自古昔至當今、依時之運、所以勇士之不能無也、以去居城何爲公之恥辱乎、保生全身宜俟後來之時不止、不得已而將差价使於川邊、問件義理、而差本田伊賀守、伊賀守報曰、吾今片時不可久世之去膝下不可、故使小田原彈正・柳田大膳達川邊、犬太郎丸二三歲之兒童未分黑白、執事天辰玄徳庵息男阿波介已下家臣等群聚評議矣、長門守亦自知

ケリ、

覽至川邊同議定返言、而翌年正月、小田原彈正到于麿

島曰、犬太郎殿雖爲幼稚、群臣等無二心抽忠節、爲居城之警衛、可運長久之計、久世之生死可有自身了簡、蓋去居城有身命之謀、對他家則可也、於同家則非瑕瑾乎、柳田直留川邊矣、久世聞返事嘆曰、和尚教言強不止、依難辭退徒逾年、雖悔無益、于時應永廿三年丙申正月十三日、自殺于手堂坊矣、年三十一也、殉死者侍中太郎一族、本田伊賀守・小田原彈正・天辰助二郎・黒田・伊駒・金田已下勇士共十一人、爰年來之中間賜末後之盃而戰死云々、久世匪啻爲同族當家嫡流也、非楚忽之加誅、先是伊集院退治之變兼約、將使久豐至敗亡、其憤何不敢乎、其後南方彌含憤、絕人馬之通融矣、誅戮嫡流非久豐之素意、是以剃髮而稱存忠也、

944

「國史」義天公大岳公

二十三年丙申春正月、柳田大膳遂留河邊、小田原彈正反命、久世歎曰、和尚誤我矣、十三日、自殺于手堂坊、侍中太郎・本田伊賀守・小田原彈正・天辰助二郎・黒田某・伊駒某・金田某等十一人皆死、公以伊集院之役、久世期而不至、使已狼狽、故深怨久世必殺之、而後已、

蒲生美濃守 七五七  
 七五七  
 嶋津又太郎 七三三  
 七三三  
 殿 廿一  
 十七  
 十七

嶋津次郎三郎 九二九  
 九二九  
 吉田若狹守 四二四  
 四二四  
 平田七郎 七五七  
 七五七

946

『加治木鹿屋仁右衛門藏書』

犬追物手組事 應永廿三年  
二月廿八日

正月十三日、侍中太郎 久世君内之九千手堂にて自殺せられし時き、一族の人にて殉死なり、本  
 田伊賀守・小田原彈正・天辰助二郎・黒田某・伊駒某  
 ・金田某 此等以下殿原十一人、同しく、殉死とあり、姓氏詳かならず、

945 應永二十三年丙申

公、公之世子也、據島津系圖、總州家執事天辰玄徳庵等、奉  
 犬太郎據川邊城、使酒勾紀伊守守松尾城、據義天公舊譜、山田聖榮自記、

然 公以私怨、殺本宗之子、有慙徳、乃祝髮、法名曰存  
 忠、以示懺悔入道之意、據義天公舊譜、應永記、山田聖榮自記、按義天公舊譜、載玄喜應永十七年二月十八日遣内倉豊前介書、見上卷、島津支流系圖山田氏譜、載玄喜應永十八年八月二十八日照書、樺山氏譜、載玄喜應永十八年九月六日照書、三通皆書義天公花押、玄喜當是法名、而應永十八年十月以後文書、往往書名、至於是年又云、祝髮法名存忠、前後參差、別無所考、闕疑可也  
 月二十八日、公講犬追物、據義天公舊譜、 秋九月九日、大岳  
 公使禰寢清平領大禰寢院先知行瀬筒村、據大岳公舊譜、 大岳

948の1

「正文在樺山源三郎久清」  
 不似付事にて候しか共、一日野三谷雇申候處、懃ニ意趣

應永廿三年二月廿九日 (本宅)  
 元親(花押)

件、  
 右、田島等者、依有所用子細、代用途貳拾七貫文仁本物  
 返ニ所入置申也、折足尋次第可請申候、仍爲後日證文如

合水田壹町 西門

壹町 なもめ田

島 二段 宮内原口

947

『樺山氏文書』

質券地事

別府下野守 五五  
 肝付河内守 十三  
 十四  
 嶋津近江守 九七  
 市來備後入道 七五  
 檢見  
 嶋津上野入道  
 「此手組、久豊公御譜中、在高山衆市來主膳トアリ」  
 安樂七郎 五五  
 柏原豊前守 三七  
 三七  
 市來備後入道 七五



「忠國公御譜中」

「右末弘殿宛ノ裏ニ有之」

追令申候、如此申までにてハ候ハね共、若こしつを

もて御意なども爲請候、か様に申候様ニか、而も思

食れ候へんと存候て進狀候、能く御物かたり候ハ、

悦喜仕候、すへにこそ可申候へ共、人事新躰ニ可成

候之間、夫まで申候ハす、可有御心得候、恐く謹言、

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

伊勢天照大神 正八幡三所大菩薩 天満大自在天神 霧  
嶋六所大權現 神柱兩所妙見大菩薩御爵可罷蒙候、

七月廿三日  
末弘殿  
知久(花押)

若此条偽申候者、殊ニハ

お被仰着候御事悦喜仕候、仍藝州より御狀給候、是又悦喜仕候、此段能く御心得候者所仰候、兼又公方向之事、藝州お憑存候之間、就荒説一日進狀候キ、雖然藝州様く爲御意荒説お承候様ニ一日之御狀見得候、聊無其分、唯只公方之儀計にて候、藝州之我等を御讒候とハ努く不承候、

「正文在根占右近重水」

嶋津庄大隅方大祢寢院之内瀬筒村先知行之事、自下地可被領掌之狀如件、

應永廿三年九月九日  
尊久(花押)

祢寢山城守殿

950 「正文在根山氏」

依有要用、米十石借申早、明年霜月中如法不致六利沙汰者、水田壹町除万雜公事所可避渡申也、若於其内生死習於身有不慮之儀者、自御所圓丸貫爲此質可進置也、仍爲後日證狀如件、

應永廿三年十二月十四日  
存忠(花押)

951 『岸良氏文書』

沙弥崇重讓渡

次郎四郎伴兼善

肝付郡岸良村弁濟使職同田島山野狩倉等之事

右、件田領者、父祖相傳之所領也、而代く之御下知、先祖之讓狀お相副、養次郎兼善、号嫡子所讓与也、然間縱

雖有実子、其時者名次男、兼善之可加扶持者也、若又兼

善背崇重之儀、至于有不孝不忝之子細者、非沙汰之限、或実子、或可爲別之計也、於有親子順儀之孝行者、聊不可有他之妨、仍讓之狀如件、

應永廿三年十二月十八日 沙弥崇重(花押)

952 「國史 義天公 大岳公」

二十四年丁酉秋九月、紀伊守竊與 公爲内應、公遣伊地知對馬守・寄瀨田帶刀長等、將兵接應、紀伊守開門納之、勒兵將攻内城、今給黎長門守久俊救之、久俊、賴久之叔父也、島津支流系圖、久後、伊集院忠國第九子、爲今給黎氏、時居知寛上木場。久俊又求援於隣

邑、於是賴久引三百餘人來援、與別府・山田・阿多・田布施・伊作之兵共守内城、遂圍松尾城、城中乏糧、公遣鹿兒島・谷山等來救之、赴弦尾山至平川而止、谷山郷川村、谷山・川邊等地今無弦尾山、谷山・知寛、川邊三郷接界處、名津以遠、其附近地、總稱津留乃波乃世止、弦尾讓曰津留遠、與津以遠相似、津以遠疑是弦尾、和先遣數人送糧城中、半途爲敵軍所擊、送俗謂山險曰世止、和先遣數人送糧城中、半途爲敵軍所擊、

散而走、會吉田清正・蒲生清寛・新納忠臣・平田重宗・彌寝清平・本田某・税所某・菱刈某・北郷某・樺山某・肝付某等引兵來援、於是合軍進至川邊、與賴久相持未戰、

伊地知對馬守等告急諸將、十一日、諸將分兵爲二、與賴久合戰、皆爲所敗、和泉又四郎直久・直久弟又五郎忠次

・伊地知將監・田代久助・上井筑前守・彌寝清平・清息・蒲生清寛等數十人死、平田重宗直貫敵軍入松尾城、而伊集院軍攻之益急、吉田清正求成於賴久、賴久不許、清正曰、原羅之戰吾與蒲生清寛俱請於 公、君得不死、今日何負我也、賴久乃曰、若以鹿兒島及谷山・給黎見與、則解圍矣、清正請命於 公、許之、以告賴久、賴久曰、

然則先受谷山・給黎二邑、不然吾不出一人於城中、圍之彌固、城中益飢困、平田民部・平田伊勢、重宗之族人也、時在伊作軍中、二人遙呼重宗、薄城而語、因佯爲相戲者、以鯨爲磔、撲城中人、伊集院軍識之、然以業曰講解故不

之禁、由是兄弟親戚若故舊人、各以酒食相饋、城中人乃得救死、而清正又以谷山・給黎授賴久、賴久解圍、諸將皆歸鹿兒島、據義天公舊譜、山田聖桑自記、應永記、和泉直久・忠次・田代久助、彌寝清平・清息・蒲生清寛死於川邊之戰、各見其家系圖、和泉直久・忠次、久親二子也、直久・忠次無子、

和泉氏絶、據島津支流系圖、和泉久親見上卷應永二年、自和泉忠氏至直久五世、而和泉氏亡、伊集院賴久既得給黎・谷山、於是據谷山城、谷山城遺墟在谷山地頭館西十八町許、係舊本村、今稱千輪

千輪、欲如約受鹿兒島、諸將與衆謀曰、前救松尾城、輿尸而歸、又使吾君喪給黎・谷山地、人臣之耻也、今復使喪鹿兒島本城、吾輩何面目立於世哉、願死谷山城以雪前日之耻、衆咸曰、諾、左袒者四十餘人、與吉田清正謀、清正

告公、公使止之、會松尾城戰歿者子弟臣僕、不期而會、

不招而至、暴至三千人、公說、乃親領其軍、發鹿兒島、

行至波平、違谷山城半里、而中村・山田之間不見一人、

中村・山田相去不遠、其間平原曠野彌望、蒼然、郡村高辻帳、中村屬谿山郡山田郷、公疑其有伏、乃構壘、

山、置兵以備之、村、東南去波平半里許、先遣伊地知對馬守

・酒勾某・北原某等挑戰、呼城中人大罵之、城中不應、

公至、圍而攻之、士卒踊躍、爭先陵城、賴久弗能禦、因吉

田清正求成、清正不肯、乃因執事某而以告公、公弗

許曰、必使闔城自刃乃已、執事某固請不已、公曰、使

賴久獻伊集院則免之、執事某曰、使獻石谷村三十町何如、

公曰可也、乃許之平、而取石谷村、據義天公舊譜、山田聖業自記、應永記、冬十

一月二日、公使伊作氏領阿多・日置・南郷・高橋・知

覽院瀨瀨村・河邊郡田部田村・別府半分・谷山郡福本村

・中村等地、據伊作家譜、知寬郷今有瀨世村、郡村高辻帳、田部田村屬河邊郡川邊郷、福本村屬谿山郡伊佐知佐郷、

953 「阿多飛彈守久清譜中」

「正文在志布志土阿多飛彈忠縣」

薩摩國鹿兒嶋郡内中村・郡本、爲料所宛行處也、然者早  
任先例、知行不可有相違之狀如件、

應永廿四年二月六日

忠國(花押)

町田飛彈殿

954 「鹿屋氏藏」

(本文書ハ九五五号文書ト同文ニツキ省略ス)

955 「鹿屋氏文書」

證狀

今度肝付方万事一味ニ御談合目出候、於此内肝付方、万

一無理ニ被致沙汰候する時者、精彩教訓可仕候、若無承

引候する時者、肝付方を捨候て一味ニ可申談候、若此條

々偽申候者、

日本國之大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩

熊野三所大權現 諏訪上下大明神 天滿大自在天神之御

罰を可罷蒙候、  
應永廿四年三月八日 惟忠(花押)

(周防入道) 鹿屋殿

956 「久豊公御譜中」

「正文在谷山皇徳寺」

皇徳寺寺領在所山田内  
(久徳)  
(花押)  
(用久)  
(花押)

桑迫井上蘭一ヶ所 同前田一町二段 岩瀬戸二段 河原  
田册 榎田四段 門前三段新寄進

中村内

砂町一町 合三町二段

山野さかい

東ハ岩瀬戸の田のしもなわてより、西田のうしろの山の  
ほりのとをり、南ハ門のほりのミそとをり、西ハたゝら  
うとのほり、くらゝの尾たてのとをり、北ハ巻田の  
うとの山のお峯のとをり、岩瀬戸田の下なわてまでなり、

此内ハ寺山也、

「裏判」  
(花押)  
「同」  
(花押)  
「久徳」  
(花押)

957 『谷山皇徳寺文書』

奉寄進薩摩國谷山郡山田村皇徳寺田地

在所 同山田内 桑迫井上蘭一ヶ所 同前田一町二段

岩瀬戸二反十 河原田册 榎田四段 門前三段 中村

内砂町一町 合三町二段

永代止万雑苦事、定寺領處如件、

958 奉寄進

(久徳)  
(花押)  
(用久)  
(花押)

薩摩國谷山郡山田之内山ノ口門水田一町伍段并蘭、同  
西田門之内きやうみつ入道門水田一町二反、限永代、  
皇徳寺奉寄進事実也、

右、彼所領者、日向國中河本領とかうし、忠節にて(元久)  
り下給候、在所と此山田を惣翁御代ニ中河之代として本  
領とかうし給候間、了心爲本領之間、志あるに由て、永  
代をかきて、万雑公事をのそいて所奉皇徳寺也、背此旨  
違乱煩をなさは、了心子孫たるへからず、仍爲後日寄附  
之狀如件、

應永廿四年丁酉九月五日 沙弥了心(花押)

久豊(花押)

(上書)  
皇徳寺寄進之狀

「久豊公御諱中ニ在リ」

「久豊公」  
御在判

959 『谷山皇徳寺文書』

きしんしたてまつる谷山のこほりの山田のうち山口村水田一町五段并その事

右、かの所領ハ、日向之中川を本領とかうし候て、(元久)より下給候、其代之地にて候間、了心本領たるへく候間、

志あるにやて、皇徳寺ニ多いたいをかきて、まんさうくうしをのそきてきしんしたてまつる、此旨をそむかへ了心子孫たるへからず、仍爲後日狀如件、

應永廿四年 ひのとこのと 九月五日

沙弥了心(花押)

皇徳寺寄進狀

960 「鹿屋氏文書」

契約

一世上之雖有如何鉢之轉變之儀、申定意趣条々、不可有違篇事、

一如此於申定候中、若和讒凶害之輩出來、有申乱子細之時者、直ニ參會可申披事、

一於御大事者、身之大事と存、大小事申承、迄于子々孫々連屬仕可申談事、

若此条々僞申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊野三所大權現 諏方上下大明神 天滿大自在天神 十三所大明神 御對お可罷蒙候、

應永廿二年九月七日 薩摩守盛在(花押)

鹿屋周防守殿

961 應永二十四年丁酉

九月十一日、禰寢左馬頭清平義天公伊集院頼久と川邊の松尾城に戦玉ふ時、公の師戰死するもの三百餘、山本孫五郎和泉某五代一當レリ、和泉又五郎忠次同しく死す、蒲生美濃守清寛・中原某清寛一、田代肥

前守久助年三十五、猪鹿倉左近將監久矩年五十八、竹添能登守清息或竹崎ともあり、清平弟也、伊地知左近將監重春御内の人限、

江右京亮新納近江守臣なり、上井筑前守・屋ヶ代四郎左衛門尉

・平良某・平田勘解由左衛門尉平田重宗一族なり、田鍋某・津曲某・猿渡某給衆人以、下數輩、遠矢對馬守重勝川邊戰死とあり、後考、田代右

衛門尉清平家臣同時戰死、以下皆同し、坂口太郎四郎・丸嶺仁四郎・只限藤十郎・山之口彌左衛門・山下舍人・岩下八郎次郎

・原口彌右衛門・堺助六・同大炊左衛門・片坂舍人・小牧與太郎・齋藤右京・深川孫六・松崎平右衛門・同

平七・川副新三郎、從卒二十三人平四郎・平二郎等名略す

間歲、酒勾主計指宿城を攻玉ふ  
時戰死とあり

962 宇佐弥勒寺造營之事

爲大隅薩摩日向三ヶ國役、任先規、嚴密可被遂其節之由、  
所被仰下也、仍執達如件、

應永廿四年九月十二日

沙弥在判

嶋津修理亮殿(久慈)

963 『入来院氏文書』

奉宛行、薩摩國滿家院内中侯同西侯、谷山郡内山田村坪

紙別、在之、然者早任先規、知行不可有相違狀如件、

應永廿二年九月廿日

『伊集院領久』  
道應(花押)

清色殿

964 「應永記」

一同廿四年丁酉、河邊松尾之城ニ鹿兒島ノ勢ヲ引入タリ、  
雖然内城者堀ヲ隔タリ、其上霜臺其勢三百計ニテ馳越、  
松尾之城ヲ被取卷、亦阿久寢・伊作之勢重ル間、彌成  
大綱、自鹿兒島・谷山大勢山ヲ越シ薩野原ニ陳取、見

之陳ト松尾之間ニ堀ヲ堀リ水ヲ湛、大木ヲ切懸タレバ  
松尾之通路難通、城之入衆ハ既ニ飢死セントスル間、  
思切テ薩野之勢ニ懸衆リ、霜臺・阿久寢方爰ヲ先途ト  
戰計幸、御親類ヲ始國ノ人々百余人討死ス、都合三百余  
人失ニ衆リ、残之人々ハ可助無方角モ、匠作被聞召、  
犬太郎殿者幼少成間、霜臺之計ヲ以テ何ノ城ヲモ開ヒ  
テ面々ヲ可助、霜臺谷山・喜入兩城ヲ被開者、無子細  
有ケレハ、少モ不更延兩城ヲ被開、其時諸軍勢松尾之  
人衆共ニ被打歸衆リ、此人々於于鹿兒島各有談合者、  
抑今度不思儀成ル於在所ニ而國之傍數十人討死ス、我  
等モ非可遁處ニ、避兩城被助申条喜ヒノ上ノ耻也、軍  
旅進退ハ大將之法成レハ、輕ク城々ヲ去テ被助也、爭  
不酬芳恩哉、左レハ非廉直剛直者可背大將ノ法、正理  
ハ廉直也、無欲ハ剛直也、兵書ニモ、如此命ヲ生キタ  
リ顔ニテ在處ニ歸テモ腹心ノ可病、皆捕儀飲神水、其  
頭々四十六人、其勢三千餘騎谷山ニ押寄テ、沼深田不  
嫌、蹴勤切岸馬ノ鼻ヲ突キ被責、河口平河ハ何モ難所  
成レハ不及後卷沙汰モ成、道口・給黎共ニ兩城被開タ  
リ、是屋形之剛直徳也、

「義天公御譜中」

一犬太郎之臣有酒勾紀伊守者、守川邊松尾城、忽變心將逆戈、應永廿四年丁酉九月上旬、密通存忠招入師旅於松尾城、雖然內城野頸隔陸堅固也、于時長門守即日自知覽上木場馳至川邊、彌以構城警衛不怠、且復請援兵於近邊、故別符・山田・阿多・田布施・伊作之騎步奔走到着、伊集院彈正少弼賴久亦率三百餘員、馳以救來、構城甚堅矣、所以松尾却爲籠城也、因茲廳島・谷山及近方催未發之士庶、構陣於弦尾山口平川、而後地下之士卒等欲窺見於川邊之樣、使數輩人夫肩荷兵糧、相隨之赴山路將馳到、敵兵爲警固通路者悉所以追散也、于時吉田・蒲生已下近方之騎步漸々馳到、欲險山路到川邊、而敵兵衆多未得越山之際、本田・稅所・栗野・菱刈・牛屎之軍衆到着、於茲乎各進半途構一陣於山中、待天時與其變、丁此之時、北郷・樺山・新納・飢肥・櫛間・肝付・禰寢・平田・鹿屋等之騎步、悉渡海來、故進川邊城邊、雖然未能松尾之爲救、各擬群議進寄野頸、而只出步卒、飛羽箭順時之宜或進或退、未發實勢密在城裏似無人者、此際自松尾城使一价忍達陣中曰、松尾城中匪畜窮困、無兵糧絕水路、然而廻籌策唯補渴耳、聞

此言則我之軍中有親子兄弟所緣者、己之存命之間、不忍見開渠之難儀、發大息者太多矣、報件使曰、援松尾衆逾太山到當地、不得其驗徒經數日乎、速決安否可爲一戰、從何地向何地爲得便宜之道哉、再俟一价忍到矣、使者勞苦入松尾城、達伊地知對馬守・寄田帶刀長、其後又一价來曰、總門者已構小陣、相守堅固非所以及了簡、雜野原者廣遠也、自其地向敵城可乎、先發步卒侮敵城則渠亦可防禦、乘其進退之變、攻寄城下破却垣墉、俟挑戰之佳期、穿破松尾塞門突出可較勝於一戰、雖然三日猶豫、而後宜攻之云爾、因茲陣中爲二分、其一分以樺山某爲將師、其一分和泉殿兄弟・佐多伯耆守・山田某・伊地知・吉田・蒲生・栗野・菱刈・牛屎等陣雜野原矣、于時伊集院彈正少弼賴久下於野頸爲內城岸於後、從川流掘二之長堀、湛水伐大木爲其間之垣以向之矣、九月十一日、我兵已進川緣、敵亦出城外隔川流、飛羽箭以防禦也、我兵漸渡川追入敵兵於城裏、乘勝將越垣墉、先者雖落入堀中不爲救助、後者押倒垣墉、先者爲垣下不得進、爭前攻入、然而敵兵更無防禦、其間在松尾之緣者步卒等少小入松尾、于時賴久開陣門手干戈、突出防戰移刻之際、味方軍敗上之一分中、新納近江守之臣

隈江右京亮・上井筑前守・屋ヶ代四郎左衛門尉・平良等戰死矣、近江守持大長刀盡筋力相挑、于時切破冑鉢將向戰死、丁此時安樂豐前守・川野土佐守與後之敵相戰之際、倏然見近江守之危急、切通目前之敵、携近江守退去味方軍中矣、爰平田右馬助重宗者一族勳解由左衛門尉・田鍋・津曲等遂戰死、雖滅勢切通敵軍中得入松尾城矣、大寺某・長野左京亮被傷者深、而幸免死矣、田代肥前守・禰寢兄弟・同山本孫五郎及家臣數十人共戰死焉、同出羽守被深傷亦生存、蒲生美濃守入道遂戰死矣、其一族中原同所斬獲也、又下之一分中、和泉殿兄弟、給黎之猿渡已下十有餘員戰死、伊地知將監亦所斬獲也、吉田・和田・下田・西村之從軍數十人、栗野・菱刈等戰死矣、合戰之勝敗雖依時運與籌策可非、今度敗軍未知孰是孰非也、松尾城者所以從平田重宗之勇士一百許輩、相加前之入衆、無飢渴之可補者莫何之如矣、爰吉田若狹守者兄弟一族遂戰死、不勝哀傷、雖然謂伊集院彈正曰、戰場之勝敗未嘗有籌策之善與不善、而依時之運、故或脫冑降參、或請通路之免逃去、或約後來爲和睦、素未有無其例、今也在松尾之士卒吾請開通路欲退去、宥之者於予乎何之幸之有乎、賴久答曰、

匠作者犬太郎殿親敵、於賴久者有宿意之未散、當此之時何有一人之宥死者乎、吉田曰、先是在鹿兒島原羅之陣、將向自殺之際、蒲生與予同意強以請太守、而救公之身命者今已忘却乎否、今度我之弟及一族家臣數輩遂戰死、唯予幸不死、以發此言臆病之至乎如何、賴久曰、戰場勝敗已下之事非吾未知、今度勝利所願之幸、思是所以天之與吾也、雖然公之先恩亦敢不可空、吾之所言無少違者可應其求、先鹿兒嶋城次谷山・給黎附與此三所、則使松尾之衆解圍無恙赴歸路、且復自今以後止起亂之企乎、吉田某告之於麿島、存忠卽答曰、應賴久之言速可與谷山・給黎也、麿島諸軍歸陣之後可去昇、今度存忠匪音權微恙不得進發、一族他家數輩之勇士遂戰死、旁所以失面目也、速先昇兩地宜救窮困之士、若狹守連件旨於賴久、賴久曰、然則先可領谷山・給黎兩城、其間松尾之士卒可止出入、彌圍夫城警衛者孔堅矣、平田重宗屈居松尾城中、爰伊作之平田民部・同伊勢守在敵城、故隔一隍互發言、漸及狂言、以餅爲礮擲贈松尾城裏、諸卒下部等欲拾取之、重宗輒然堅加制禁、其後伊集院軍中有所緣之人曰、自他和諧已成、今也何有異儀乎、餽酒看果子等於重宗、於茲乎城中少補飢矣、因重宗一



「藝天公御譜中」

人之廉直無衆人之受誹謗、却受敵人之惠、止衆人之飢、所謂仁者無敵者乎、賴久使南方之軍衆往谷山・給黎領知兩城、自身亦發越矣、重宗率松尾屈居之衆發先陣也、賴久在谷山俟麿島之所去昇矣、各歸麿島見存忠半喜半憂、戰場勝敗死生存亡、須誰敢慮知乎、

一從川邊歸陣之輩爲群議曰、今度爲不思議之籠城得救之大軍、不快于心、不幸味方之軍不利、而和泉殿兄弟・蒲生・禰寢已下勇士數輩遂戰死、且復谷山・給黎兩城已去、予之曹得全身命、又將去昇麿島城、太守悲衆人之死救之以焉、何不報其厚恩乎、今度敗軍往古來今未嘗有可比類之時、且令太守去麿島非當家之瑕瑾乎、各全身雖歸私宅、豈可經千歲乎、不如速向谷山對賴久之軍、欲較勝於一戰、縱雖背太守之命、敢不可止、其首謀四十六人其騎步三千餘員、丁將進發之期密語吉田若狹守、若狹守聞之曰、兄弟一族家臣等數輩、且蒲生美濃入道遂戰死、其哀傷無可比倫者、未經旬日雪會稽耻於五日中、何幸之有乎、然則不可移時刻有其詮也、即達存忠、存忠答曰、面々之志素我之所以冀也、雖然既決一約其事

未盡遂之際、變其約帶甲冑提干戈合戰之企再不可然、云拾云恰、對各存忠只失面目而已、雖然若狹守順群議彌爲催促、或主人戰死勇臣、或兄弟一族緣者會斬獲之勇士、同心速欲報當敵、無一人之不進者、故堅不得制止曰、先是權微恙不發川邊者、不快我心、於今度者存忠將以自將、已詣于諏方大明神謹遂神拜退出之際、欲解旌旗之手於神前、于時本田信濃入道安了參進達諫言曰、九州中出師時、對于少貳・大友・菊池等則自身發向可乎、抑亦可依時宜乎、賴久雖爲一族故舊之臣也、唯發軍衆以可伐之、必勿自發云爾、存忠曰、今也何撰敵人貴賤慮強弱乎、只予之在散憤遂宿意而已、勿敢言焉、而後揚旌旗任佳例號小幡一揆、若武者等負芭蕉彌幡、老輩等挾小旗於腰、已發麿島過青屋・郡本・牛碓之濱、先陣之兵已進谷山之篠貫・波平、後陣之兵未去麿島之內、欲疾至而前路充滿軍衆不得亨通、且復濱浦之魚人等、棹舟船爭先向佐屋脇至矣、賴久在本城當敵之爲頭梁、故伊地知對馬守・酒勾某・北原某等率一族進先陣攻寄城邊放言曰、川邊松尾籠城之輩唯今參向、在天地之間絕城外之通融不得參會、今也開城門有發出者、遂一面之佳會爲一太刀之會釋、勿敢遲引、若武者

等高聲匍者多矣、城中之輩不發返言宛似無人者、構陣營於波平、窺中村・山田・上下田間、而未見一人敵兵、疑是屯五ヶ別符川口之壘、欲鷹嶋之絕通融者乎、紫原連續其地且有經路、不如速往紫原相修構一陣、使往還人無障礙、構一陣於榛山警衛堅矣、其後構本營於本城之野頸、城之四面無少間斷着陳攻責者孔急也、上下含憤高於岱山深於蒼海、以故不移時刻依城岸將攻登、賴久匪啻援兵之不至、士卒倦防禦失兵術、故通于吉田若狹守請降、若狹守曰、在川邊爲和諧媒者、思往昔之有其報也、於今度者宜有直訴、是以就執事請恩免、若狹守亦雖不許諾、通內意於執事乎、執事等遂披露、存忠曰、城裏之士卒亦一人之無有而慶、執事等曰、先是於原良有賴久之死、不顧其厚恩又爲仇敵誇武威、今也窮于此、雖天之所以與續今之命可乎、何者傳稱諸葛孔明征南蠻執其王孟獲、七縱七擒以示威智、而後得心服矣、賴久亦他日心服退治凶徒亦未可知焉不止、不得已而答曰、去伊集院居城、則可有斬戮、執事等又曰、収公石谷三十町而解圍可乎、於茲應其求解圍、警衛路頭、教降伏之士逃去、其間伊集院・南郷・伊作・川邊已下南方面々在松尾城之際、任便舌吐雜言之輩、丁逃去時若

武者等守其面顯雅意、且凡下之曹吐惡言者多矣、未幾報恨散憤不亦快乎、

967

「義天公御譜中」

一 賴久谷山沒落之後、伊集院之吉俊某等群議有言曰、動起亂逆暨合戰、敵味方之勇士死亡者不可勝計、徒與好兵革亂國家持干戈亡士庶、不如速爲和睦、以不亂君臣之義父子之仁、且子庶民行仁政、則誰敢有寇吾者乎、賴久聞此言、而許諾以請和諧、屬我旗下矣、

968

「義天公御譜中」

一 不計伊作某與阿多某忽爲矛盾之隔、漸迫合戰、伊作某請援兵於存忠、存忠許諾以發救兵、且曰、市來某亦可合力於伊作、一鄉鬪亂漸迫國中、非可疑勿敢傍徨、與阿多者、賴娃・指宿・知覽・川邊・別符・鮫島也、各救來而構一陣於田布施・貝柄崎、于時伊作某進師旅於夫陣下、已及合戰、忽伊作之軍敗、銳勇之士數輩遂戰死也、

969

「見于伊作譜」

嶋津庄薩摩方

一所阿多 一所日置 一所南郷

一所高橋 一所知覽院瀬々村

一所河邊郡内田部田村

一所別符半分

一所山谷郡内福本村內三十町同郡内中村之事

所相計也、早任先例、可被領知之狀如件、

應永廿四年十一月二日

沙弥存忠(久患)花押

伊作殿

「伊作家勝久譜中、正文在卷本トアリ」

「國史 義天公 大岳公」

二十五年戊戌春正月十四日、伊東大和守祐立遣 公盟書

曰、與君同盟始終如一、恤患難、遠讒間、有渝此言、諸

神殛之、又遣 大岳公盟書、辭亦如之、始與伊東氏平也、

據義天公・大岳公舊譜、伊東氏、寇曾井及稔佐見上、至是乃平、阿多氏與伊作氏構兵、伊作氏求

援於 公、公遣兵救伊作氏、復使市來氏助之、而別府氏

・敵島氏・顯娃・指宿・知覽・川邊等兵援阿多氏、二月

九日、南方兵至、一手軍田布施、一手軍貝柄崎、伊作氏攻

貝柄崎壘、爲所敗、死者甚衆、而南方兵聞 公攻揖宿、

即皆引歸、據義天公舊譜、山田聖榮自記、阿多氏義天公舊譜書阿多某、山田聖榮自記作阿多飛騨守、按島津支流系圖、町田

五郎太郎忠光六世孫曰清久、清久第三子飛騨守久清爲阿多氏、此云阿多

氏、疑是久清、伊作氏與南方兵戰於貝柄崎、舊譜：自記皆無年月、而池

水春意系圖、主稅助純仁傳曰、應永二十五年戊戌二月九日、阿多與伊作

戰於貝柄崎、純仁獲伊作兵三人、今據之、池水氏系圖、大織冠鎌足七世

孫曰中納言長良、長良四世孫曰五郎元純、元純爲池水氏、純仁、元純十七世孫也、

初 公使奈良氏兄弟守

揖宿城、至是兄弟以城反、 公攻陷之、兄某奔顯娃、弟某

降、 據山田聖榮自記、義天公舊譜、公使奈良氏兄弟守揖宿城、衆人惡

而逐之、與此異、奈良氏兄弟名嗣、其人詳、按敵島民部左衛門

家藏、義天公應永十九年二月三日賜奈良美作守舊曰、賜汝 市來某與

揖宿村、蓋此人也、指宿郷有故城墟數所、奈良氏所守不審、此云市來

山城守忠朝有怨、將攻永利城、 忠朝領永利、見上卷應永十八年、

某、蓋備後守家親、家 求援於澁谷氏、澁谷彈正忠 園、院主馬系

親、市來忠家之子也、 重長帥兵與市來某會、冬十二月、屯大石平、據義天公

田聖榮自記、應永記、大石平在薩摩郡、據入來重長、重頼之子也、院主馬

山田郷地頭館西北十町許、今稱陣之尾、系圖、澁谷重

頼往往見上、

契約

一天下如何様雖轉變、一味同心可申談事、

一於自今以後者、就萬事御大綱存身大事、可被見續之

由事、

一如此申談上者、萬一有和讒凶害者、不殘所存可申披事、

若此條々爲申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 熊野三所大權

寄進狀

973

「伊久一流系圖守久譜中」  
「正文在出水野田山内寺」

972

契約

「久豊公御譜中ニ在リ、又忠國公御譜ニモアリ」

現 八幡大菩薩 天滿大自在天神 諏方上下大明神御  
爵お可蒙蒙候、

應永廿五年正月十四日 〔朱カキ〕伊東大和守  
〔久豊〕 祐立(花押)

嶋津殿

右、意趣者、心底依奉憑候捧一筆候、所詮、御大事之時者、身大綱と存雖甲斐之候、仰公方以其下可立御用候、若此条偽申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神 霧島六所大權現御爵お可蒙蒙候、仍契約狀如件、

應永廿五年卯月八日 沙弥秀貞(花押)

〔教宗〕  
桃山殿 御内

974

契約

「正文在山田家」 「久興入道玄威譜中」

薩摩國山門院之内并具居田七段、新御堂宮崎八幡所奉寄進也、仍狀如件、

應永廿五年十一月廿八日 沙弥得佛〔守久〕(花押)

右、意趣者、

一仰公方、一味同心之思お成申、可致忠節之事、  
一於私者、大小事不殘心底申承、自然御大事之時者、縁者親類ニもひかれず、一身之大綱と存、御用仁可立申事、

一不慮之讒者出來、凶害お申事候者、即時ニ蒙仰申入、可散不審之事、

若此條々偽申候者、

日本國大小神祇、殊以伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 稻荷大明神之可蒙御爵候、

應永廿五年十二月二日 〔平世〕 右馬助重宗(花押)

〔久興〕  
山田殿

奉寄進

薩摩國伊集院直木内坂上門水田六段并蘭三ヶ所事

右、彼田地者、道應雖爲本領、依有志、崇梧西堂仁限永

代奉讓之處也、若於此所領違乱煩申者候者、道應不可爲

子孫候、仍爲後日讓狀如件、

應永廿五年十二月十三日

『伊集院頼久少弼頼久ノ法号』  
道應(花押)

奉寄進

薩摩國日置新御領内仁賀田三段同蘭一ヶ所事

右、彼所領者、自道忍靈樹庵崇利比丘尼雖讓得、重依有

志、崇梧西堂仁奉寄進候處也、彼比丘尼一期之後、爲寺

領可有御知行候、若於此所領違乱煩申者候者、道應不可

爲子孫、仍爲後日寄進狀如件、

應永廿五年十二月十三日

『伊集院頼久』  
道應(花押)

一同廿五年戊戌、(忠朝)雍州不儀有振舞、自市來被成遺恨夏、

縦ハ依山田羽島夏也、入來ニ有談合、同十二月大石ガ

平陳ヲ取、明廿六年己亥正月十一日、差寄テ山田ニ陣

ヲ取、澁谷一族一ニ丸勢雖無不足、佐多讚岐守殿ヲ大

將ニシテ被差副角難道行間、同八月廿九日ニ匠作山田

ニ有御越、廻ニ陣取被責之間、雍州成道ノ口去城、限

城ニ被楯籠、此ニ有不思議夏、去ル六月廿一日申ノ尅

計ニ東ヨリ白雪埋山降來、後ニ聞得來ルハ自山門神奉

ヲ都ニ被振下、其靈驗之雪トゾ申ケル、昔ハ幡殿貞任

責給シ時、天喜五年六月十二日白雪降下ル、其ヨリ此

方ハ不及承、

二十六年己亥春正月十一日、軍山田、進攻永利城、忠朝

出兵擊敗之、重長遣使乞援師於公、公與群下謀、咸

曰、動干戈於邦内、以脩私怨、是作亂也、不若勿援、公

然之、重長復使告焉曰、今日若見救援、臣請委質事君、

盡忠致死、無有二心、公將許之、群臣以不可、曰、往

年澁谷氏應 齡岳公、又應 怨翁公、皆無成事、澁谷氏

不足恃也、鶴田某應齡岳公、公伐山北、不克而帰、見應永二年、八年復應怨翁公、公與久哲公戰於千町田間亦敗、鶴田即澁

谷四族之一也、此云 澁谷氏、豈謂鶴田乎、公曰、吾方謀滅總州家、澁谷氏族大、

此可以爲援、而不可絶也、乃遣佐多久信、將兵助澁谷氏

攻永利城、據義天公舊譜、山田秋八月二十九日、公自將攻

永利城不克、犬太郎將川邊兵救之、犬太郎時年六歲、善家臣相之二十七年奔山門院

亦當球麻・眞幸之兵亦至、公距之、而城中被圍數日

糧盡、忠朝乃請獻城以和、許之、忠朝歸隈城、而公取

永利城、以與重長、重長由是德公、歸順奉公無復貳心、

上、

同 二十七年庚子、初小牧某事 公於穆佐、小牧氏者顯姓氏

之別族也、某有功勞、公賜之顯姓、因稱顯姓氏、是歲

顯姓某以邑叛、公遣兵擊之、顯姓某弗能禦、棄城奔、

公取顯姓、據義天公舊譜、應永記時別府氏少、室老田中周防・宮原

兵庫用事、公誘周防・兵庫、二人遂以別府某降、於是

犬太郎居川邊、今給黎久俊居知覽、懼及、久俊因伊集院

賴久求降、公不許、群臣諫 公曰、賴久歸順以來屢有

功勞、今乃爲久俊請、願看賴久之面、公乃許之、久俊既

以知覽降、犬太郎無援、乃獻川邊奔山門院、鮫島氏・阿

多氏亦以邑降、按山田聖榮自記、此時鮫島氏爲山田城主、於是 公略南方、西至

坊津及泊津而還、以上木場二十町賜佐多親久、其舊邑也、

上木場屬知覽鄉、足利義隆賜島津忠光知覽院、在第六卷文和二年、親久、忠光之曾孫也、以小野十八町賜知覽

氏、長里賜久俊、據義天公舊譜、山田聖榮自記、島津支流系圖佐多氏譜、郡村高辻帳、川邊鄉有小野村、知覽鄉

有長里村、初伊集院賴久據伊集院、與南方黨相結、賴久室老

吉俊某、島津支流系圖、伊集院賴久叔父曰、吉俊備前守每勸賴久歸順、賴

久乃降、南方皆懼、望風而下、公以爲南方平定、賴久

與有力焉、乃以賴久之女爲夫人、石谷村爲湯沐邑、以結

其心、又賜賴久川邊、於是賴久徙居川邊、使其子初犬千

代丸居伊集院、是後賴久不復叛也、據義天公舊譜、山田聖榮自記、此段終言賴久事、

非是年事也、

979 應永二十六年己亥

三月、伊作惣次郎 日州加世田車坂城を伊作惣三郎 同しく死

守久義の弟肥前守久次の三男に宗三郎といへる人あり、又久次の弟石見守久周の子に宗次郎久清といふあり、考に備ふ、

980 「義天公御譜中」

一薩摩郡山田永利城、上總山城守忠朝所守之地也、市來

某有宿意之未散、而與澁谷一族俱謀、應永廿五年戊戌

十二月、構陣於大石之平、廿六年也翌年己亥正月十一日、進山田

構一陣、澁谷一族爲一列進向、已及合戰、忽澁谷之軍

敗、清數彈正忠之兵數十人被斬獲矣、於茲乎澁谷等請

援兵於存忠、執事等聞之曰、以私之宿意起亂於國中、

不俟守護之命而既及合戰、敗北之今請救於守護、專血

氣之小勇亡上下之禮義、敢不能救所以延引也、彈正忠

又請曰、自今以後屈守護之旗下、抽無二之忠節、退治凶徒、令國家歸太平、先得當日之救所以屠殺對敵、欲安我之疆內、於茲不得已而許諾、群臣等僉云、勿敢救、氏久・元久二君應渠等之請、踰山路勞軍務、無勝利有難儀、今度之勝敗未知如何乎、雖然存忠豈無慮乎、總州一類者古敵又今敵、遂不可不退治、當此之時澁谷一族無異意從旗下、則無可疑者、而盍容易乎、先使佐多讚岐守久信爲將領師衆赴向、而雖攻責未得陷、故應永廿六年己亥八月廿九日、存忠自將越薩摩山、圍永利城、晝夜攻責者孔急也、雖然夫城堅固守兵不怠、而經數日之際、球麻・眞幸之援兵馳到、而陣山田之邊地、漸々逼我之陣、且復犬太郎殿催師旅發川邊、到山田邊欲爲後攻、我兵對永利城門之外、向援兵日々使輕銳之士侵侮敵陣、僞引步卒、以飛羽箭頃刻不止、于時松本某戰死矣、城裏窮困之餘求和諧、念武以不止爲患、以故解通路圍、忠朝下城退入隈城、於茲乎存忠先入永利、而後許清敷彈正忠矣、今度士卒群聚之次欲陷隈城、而感長陣之勞苦所以散軍也、彈正忠不忘今度厚恩、無異心抽軍忠、迄息男貴久代以不違也、

981 「全」  
一漸々山西薩隅止凶徒之蜂起、粗幾庶無事乎、由是運伊東退治之籌策、欲赴山東、先又三郎貴久後稱忠國、到于日州油津、以士卒着到之衆寡、欲訣進退、山東加江田城兼許土持某矣、是以使號清水之一族、守夫城者堅矣、且聞七之浦邊丁發越軍衆之時、不可有通路煩、雖然師旅遲參、故貴久所以歸陣也、

一奈良氏兄弟者令守指宿城之際、得憎於衆人、爲同僚被追出、且復殘留衆人企叛逆止出仕、然而未嘗彼地凶徒所退治之有間暇、以緩征伐、漸得時之宜、則催軍衆已進發到指宿、構陣營於城邊、伊集院彈正少弼賴久亦着陣也、故能評議雖攻責、敵城堅固未能陷也、此時對伊作南方敵陣亦悉以退散矣、指宿城雖堅、漸糧絕力倦失防禦之術、請通路之有免下城退散、今度攻城之酒勾主計戰死、夫主計者酒勾一門之逸士也、奈良氏兄背我逃去穎娃、弟得見我而後移居麿嶋也、

證狀

右、此時節申談候一段之事、聊不可有吳篇之儀候、次於于後日塩貢身上之間之事、可被懸御意之由承候、是又同前候、

若此条偽申候者、

伊勢天照大神宮、殊者當國鎮守新田八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神 熊野三所大權現御討お可罷蒙候、

應永廿六年十月廿八日 山城守忠朝(花押)

栴山殿

加治木殿

柏原殿

北郷殿

984 「義天公御譜中」

一應永廿七年庚子、發軍衆於穎娃攻責者甚急也、由是長不得支、而請通路之得免、下城退去、穎娃一族有號小牧者、先是存忠在山東之際、在近習抽忠節、故感其勞昇穎娃於渠、因以爲稱號、忘其厚恩忽報恩以讐、又何無其報乎、雖保微命去居城失領地、實去穎娃者穎娃、非

985

「全」

我也、莊子曰、種瓜得瓜、種豆得豆、天網恢恢疎而不漏、作不善之報、何永得顯名逢善祥乎、不可不鑑也、  
一其後攻川邊與知覽、知覽已失兵術筋力亦倦、長門守者爲伊集院彈正少弼賴久親戚、是以賴久有請免許之訴、存忠曰、長門守在南方爲凶徒棟梁、而廻計策逼守護兵、及難儀者其數多矣、天運循環、今也逼于渠、所以天之與我也、何有之乎、於茲執事等曰、存忠之所言不違義理、雖然賴久屬旗下以降、南方大半廻籌策入手裏矣、若不違今之訴訟、則失眉目乎、然則後來忠否未知何之如云、以故長門守・阿多某應賴久之請有之、唯川邊一所未入手裏而已、丁此之時、犬太郎殿曰、去川邊之居城欲遁山門院焉、川邊可任太守之計、故領川邊即入部、而後住知覽上之木場、使山田氏・鮫島氏之住宅退去、我之爲旅館矣、于時令佐多某・山田某守上之木場、長門守充長里之一村、屈居廷弱之地、鮫島某移居廳島、阿多飛彈守降伏我之旗下、佐多某依有由緒、昇上之木場之內二十町、知覽某昇山田之內小野十八町、是則依大寺某之計、且爲山田之城衆、如斯分賦諸所之守兵、



而後到于兩津、坊津、泊津、今也歸服于我者、宛如草木之靡風也、

986

「全」

一雖有發向山東退治伊東之志、薩陽未迄心服、專止薩陽疑似、而後往山東對伊東欲運籌策、由是諸般計策其品不同、爰別符某者未壯年童子也、召家臣田中周防守・宮原兵庫助、而密有所通達之旨、又佐多伯耆守有女子、吾爲養女可妻別符某、結婚已成矣、

987

「應永記」

一同廿七年庚子、穎娃ニ押寄セ給ヒ、取卷テ被誇間、不及敵對、乞路之口落去、是ハ穎娃之一族ニ小牧ト云者也、匠作山東御座時奉公申サル、依官仕勞穎娃ヲ玉ハリ知行シ、雖被成召名字、成御敵奉射矢、皆人不知恩是也、

988

「佐多伯耆守親久譜中」

應永二十七年、薩州河邊・同國智覽入 太守公之手裏、知覽爲當家舊領之地、以故賜上木場智二十町、

親久軍自國他邦、攻城野戰、其功不少、其後移智覽城、長祿二年八月二十二日死、壽八十四、

989

「伊集院圓通庵文書」「此文書伊集院親久譜中ニ在リ」

奉寄進

薩摩國滿家院郡山名之内常葉門付水田一町一反 藪山野用作分ミたらひ五反 河山三反 迫田三反 都合二町二反事、

右、件の所領者、道應爲重代相傳所領間、限永代奉寄進圓通庵處也、然者無他妨、任先例、可有知行候、於此所成違乱輩者、道應不可有子孫之儀候、仍爲後日寄進狀如件、

應永廿七年二月三日

(伊集院親久)  
道應(花押)

990

「全」

「たまりの藪一所 馬場藪一所 合三ヶ所事

右、件の田藪等者、道應重代相傳之爲所領間、限永代奉寄進圓通庵處也、然者無他妨、任先例、可有知行候、於此所成違乱輩者、道應不可有子孫之儀候、仍爲後日寄進狀如件、

應永廿七年二月三日

〔此文書、伊集院賴久譜中に在り〕

(伊集院賴久  
道應(花押))

久 豐 公 自 應 永 廿 八 年  
忠 國 公 至 同 卅 五 年

前 編 舊 記 雜 錄 卷 卅 五

991 「國史 義天公 世子又三郎公」

二十八年辛丑秋八月七日、公下書徵兵奈良美作曰、吾方將兵擊東鄉氏、卿其速來、據敦島民部左衛門家藏文書、是年公擊東鄉氏、別無所見、九日、公賜羽島新三郎向田十町地、據義天公舊譜、向田地名今屬隈之城鄉、十三日、使羽島新三郎領羽島如故、同上、二十日、公遣世子又三郎攻山城守忠朝於隈城、公次於伊集院、忠朝心計以為隈城去鹿兒島十餘里、動有浮言、不能自明、不若投身歸公、以避形迹之嫌、乃因又三郎乞降、且請徙鹿兒島、公許之、忠朝即降、其後、公處忠朝於鹿兒島和泉崎、賜之馬料所、鹿兒島今無和泉崎名、其地不詳所在、或曰、今柿本寺山頭、古稱和泉崎、然無確據、未知

果是、柿本寺在忠朝祝髮法名曰道聖、據義天公舊譜、應永府城西十町許、記、山田聖榮自記、男彦

三郎、子孫為相馬氏、據島津支、流系圖、道路流言、播磨守守久謀

作亂、據義天公舊譜、

二十九年壬寅、公伐守久、次於伊集院、遣世子又三郎

・伊作克久等攻山門院、和泉氏・阿久根氏始應守久、既

而叛之、附守久者獨高尾野、守久大窘棄城走、遂出奔肥

前、據義天公舊譜、應永記、山田聖榮自記、公既取山門院以賜相良某、與人竊

言曰、得佛公始居山門院、比及五世皆居於此、定山公

以來總州家領之、今者公取之、宜其取為公家邑、不然

使公族領之、亦可也、而以賜他族、則吾不知也、據義天公舊譜、山

田聖榮克久之如山門院也、其叔父遠江守十忠殺其父久義、伊作城遺墟在伊作地頭館

士卒擁克久子安鶴丸為主、保內城、東北十二町、係中原村

內城即十忠攻之、又使公逐克久、公與伊作氏有宿怨、

乃許十忠、克久聞之曰、今日之事只當與十忠俱靡而已、

新納・北鄉知久・樺山教宗憫克久冤、因世子乞免之、

公曰、獻伊作地、而身去之他邦、則有後於薩摩矣、族人

皆勸克久使去、且言妻子託市來氏、亦無所憂、市來氏者

克久之妻黨也、克久娶市來備後守家親女、見市來次左衛門系圖、克久從之、公取

伊作、克久遂出奔、山田孫五郎久依從之、皆不反、十忠

求伊作、公弗許、十忠轉客知覽上木場、不知所終、據義天公

舊譜、應永記、久依、友久之孫也、  
據島津支流系圖、山田友久即  
 大隅式部龜三郎丸、見第五卷  
 建武四年、

992 「西藩野史」

二十八年辛丑

嶋津山城守忠朝隈之城を保つ、  
初永利より遁れて是  
 を保つ、前に出つ、久豊公南

方の乱に由て是を征せず、去年乱少く息に由て貴久公に命して是を撃しむ、忠朝 貴久公に告て曰、家運既に盡ぬ、城を枕にし死すといへとも、祭祀を断て益なし、又

出て他州に走らは嶋津氏の家聲を傷へん、願くハ赦を得て一匹夫となり一生を終て足らん、貴久公是を 久豊公

に告く、公時に伊集院に有 平田右馬介重宗固く請て曰、忠朝叛賊

たりといへとも正しく 公の親戚なり、彼今勢盡るに及て猶家聲を思て他郡に走らす、其志憐むに足れり、願くハ其請を容れよ、 公是を許す、於是忠朝出て降る、月八

ナ、居を鹿兒嶋和泉崎佐多氏に隣るに給ふ、又湯沐の邑を封す、是を馬飼 忠朝除髪して道聖と稱し、其子第四彦三郎伊忠と

共に和泉崎に居す、  
按に、道聖、長子三郎左衛門尉忠氏と稱す、肥後國に走ル、其子彦次郎忠成相馬氏を言ス、

子孫北郷氏ノ臣ト、  
為テ都城ニ居ス、  
 二十九年壬寅

貴久公又軍を進めて木牟禮城水、を攻む、太夫判官固く守て下らす、傳云、木牟禮ニ入テ是ヲ助ク、貴久公の軍蟻附して是を攻む、

守久援を肥後國天草に求む、援至らざるに城先陥る、守

久肥後國に走る、久しからずして卒ス、於是山門院を相

良近江守前續に給ふ、按に、相良氏ハ世々我國ノ仇也、此時伊作

大隅守勝久初四郎左衛門尉 貴久公に屬して山門院に有り、父久

義・兒安鶴丸後四郎左衛門尉 伊作に有り、久義の弟遠江守十

忠按に、下野守忠親の六男なり、又久義ノ女ヲ娶る、爲人貪戾なり、勝久の出水に在る

を喜ひ虚に乗し久義を弑し、勝久を追ひ伊作を奪ん事を謀る、潜に 久豊公に告す、 公固り勝久を惡む故に是

を許す、十忠歡て久義を殺し、又安鶴を殺さんとす、伊

作信濃守等大に驚き、安鶴丸を奉して内城を保つ、新納

近江守忠臣勝久の甥、北郷中務少輔知久・樺山安藝守教宗共

伊作家の親戚なり、變を聞き、輕騎を驅て伊作に至る、十忠曰、是我

私にあらず、 久豊公の命なり、忠臣等處せん處を知ら

ず、空しく歸る、市來備後守家親安鶴丸の親戚、是を聞き、安

鶴丸を市來に召ふ、於是伊作を捨て市來に寓す、 貴久公

出水に在て此告を聞き、勝久に告て曰、吾既に汝に親し、

按に、貴久公勝久の女を愛して妻とす、又難を援わんとするに如何公の夫人ハ勝久の甥新納忠臣の女なり、

んかせん、讒臣朝に滿て父君に惡す、速に他郡に走て害

を避よ、勝久即肥前國に走り、傳云、山田孫五郎是に從て走ル、其故を詳にせず、十

忠既に志を得て伊作に主たらん事を欲す、久豊公曰、

彼富貴を貪り、兄を殺し甥を追ふ、志人倫に背けり、十

忠大に恐怖し、伊作を去て知覽に通れ上木場に匿れ居す、

於是 久豊公伊作を安鶴丸に給ふ、然とも幼きを以て伊

作信濃守をして代て伊作を守らしむ、安鶴丸猶市來にあり

三十年癸卯

此時國中大半平治す、傳云、薩州の賊未服處へ渋谷か黨のミ未從、然とも大來院降り、高城・那答院も亦降り、

於是三氏脅儀して、東 久豊公吉利某伊集院頼久が族を召て曰、國

中の平なる、実に伊集院頼久か降れるに因てなり、只に

讒佞の徒隔んことを畏る、吾聞ク頼久女有と、召て妾と

せは長く相親て讒者の憂なかるへし、汝是を謀れ、吉利

即頼久に告く、頼久大に歡ひ女を獻す、後に一男を生む、出羽守有久と稱す、大

祖なり、於是石谷及び河邊給ふ、頼久其子初犬千代を元服

し、大隅守熙久と名つけ、伊集院を讓る、己ハ河邊に移

り薙髮して道應と稱す、此時道應陳方明神を河邊に立つ、今猶有り、

三十二年甲辰

先是應永十 久豊公伊東大和守祐安と日州に戰て利あらず、

九年、地を失ふこと數十里、故に是を報ひん事を謀る事多年なりといへとも、内乱に由て果さず、今年大軍を卒し、日

州油津に軍す、傳云、佐多伯耆守親久平田右馬介重宗、伊地知久安、大寺美作守・奈良・牧・鹿屋、和田・高木從ふ、

三侯・眞幸の軍先登し、須木・肥田木と戰ひ進て柚木崎・

紙屋を取る、伊東祐安海江田本城・峠の二城を以藩籬とす、

故に親戚伊東安藝守をして海江田を守らしむ、久豊公

油津より航し、鶴戸崎宮之浦小内海を巡て内海へ至り、明

日峠の城を攻んとす、賊夜に乗して遁る、於是軍を分て

海江田を攻む、一ハ七浦を航し、一ハ折迫の海濱を巡て曾

根山に登り、傳云、久豊公十 二月爰に至る進て海江田を圍む、正月、守將

伊東安藝守・飯肥佐渡守に因て降を乞ふ、久豊公聞かす、

時に伊東祐安曾井清武より二千餘軍を卒し、隈野川を下

りに進來る、久豊公佐多伯耆守親久をして城を攻しめ、

自川に臨て陣し敵を待つ、傳云、此トキ伊地知久安鹿屋某と謀て曰、敵二千人に餘れり、川を渡り

挑戰こと必せり、城中又強兵多し、戰へ、危からん、公曰、佐多親久城

を攻む、賊出るとも念とするに足らず、敵來らハ我必すを破らん、汝

等畏ることなか、來猶危ふむ賊川を隔て戰挑む、日暮夜に乗して敵悉

く退き去ん、城中益力盡降を乞て止まず、是を許す、安

藝守城を下り都於郡に通る、久豊公城に入、是を修築

し、貴久公と代くる爰に居て伊東を謀る、於是川南川北

復靡然として公に屬す、傳云、和田・高木師を帥ひ田野を徇ふ、奈良氏軍を監す、岩を川路に築て守る、

土持兼綱も降る、按に、土持氏ハ往昔日向國押領可使たり、世々縣城主たり、縣今ハ改て延岡といふ、天正年中秀吉西征の時が土持氏除せらるる、來て我國に臣たり、時に豊後國太守大友氏僧を遣して和を説、久

994

『鹿屋氏藏書』

河邊内

楞嚴寺水田五段之事  
 在所へ本證文明見  
 右、意趣者、姫木住大<sup>〔姫木角殿トアルハ是也〕</sup>中臣角入道文西仍心指有、爲現當二世、相副次第證文、奉寄進所也、仍爲後日寄進狀如件、  
 應永廿八年<sup>かのとの</sup>二月廿八日

沙弥文西(花押)

993

「正文在清水楞嚴寺」  
 「文西寄進狀」

奉寄進

豊公是を許す、於是伊東祐安海江田の城に來り、貴久公に謁し、<sup>久豊公ハ鹿見嶋に有り、</sup>和を約して歸る、是より日州の乱止む、故に久豊公京師に朝し、將軍義持公に謁せんとす、病に臥して果さす、  
 三十二年乙巳  
 正月二十、久豊公薨す、享年五十一、義天存忠と謚す、  
<sup>傳云、公の葬るの地を詳にせず、或云、谷山の田中林あり、嶋津森と號す、是即公を葬るの地なり、然とも據なくして詳ならず</sup>

(蓋)

一長田門

水田五町

應永廿八年三月二日

鹿屋殿

〔大寺元幸〕「但此御判横折にて裏ニ在リ」  
(花押)

995

「載伊作譜」

右、意趣者、田布施之事一圓ニ被去給候上者、依今度之儀、屋形之所存一切不可相殘候、於此内、自然讒者出來候ハん時者、此衆中申談、無御振舞違者、身之大綱と存、意趣お可申披候、  
 若此條僞申候者、

伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 稻荷大明神御爵可罷蒙候、

應永廿八年三月十五日

大寺

元幸(花押)

柏原

好資(花押)

伊地知

久阿(花押)

鹿屋

玄兼(花押)

桃山

孝宗(花押)

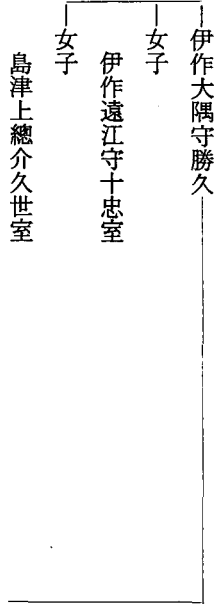
伊作殿

「此文書、伊作勝久譜中、正文在卷本トアリ」

996 「伊作勝久譜中 未紙ニ在リ」

播磨守守久居住于山門院、而 太守之爲冠者久矣、於茲使又三郎 貴久公後稱忠國爲大將攻守久、于時勝久亦爲從軍在山門陣中之日、叔父遠江守十忠與群臣俱爲一揆、攻勝久之居城、且十忠企謀計、勝久之算非、請于 久豊公、久豊公亦有遺恨之未散、是以令許容有勝久追放之命、不得已而捨置妻子、向他邦令出奔畢、委曲記于 久豊公譜中者也、  
法名道恕、

997 「公譜中」



伊作教久——犬安丸——久逸

河内守

女子

太守忠國之妻 友久母儀也、

998 「羽嶋氏文書」

ゆつりあたふ舍弟新三郎かところニ  
國分寺領内薩摩郡之内羽嶋之事、つほつけなんとこの事ハ代々文書ニミゆる間、こさいにおよはす候、早ちきやうせらるへし、仍爲後日之狀如件、  
應永廿八年五月三日  
沙弥通松(花押)

999 「義天公御譜中」

一上總山城守忠朝以限之城畔、不足可畏、而動聞荒説之不快于心、不如速以退治之、而應永廿八年辛丑八月廿日、使貴久爲將率軍來到山北、攻限之城、忠朝之銳兵出城門、盡筋力爲防戰、雖然少勢不及再三、已倦一戰退入城中、少焉忠朝曰、暫以雖支自殺之期何經數日乎、

1000

〔全〕

所詮、急速可自殺乎否、爰有一之訴、吾此間隔山嶽去麿島者十有餘里、故自佗之疑更無止時、願有今度之自殺、得一宅於麿島、絕浮世之事業、二六時中只事念佛、衰老之身可俟末期之至而已、存忠催遲參之兵在伊集院、貴久馳价使問件之旨、平田右馬助重宗聞之告我、々答曰、速可應忠朝之請、於茲乎忠朝僅訴之不空可也、下城落飾名道聖、移麿島和泉崎、佐多氏之近隣也、息男彦三郎亦同居矣、畀小地、且隨時所以扶助也、

一伊集院彈正少弼賴久屬旗下爲武略以來、自南方至薩摩郡、入手裏致軍務、是我之幸也、于時召執權吉俊某曰、今日賴久抽無二之忠節、於予乎何幸如之乎、雖然恐有讒佞之徒、使自佗明日爲咫尺千里之隔、以之慮焉、非可輕薄怠慢之事、我聞犬千代殿姉姪之在深閨、未有結婚之人、雖非配合之齡、欲娶愚室與賴久堅親子之盟、吉俊曰、謹得聞命、達尊旨於賴久之妻、而後再候華弟可反命退出矣、吉俊告賴久之妻、々曰、然則犬千代丸之幸有過之者乎、速告賴久云々、賴久亦無異意、同好之曰、宜任吉俊之計也、吉俊欣然再來反命、由是無程娶

1001

〔全〕

愚室、寵愛無疏意、且畀石谷三十町於籬中、因茲賴久彌無有疑心、國中亦漸屬安寧、已籬中產男子稱有久、後任出羽守、大島之元祖也、

一薩摩一州將屬手裏、暫有閑暇、此間依凶徒退治之忽劇、

不拘餘事、以故不顧貴久之未妻也、新納近江守忠臣有女、聞初長成養在深閨、使北郷中務少輔知久達忠臣、忠臣一雖固辭、及再三已應諾矣、速欲娶之於麿島、而未營宮室、遲引亦不可也、宮殿經營之際、先欲教貴久往志布志遂吉事、定中城於宅地、撰吉日良辰其事既成矣、是以麿島營作所以遲引也、

1002

〔應永記〕

一同廿八年辛丑八月廿日、有御越山、隈城ヲ取卷セ給、雍州無幾程被開城、行末在所社不審、アホカクナシ

1003

〔久豊公御譜中〕

〔正文在末吉衆羽嶋新兵衛〕

嶋津庄薩摩方郡内向田六町并四町、以上十町不可有相違



狀如件、

應永廿八年八月九日

存忠(花押)

羽嶋新三郎殿

1004 「羽嶋氏文書」

薩摩國內東郷退治時、國分爲万徳之代可相計之狀如件、

應永廿八年八月九日

存忠(花押)

羽嶋新三郎殿

「久豊公御譜中、正文在末吉衆羽嶋新兵衛とアリ」

1005 「羽嶋氏文書」

薩摩郡内羽嶋本領當知行之事、不可有領掌相違之狀如件、

應永廿八年八月十三日

存忠(花押)

羽嶋新三郎殿

「久豊公御譜中ニ、正文在末吉衆羽嶋新兵衛」

1006 「執印文書」

於薩摩郡十町分可相計者也、守先例、可被領知之狀如件、

應永廿八年八月廿三日

存忠(花押)

「久豊公」

「豊前守友令」  
執印殿

1007

契約

一可仰屋形之儀之事、

一於自今以後者、別而御殿人之由を存、無隔心可申承事、

一如此申談候上者、御大事之時者身之大綱ニ被存、御用

ニ可罷立候、万一於此内不慮ニ讒者出來、虚説凶害お

申候者、則時ニ申入、蒙仰可散不審事、

若此條ニ偽申候者、

日本國中大小神祇、殊以伊勢天照大神 正八幡大菩薩

稻荷大明神 天滿大自在天神 諏訪上下大明神御爵お

可罷蒙候、

應永廿八年九月十二日

(伊樂院願心)  
沙弥道應(花押)

(津山教宗)  
嶋津安藝守殿

1008

「入來院氏家臣宮里氏文書」

讓与 次郎五郎か所

薩摩國宮里郷之内田蘭等之事

一田者廣堀壹反、同郡名之内下田北七付て半分

一蘭者當屋敷東て半分之事

一 同廿九年壬寅、貴久大將ニテ山門ニ押寄給ヒテ被取巻、  
 總州嫡子久世之御親父也、不可有打解ラル、夏、判官殿  
 和泉・阿久寢ニ堅有御憑、可立御用之由、彼兩人被申臈  
 ルヲ、眞事ト被思食、御心浅夏社口惜ケレ、終ニハ成  
 獨ト玉ヒテ開城給、懸ル處ニ、亦伊作之城ニ馳込アリ

〔應永記〕

右、件所領者、法名道慶相傳知行無相違地也、然間子息  
 次郎五郎か所仁限永代奉讓与候了、惣郷支配時者、隨分  
 限可勤仕也、守此旨、至迄子々孫々無他妨可領知也、仍  
 爲後證讓狀如件、

應永廿八年十月晦 (日脱之) 道慶在判

爲證人 堀切正守(花押)

〔相馬氏山城守忠朝譜中〕

〔正文在田布施衆前田彌左衛門重信〕

宮子若狹守

久種

應永廿八年十一月十五日

忠朝(花押)

ト云フ左右至來、皆人目ヲ見合セ、更ニ物ヲ云人社無  
 リケレ、先年山北ト鹿兒島中違之御時ハ、伊作殿最前  
 ニ奥州方ニ被參臈ル、總州之御夏第一ハ重縁親方ニテ  
 御座、次ハ分國ノ御事也、亦惣領ニ而御座、如此義理  
 不一方、去者總州之御ニ所御恨無喻方、久義驥テ被失  
 玉フゾ怖ケレ、勝久ハ山門ニ在陣ノ留守也シカハ、二  
 度不入伊作給、安鶴殿憑市來母義共ニ被落集、幽成有  
 様ニ立栖而、十ケ年計被明暮臈ル處ニ、國一揆ト云事出  
 來テ、市來一人之成大綱、諸方之籌策雖惟多、今更御  
 兄弟ニ離可申事曾以不可有之、久家儀定也、先關弓筋  
 之儀理、搜心底見申スニ、現義天早世之御時、久家十  
 歲計之比ニ御座哉、縁之絹色替龜之前ニ跪キ致禮拜給、  
 見之人々袖ヲ撰ケリ、誠ニ親子ノ契約甚深云ヘル也、見  
 得シ事三ヶ國ニ無隔、是以案ニ久家御兄弟不可有二共、  
 去程此刻安鶴丸ノ母義ヲ誘有伊作ニ有爲入部企、憑上  
 市來成力事共者去ル夏成共、サスカ女心ノ悲サハ、船路  
 之旅ニ阿漕レテ、塩路遙ニ詠レハ、浦ハ野山之深縁リ、  
 潮疊ニ見得ヌルハ、松下枝ニ浪懸ル、立居ニ付テ嬾、詠  
 ニ咆呉服、綾無ク袖ヲ露、鶴ト名付シ思子ノ、舊里  
 歸ル佛似シ人思出ル、母儀之心ヲ哀成、伴ニアリ合フ

人々モ忍泪ニ堪兼、心之奥ヲ見セニケリ、伊作・市來一味ニテ、海ヨリ外ニ路モ無シ、掛憑鹿兒島ノ其方ノ空見渡セハ、向ノ島ニ雲覆、其當計被知タリ、斯テ山北ノ夏彌通路難儀也、山道者野伏ヲ入、剩へ神領打破テ其身ヲ被行死罪ニ、農具奪取神膳之祭料ヲ欲爲、空怖所行哉、但是不更共、市來・串木野殿原手分ヲシテ、或廿人或卅人靈山之平尾ニ上、樫木峠ニ登リ宛、山凌篠峯限之城ニ付力ヲ申更及三ヶ年、斯テ一搦破テ市來一人之悦トソ成ニケル、

1011

『廣濟寺文書』

「伊集院頼久譜中ニ在リ」

奉寄進

薩摩國滿家院内寂照庵之遺路田島等之事

右、依有志、廣濟寺之長老崇梧西堂ニゆつりあたへ申候、但長老と申談、子細ありて、了圓都寺之寮之しゆり料として、限永代寄進申候也、此在所において、一言之いらんわつらいお申候するものは、道應か子孫たるへからす候、仍爲後日如件、

應永廿九年八月十八日

『伊集院頼久』

道應(花押)

1012

「正文在西侯氏」

今度山門退治令發向、被抽軍忠之条祝入候、弥可被致職忠之狀如件、

應永廿九年八月四日

「忠國公初名」

貴久(花押)

西侯出羽守殿

1013

「義天公御譜中」

一判官守久居住于山門院、動有欲起亂於國中之聞、且復犬太郎殿没落之後、在肥之前州高久而近其地、起兵革來亦未可知、云裕云恰、不嫌於我心、薩隅一州盡入手裏、而後欲向山東退治伊東、然則先爲山門發向之企、應永廿九年壬寅、催軍衆以又三郎貴久爲大將、撰良辰已發向、構陣營侵侮者甚急也、合力於守久者獨有高尾野耳、天草其地相去不遠、且多年之好、雖然唯有問安否之通价使、無爲隣好之發救兵、存忠山門落居之程在伊集院、爰山北之高城等兄弟忽爲冰炭、兄大川某者與東郷・國府・執印等俱入守于水引城、弟三郎者屬守護、以故伊集院・市來・高江・宮里・羽島及長門守・山田某等在高城之本城、而對水引城、其間相去不過數百步也、伊作大隅守勝久在山門之陣中、得此之時伯父遠江守十忠

與一族家臣等借謀、攻入城中已弒久義、于時不屬十忠之士卒、從勝久之息男安鶴丸守內城堅固也、是以不得陷、而十忠請存忠欲追勝久、存忠忽應十忠之請、勝久聞此大變於陣中曰、徒與遂自殺於陣中虛武勇嗜、不如速歸伊作向當敵遂戰死、將歸陣也、新納近江守忠臣・北郷中務少輔知久・樺山安藝守教宗亦在陣也、勝久者忠臣之甥也、各共欲救之、而請貴久、貴久爲忠臣之舅、因茲許容、上達免許之旨於存忠、存忠曰、早下城則有息男以可追勝久、此言已達則止伐當敵之謀、陣中一族佗家同意諫勝久曰、恣遂陣中之自殺、似空貴久之高志乎、歸路之戰死亦未可知好否、妻子市來某可加愛養、先爲子孫長久、宜應守護之命、保身命出奔他州、強加教訓、不得已而應諾矣、去程妻子下城向市來沒落矣、伊作爲守護領、丁勝久出奔之時、山田三河守之男孫五郎久依從之、出他州再以不歸國也、守久請援兵而無到者、失防禦之計策、去山門奔肥州、嗚呼天平命乎、未有幾程守久卒于他州矣、

〔全〕

一今度山門院入手裏、而後許其地於相良某、由是執事故

舊之臣等竊有爲疑者曰、當家之元祖忠久主入部之時、先着御于山門院、而建立梵宇稱感應寺、放牝馬於瀨崎之山野、爲良馬之產地、將及後代、曾祖父貞久主亦勸請信濃州之本社諏方大明神於山門院、既以此院爲本領入部之初、當家之佳例異于他所、且復此間守久之居城如非守護領、何不昇一族故舊之人乎、

〔全〕

一伊作遠江守十忠請勝久之先領、欲已之爲領知、雖然不許之、而昇知覽上之木場矣、十忠徙居者未久忽卒、夫十忠者勝久之妻妹、且叔父也、屈棟梁之旗下、可抽忠功人倫當然乎、何也窺出陣不在之時、如斯之企凶惡之至、不容誅者乎、作不善之報人未害天已誅之、所以太速也、勝久之男安鶴丸幼稚之間、使伊作信濃守守伊作城、稱安鶴丸之代官、西某者許暱近、移鷹島、其外之輩亦不違義理者、僉以爲暱近也、

〔義天公御譜中〕

一先是、怨翁逝去之時爲守護職之際、忽有錯亂、而薩隅日三州之凶徒往往蜂起、綿々不止、雖然存忠運籌策發

精兵、過半入手裏、迄此之時、伊集院彈正少弼賴久亦

屬旗下抽軍功、由是娶女子於我室、故彌軍務不怠、已

薩州尺地莫非我有、一民莫非旗下、賴久素領清色、薩

摩郡隈城、使舍弟大田伊豫守久勝守之也、高江・宮里、去川邊於久世、雖

如斯爲亂世漸々令不知行、且復石谷爲公領矣、爰執權

吉俊某算賴久之先領地與忠功事訴之、於茲乎昇川邊於

賴久入道道應、故讓伊集院於犬千代丸、而道應移居川

邊焉、

1017 「國史 義天公 又三郎公」

三十年癸卯春二月、幕府讓征夷大將軍於足利義量、

據將軍家

謙・初 公與伊東氏平、事見上二、曰而欲復伐之、及伊集院・

鮫島・阿多・別府等降、南方已定、乃遣又三郎觀伊東氏、

又三郎行至油津、欲進擊之、招募兵衆、無應者乃還、是

歲 公自將擊伊東氏、行至油津而止、招募兵衆、既肥佐

渡守・野邊某居日向、皆爲內應、軍士稍集、公使平田

重宗・伊地知季豐法名久安、鹿屋周防介忠兼法名玄兼、大寺美作

守指揮諸軍事、部署已定、乃發油津至峠城、城上有鳥、

進向加江田城、疑是上卷應永十七年海江田城、分軍爲二、一軍乘舟至加江

田港口、一軍過折生迫、登曾根山以望之、燒夷城邊人家

以挑之、而城中固守、無一人出者、公亦不欲急攻之、

依曾根山築壘、以爲久駐之計、遣又三郎之國、更換差役、

據義天公舊譜、山田聖榮自記、公攻加江田城、驗年克之、而舊譜以爲應永三十一年、公始攻加江田城、然則下之在三十一年矣、按公下加江田城

而居之、及又三郎至乃去、會大友氏使僧至加江田城、又三郎代公答之、

其間蓋驗時月、而應永三十二年正月二十一日、公薨、則以公下加江田城、

爲三十二年事者恐謬、故前史氏朱書於三十一年之側曰、疑是三

十一年、蓋曰三十年、公攻加江田城、三十一年下之云、今從之、

三十一甲辰春正月、公復攻加江田城、伊東安藝守嬰

城固守、公作望樓以臨城、城中地形濶狹險易、與士卒

衆寡強弱、盡在目中矣、城中人懼、乃呼曰、若解圍一面

則棄城而去、公不可曰、必屠一城、而甘心焉、會伊東

氏遣曾井清武清武在高岡東南五里許、今屬肥後國、兵二千餘騎救加江田城、分

軍爲二、先遣步卒至隈野川、鹿屋玄兼・伊地知久安言於

公曰、援兵適至其鋒甚銳、若與城中犄角相應、濟川擊我

恐難當也、宜爲之備、公曰、敵在吾目中矣、我當擊之、

遣佐多親久引一軍當城中兵、公自將兵擊曾井清武軍、

會暮交綏、救兵遂引去、而城中飢困日甚、復呼曰、籠鳥

網魚自知不免、只當自刃、若得獻城而去則受賜多矣、

公乃許之、於是 公取加江田城而守之、使士卒修城、晝

夜催切、役畢罷歸士卒、公仍留、及又三郎至乃去、會大友

氏使僧引伊東大和守至加江田城、因又三郎乞和、公許

之、不復擊伊東氏、是時加江田・隈野・木原等地新被兵

1018

〔山田氏譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

大隅國小河院內一成村六町 見作十二町 同持富三町  
 山田內上別苜村五町五反 中村內入久四町  
 已上廿四町五反之段錢四貫九百文

革、戸口散亡、公使奈良某安集之、奈良某又築壘壁數所以防寇讐、北邊彌寧、據義天公舊譜、山田聖榮自記、是歲菊池玄朝使立田某來聘、使者至志布志、公使新納忠臣爲接伴、使者館於市人聖祐氏、公享使者於光明院、係寶滿寺管下、今廢、享訖、與使者汎安樂川而下、安樂川在志布志鄉、從者如水、而善水者拍浮上下、輒捕跋刺投於舟中、使者大悅、又宴水上棚屋、至暮而罷、公復就使者於館舍、使者親獻太刀、贈新納忠臣一腰、小大從者宴好、各有差、他日又爲使者講犬追物、厚爲之禮而還之、據義天公舊譜、山田聖榮自記、舊譜云菊池重朝、聖榮自記云玄朝、按志岐數馬所藏菊池氏系圖、武朝子曰兼朝、兼朝子曰持朝、持朝子曰爲邦、爲邦子曰重朝、兼朝稱肥後守、法名元朝又法名兼朝、蓋以其諱爲法名、此云玄朝疑是元朝、而原田三左衛門所藏菊池氏系圖、亦以重朝爲武朝之玄孫、續花押數、菊池重朝死於明應二年十月二十九日、年四十五、適而數之、則生於寶德元年、此年未生、舊譜謬矣、公之初卽位也、國中多事、反者如蝟毛、公自將擊之、兼弱攻昧、漸底平定、至是 公與群臣謀朝幕府、會有病、據義天公舊譜、

1019

〔山田聖榮譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

畏言上

大隅國小河院內一成村六町 見作十二町 同持富三町  
 山田內上別苜村五町五反 中村內入久四町  
 已上廿四町五反之段錢四貫九百文  
 應永三十年六月 日 藤原忠豐(花押)

1020

〔入來院氏文書〕

讓与

所子息初五郎丸

(重茂)

- 一所 薩摩國入來院內清色北方
- 一所 北方內上副田村
- 一所 市比野村半分地頭職并下地
- 一所 南方內清色村

此外聊僞申候者、  
 伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩 諏方上下大明神御爵可  
 罷蒙候、仍狀如件、  
 應永卅年二月三日  
(山田久興)  
 沙弥玄威(花押)

一所 塔原村

一所 中村

一所 楠本村

一所 倉野村

一所 久住村

一所 柏嶋村

一所 薩摩國薩摩郡内勸童・永利名

一所 筑前國柏原水田屋敷

一所 筑後國永淵屋敷 同國みな木の屋敷

一所 甲斐國西嶋内葦入在家田島

一所 美作國河繪庄内下森上山大足

一所 相模國澁谷曾司郷内ふちころの屋敷立野等事

右、於所領等者、重長重代相傳所領也、仍初五郎丸仁相

副次第調渡手繼證文等、限永代所讓与也、於御公事者、

任先例、可致支配者也、次重長以後所領事、雖有數輩之

兄弟、守其器用、惣領一人仁一所ヲモ不殘可讓与之也、

若背此旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重長之子孫

云云、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分讓、任此狀

之旨、於惣領一人之計、押而可令行者也、且爲後證所

書載置文之趣也、仍讓狀如件、

應永卅年八月十六日

(淡色)  
重長(花押)

1021

『入來院氏文書』

請文狀意趣之事

一廣説共度々かけるよし承及候、山田之陣之後、今日ま  
てにおゐて、失申候するたくミを仕たる事なく候事、

一まきれす恨申候する子細候ハ、かくし申へき事にて

もなく候、それより御意にかげられ候するにおゐて、

身として於後々も不可存等閑事、

此条々偽候者、

日本國中大小神祇、別而ハ正八幡大菩薩 諏方上下大

明神 鵜戸 霧島大權現 天滿天神 稻荷 祇園尉を

可蒙候、仍請文狀如件、

應永卅年八月卅日

『久世公』  
沙弥存忠(花押)

清色殿

『包紙』  
きてんのせいもん

1022

『義天公御譜中』

一應永卅一年甲辰、〔卅年癸卯歟〕催薩隅山西之騎歩、存忠自將進發到

飢肥油之津、俟軍衆之到、于時飢肥佐渡守・野邊某携

一撰吉日良辰、解纜於油之津將過於鵜戸崎、故先詣鵜戸宮寺、而今日繫船於宮之浦、翌日入小内海、峠之城敵兵守者堅矣、伊東氏者有居加江田本城之風説、然則此邊之敵豈足畏乎、其後入内海詳見之、則要害地也、是

〔全〕

一一族他家騎歩及寺社家之庶卒悉參陣油之津、於茲乎定行伍之分、眞幸・三俣兩輩與須木・肥田木可爲同列、袖木崎・紙屋亦有可屬旗下之兼約、然則綾・深歳・飯田・久津良之邊地何緩然乎、下是田野封疆、和田・高木之歩卒、往其邊、揚狼烟於彼此山中、則敵兵何不向其地乎、自都於郡東、土持兼綱向封疆侮敵地、農夫止稼穡、則伊東氏不遑防東西矣、又七之浦邊構陣於要所、塞通路雖警衛、畿數多之軍船、發聲棹漕疾過海路、則不得遮止乎、使執事平田右馬助重宗・鹿屋玄兼・伊地知久安・大寺美作守司軍衆進退、教奈良某・牧某爲射者進退、射者亦撰弓矢之達人、達可進先陣之旨也、

〔全〕

既肥櫛間之老輩來、而爲發向之評議、以既定矣、

〔國分澤氏文書〕

以堀城障構門壁營作已成、而後明日將攻峠之城、敵兵傳聞此事乎否、其夜悉退散、然而我兵未知之、而攻寄城下孔雖侵侮、不吐一言不發一矢、疑是俟我兵近寄而後突出乎、徒費思慮、既移時刻漸進城門窺見之、則無一人之有歩卒矣、

永万ニ惣領職讓たひ候上ハ、御契約之条ノ一事もちかふましく候、たといちきニ米錢お入たる所領にて候とも、永万かためにてこそ候へ、たとハ田所永算の吳乱のちのむつかしき事をやめられ候へんとてまいらせぬ代を、かうちきニ文ニのせ、武法師か母の方ニと文句ニ、此ハ口ニ書付たひおき候、一ちう一反にて候へ、子どもの中ニも、又したしミの中ニもくれましく候、若おもふ事候ハ、永万ニ申あわせかのをんとしてくれられへく候、永万のゆるしなくしていきよかもはからふましく候、らうもうして後こそむく事候とも、女の身として御神領おはからふへきもあらず、ゆつり状と申ミつからかやうに申さため候上ハ、すこしもかわる事候ハ、正八まんくろしまの御はちをかふるへく候、惣領ニ申あわせす候



ハ、この狀にまかせ御やふり可有候、いさゝかけ□<sup>(カ)</sup>や  
くかわるましく候、仍狀如件、

應永卅一年二月十一日 紀氏女子あみたふ(花押)

〔澤氏文書〕

讓与本職所帶等可御供所檢校永万存□

右、本職御前檢校事、依無力永穩不取御下知、以幸□折紙<sup>(龜)</sup>

爲其職、永万任 神慮可申給彼職也、田所職者彼職代官  
職也、雖有永算申旨、於補本職者、自永算可爲御前檢校

進上上者、永万一家一圓管領勿論也、次所領等并濟使職

本所御下知就器用一家中仁雖給之、可爲一代儀、惣領一

圓可進退、永算無親讓手次狀、雖於文言、可爲盜人科、

所詮、永耀證文、永慶大問帳、永賢御前法橋補任致忠節百

餘貫文有御免、請取狀槌渡田所職田、限東恒見可付由御

下知、諸恒見望事□判、執印御外題繪旨御教書聖朝 符國

執事并<sup>(目メズ)</sup>關題并國司目代守護所御判正御供田<sup>(取)</sup>當職管領

上者不及注、万善・中津河・小濱惣寺田講田、荒田・栗

野若宮・中津野宮所向島次諸職所帶其外爲一圓上者不及

注、可惣領永万進退、中田所永賢請祈御下知、万善御下

知案文出時、永算号手習未還、但無手次讓狀、於後日雖

出之、如前申、可盜人科条、則社例先例也、次文書箱十

三在神寶藏、就神□永算用段之時者、永万以和合致一見、

後者如元可奉納神藏也、但補本職時者、永万一圓可相計

欵、次所領等欲宛行武法師時、永算内々腹立申間、所詮、

爲契約母義号質券不取米錢仁、遣數通狀、只永万一圓宛

行儀也、若爲吳篇時者、与請文相副讓与了、又永穩雖讓

自余子共中、任本條悔還、任親心条無子細、此守護證文、

永万可管領也、又代々國司爲師範上者、号國司申談守護

上者、社田以不可有妨之儀、於成吳亂輩者、不可有永穩

子孫之儀也、仍讓證文如件、

應永卅一年二月十一日

權執印兼御前法橋大和尚位永穩(花押)

1027

契狀

一 於于公方向無二弥々可致忠節事、

一 於于私大小事ニ付憑可被仰下事、

一 如此申入候上者、於于子々孫々い、か躰私雖子細出來候、

替不申可被懸御意事、

右此条僞申候者、日本國大小神祇、殊當國霧嶋大權現御

罰可罷蒙候、仍契狀如件、

1030

「大口高城氏藏」

「引カヘン義ニ」  
「かめわうかゆつり」

大かハのはやのかくらの門その田二反、しやうしんかも  
ち二反、かそこの内なか田七反、せうふんニ候へ共、心  
・さしハかりおもつてまいらせ候、さまたけなくちややう  
候へく候、一このうちハかめわうとのへかやし候へく候、  
のちのためニかきつけまいらせ候、

おうゑい卅一年きののへ十月廿六日

しん正(花押)

1028

『正文在國分正八幡宮社司澤氏』

正八幡宮領大隅國內本領并所々田島等事

右、任親父永穩證文等、領掌不可有相違之狀如件、

應永三十一年八月九日

『八代久重公』

存忠(花押)

(永万)  
澤殿

1029

「大口高城氏藏」

〔ゆつりあた〕 ふこけふん 〔所〕

1031

『廣濟寺文書』

御書畏拜見仕候了、抑龍泉庵之事、蒙仰候之間、千万之  
所仰候、愚身子ニ孫まで、御一筆之趣不可有申候、仍爲  
後證文如件、

應永卅一甲辰十二月十八日 久重判

廣濟寺

侍者御中

應永三十一年卯月廿五日 越後守久元(花押)

ゆつりあたふかめ王所  
さつまたきのこほり大かハ一きよく、かわそこ一きよく、  
とひみつ一きよく、ふなつた一きよく、あふつのいのし  
り一丁、はしき一丁、よしゑたのまゑ五反、ゑんかい  
はうのいやしき、ちうかうのうち五郎かいやしき、ミキ  
の所ハ、しんしやうちうたいさうてんの所なり、しんそ  
うのしやうニこゑハちきやう候へく候、あまりの事ニし  
んしやうもてつきしやうをそゑ候、のちのためニしやう  
くたんのことし、

おうゑい卅一年きののへ十月廿六日

しん正(花押)

「義天公御譜中」

一欲攻加江田城、而爲評議者兩三日、其後進於海陸、過折生迫濱邊已至湊涯、爰有稱曾禰山之地、各登此地、見敵多少道模樣、則敵兵隔一川流在向之地、蓋俟我兵之渡川所進向之佳期者乎、是以不渡川、而近邊民屋悉所以破却也、雖陷加江田城、曾禰山之地無類之要害也、定陣營之地於當所、如居城設門壁、爲土木之功矣、其後進加江田之麓、放火以侮城中、雖然無一人之出城門者、前日之大軍遁去曾井清武乎、未知所以其屯、於茲勇士等有言曰、今度發私宅之際、思臨戰場抽功名居衆人上、天未成也、其思慮不得遂爲空虛矣、然則川北川南之邊有起亂逆者乎、所詮、能構當陣不如俟時之至、深城隍修門壁矢藏屋舍、欲以逾年、長陣勞苦不可勝言、由是國中騎步共有可相代之定、故曰又三郎貴久歸陣也、以遠方之騎步先衆兵歸陣矣、翌年正月月中旬、圍加江田城、々主伊東安藝守已下銳兵、殊撰數輩射者守夫城實堅矣、我之兵已進堀涯將攻上、故互不顧被傷戰死、防戰更無止時、漸我兵作井樓孔以高矣、上之臨城裏、則城之廣狹高卑、人之衆寡強弱無不見知、能見之者曰、城裏窮困長不得支乎、丁此之時自城中言我曰、請放一面之通

路、使予之曹得逃去、我答曰、素有憤之未散、且復先是在穆佐高城之際、入忍於穆佐攻我者甚急也、由是去穆佐退山西、其憤又未散、何一人宥死之有乎、聞此言從城中蜜使价使達伊東氏乎、從曾井清武向我之陣發出來者殆二千騎屯兩所、使步卒向隈野川緣下、而實勢未嘗發動、于時鹿屋玄兼・伊地知久安曰、敵兵多勢思慮之外也、且復敵兵太有勇色、蓋渡川欲懸入當陣者乎、籠城之兵亦銳勇之士也、各非可怠慢之時焉、存忠曰、縱雖爲後圍、發師旅緩然以可進來、今也步卒進向草卒、念欲窺我兵衆寡與道之可非者乎、敢不足畏、速使我兵渡川以爲一戰、然則加江田之手當令佐多伯者守、今一人領精兵堅警衛、而其餘悉向外敵存忠已進發矣、輕銳之士爭先順川緣進向、敵兵會釋退去者不疾、宛似僞引我兵、然而各不足懼、前進之際日傾西山、故敵先退去、而我之兵亦歸陣矣、其後敵兵無一人之發步卒、加江田城非畜失防禦術、糧絕體倦無何之如、而後警屈請降、其詞曰、城裏守兵今已籠中之鳥網裏之魚、欲逃去而無道、伊東亦不能救、窮困在此之時、速可自殺、若又施仁厚宥守兵死得退去是幸也、存忠聞此言不得已而解一面圍、教渠等悉退去所以領加江田也、山東退治之始領此城矣、

一奈良氏熟以爲山東軍師之往還、憂有七浦一脈之道路無薩隅往還之徑路、有稱川路要害之地構陣營、奈良某居于此矣、是又一則對飫肥・田代・清武等之時、爲便宜之地乎、一則爲加江田之藩籬、封疆警衛之地也、

〔全〕

一菊池氏重朝教稱立田某者、爲使節到于志布志、有市人聖祐者、點客之旅宿、新納近江守殊以奔走、存忠遂對面於寶滿寺之光明寺、遠方之珍客亭主之奔走其品多矣、就中催安樂川下之一興、客與存忠・近江守老輩等乘扁舟、若冠壯士等衣單衣、順川流從兩緣、或水練捕網裏鱸魚

〔義天公御譜中〕

是以定居城爲營作也、川北川南亦入手裏、何難之有乎、終土木之功則發士卒歸陳之令、故各夜以次日經營既成、則長陣之騎步已歸陣矣、爰有奈良某者、爲山東郡郷之有司、將令居加江田、今度加江田没落、以故從清武城以下北郷三百町、從赤江川此方無居民、加江田八十町之内、自隈野木原至飫肥封疆者、奈良氏專爲方便、還住庶民所以守護領也、

名吉之類、入客舟中、或匪啻爲游泳於輕舟左右、數輩戲遊搏水分相撲勝負於水中、舟航老若乘其興、未顧水中淺深、不覺將入川中不亦樂乎、水中遊興漸已盡、則下扁舟與客俱入棧敷、俯仰以瞻前後左右山海美景、就中有茫然海中一小島之具衆美者、雖曰蓬萊山誰爲欺之、非楮筆之所能盡也、少焉遂鱸魚之庖丁爲目前之安排、念是松江之鱸魚易牙之和調亦何異之乎、盃酒獻酬數巡之後又加一興、野田彌市・市來少輔・新納又二郎・同〔攝津介〕四郎三郎・岩本四郎・平田福壽・同四郎・屋ヶ代虎鬼等之童子參候座右、獻酬移刻、宛如旅酬之禮、不知老之將至之際、夕陽白西山、晚鐘催歸家、是以主客與借雖惜餘波、各去棧敷、緩過海濱赴志布志、爰新納近江守隱置衆狗於濱邊松原中、計時之宜使人追出犬於沙濱、于時新納又二郎已下若輩、倏然、騎馬持弓矢、馳馬射犬、各射御之達者奇特之物合不可勝言、客亦乘與令馬馳矣、到于志布志則直各入立田殿旅宿、終夜盡花實之清談也、其後催犬追物射志布志西出、是亦隣國使節非可蔑如之儀也、

〔全〕

一其比大友殿使寺僧兩輩達與伊東氏和睦之媒、已到于加

江田、存忠在志布志、故又三郎貴久對面兩僧、而後山

東應和諧求既靜謐矣、雖然後來靜否未可預知之、恣不

逸樂敢無怠慢者也、

1036 「國史 義天公 大岳公」

三十二年乙巳春正月二十一日、公薨、年五十一、據島津

義天公未安置、一在鹿兒島惠燈院、一在穆佐悟性寺、而其墓所在不詳、穆佐人相傳、以為在悟性寺界內、安永三年春正月、有畑地於悟性寺界內者、入七尺、得國史川、中有大窠、枯骨存焉、邑人皆意為義天公墓、具狀以聞本府、據國史川上親敷、東鄉実包視之、悉如邑人狀、然無銘誌、名字世代不可得而知也、因命寺僧、仍其故處、營歛遷、立石為表、詳見川上親敷所作穆佐郷古塚記、 公生六男、長

大岳公、次用久、次季久、次有久、次豊久、一人為僧、

大岳公應永十年生於穆佐高城、母伊東氏、大和守祐安之

女、是歲年二十三襲封、用久稱薩摩守為薩州家祖、季久

稱豊後守為豊州家祖、有久稱出羽守為大島家祖、豊久稱

伯耆守為義岡家祖、據島津 二月二十七日、征夷大將軍足

利義量薨、法名道基、號長得院、據將軍 三月十四日、

大岳公以島津莊大隅方串良院岩弘名内九町、為大慈寺領、

據大岳 公薨譜 秋八月二十八日、故幕府下狀、使 大岳公領日向

大隅薩摩守護職、同上、將軍家譜、是時義量薨、義教未 九月二

日、故幕府賜 大岳公書曰、太刀一腰・金襴五端・鸞眼

五萬匹至、殊見厚意、因與太刀一振・鎧一領、同上、此書止有月日、無年、而舊譜置之於公親封之下、蓋有所據、今從之、

1037 卷之九補注

應永二十四年、田代久政、稱肥前守、清久之子也、田代清久見上卷應永五年、

1038 「應永記」

一同卅一年甲辰、匠作山東ニ取向キ玉ヒ、加江田城之後

ニ雖有力、一ツ者守護ノ權威、一ツ者三ヶ國ノ勇力、

爭カ伊東も可叶、彼城モ没落畢、屋形ノ仰ケルハ、山

東ノ退治ハ可輒、此十ヶ季ノ間、依國之制對面々辛勞

非一、今年者可有休息トテ皆有御歸也、從冬比匠作御

風氣ト聞得シガ次第第二重ク成給ヒテ不及祈禱醫術、積

綾羅錦繡要之鏤金銀、今度之御病氣平喻ト申セ共、不

叶而同卅二年乙巳正月廿一日ニ義天御年五十一、開盛

花風來テ奉誘事無情春ノ氣色哉、皆人愁へ爲ル計也、

自忠久以來次第ニ相續雖及十餘代、立其家風治此國、

依御謀コトニ威勢也、加之酒宴歌舞之術者事其艷色、

雪月花鳥戲、專物情、大掖ノ前裁ニ者春ノ樹秋ノ草生

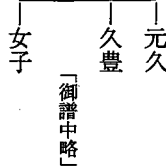
時之興ヲ賞翫シ玉ヒテ、諸事ニ直御心被施勇將將、中

ニモ弓箭ノ嗜兵革ノ鞍馬翫物者餘目見ヘニケリ、左レ  
 バ三尺之劍光一張之弓勢ニ被押、三ヶ國ニ挾野心人差  
 顯無ケリ、然間御一跡ヲ貴久ニ相續給ヒ、譜代武略ノ  
 家業ナレハ行末猶憑有リ、重其權守此威、御高祖父道  
 義ノ常ニ被仰計ルハ、見國安危守護之要術也、只依明  
 將之德國郡庄園穩成者哉、治乱世安是衆人力者也、守  
 治世堅是一人之惠也、山東ハ自國成レ共、伊東ノ者共  
 依成胡乱、京都申上ル度度々也、令相違求麻者他國成  
 共、相良之一家約諾一結憑夏在之、御物語ノ次者被仰  
 夏計也、嫡子三郎殿繼御一跡給フ、數十年ハ國モ無爲  
 ニシテ後出家仕給、法名ハ道鑒ト奉申臬ル、貴久之御  
 爲ニハ當曾祖父給、此二代繁昌ト申セ共、今ノ御代ハ  
 其ニモ超越ノ事多シ、斯テ同卅三年丙午、同卅四年丁未  
 屬無爲、依代始國廻之無滯夏、去程ニ年暮テ、應永モ卅  
 五天ニ成行計利、應永記、長谷場越  
 前入道記之云々、

「義天公御譜中」

一存忠以參觀之企、與執事老輩俱諸般爲群議之際、忽罹  
 病痾雖加療養、而不得其驗也、

「全」  
 一應永卅二年乙巳正月廿一日卒、年五十一、法名存忠、  
 號義天惠燈院殿、  
 一自應永十八年辛卯至同三十二年乙巳、共十五年治國也、



伊集院彈正少弼賴久室

「右ノ通御譜中ニアリ」

「正文在志布志大慈寺」  
 奉寄進

日向州龍興山大慈禪寺

鳴津庄大隅方串良院岩弘名内九町分

右、爲佛法紹隆、天下安全、家門繁昌、兆民快樂、奉寄

進之狀如件、

應永卅二年三月十四日

源貴久(忠國)(花押)

「忠國公御譜中ニ在リ」

1043 『福昌寺文書』

奉寄進

谷山郡中村之内

松木園一ヶ所

并大翠之内水田二段

右、彼地者、雖爲給分之内、依有志、爲父幸春禪門菩提料、奉寄進建忠寺所也、若於彼地違乱輩者、不可爲元幸子孫、仍爲後日寄進狀如件、

應永卅二年三月廿日

『元久公御家老<sup>大寺美作守元幸</sup>美作守元幸(花押)』

1044 『福昌寺文書』

『志園公御判カ』  
(花押)

薩摩國鹿兒嶋郡武村内宮丸崎五段并谷山郡和田内并尻五段事、右、旨趣者、爲父道語菩提料、取進大檀那源貴久(母之)加判、所奉寄進建忠寺也、仍寄進之狀如件、

應永卅二年六月一日

『御家老浦生美濃守忠清』  
美濃守忠清(花押)

1045 『福昌寺文書』

『志園公御判』  
(花押)

奉寄進

薩摩國谷山郡中村之内森田五段亦權現堂前五段、已上水田壹町并三隅園壹ヶ所之事、

右、彼所領者、爲父

了圓禪門、亦了祐禪門、

菩提料、永代所寄進建忠

寺也、雖然爲後代、取進本寺大檀那源貴久加判處也、次萬難公夏諸役等悉停止之、於兼清子孫聊不可有違乱候、仍寄進狀如件、

應永卅二年乙巳六月廿日

『吉田』御家老也  
若狹守兼清(花押)

1046 『山田氏藏書』「在久興譜中」

畏言上

大隅國小河院内一成村六町 見作十二町 同持富三町

山田内上別苳村五町五反 中村内入久四町

已上廿四町五反之段錢四貫九百文

應永三十二年潤六月九日

(山田久興)  
沙弥玄威(花押)

1047 「山田忠尚譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

請取申

山田殿御方よりの段錢四貫九百文、髓請取申候、

應永卅二年潤六月十一日 久篤(花押)

泊

安樂四郎太郎

久清(花押)

平山又六

久武(花押)

1048

『山田氏藏書』

加官

嶋津百王丸

三郎四郎忠豊

久豊(花押)

應永廿二年八月廿二日

嶋津三郎四郎殿

久豊

(本文書編年ヲ誤レリ)

1049

「正文在之」

「義教授軍家」(義持)

(花押)

日向大隅薩摩三箇國守護職事、所補任嶋津陸奥守貴久也

(忠國)

者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

應永卅二年八月廿八日

「忠國公御譜中ニ在リ」

「右ノ正文、舊御番所御文書ニ番箱中歴代龜鑑中ニ在リ」

1050

「正文有之」

太刀一腰・金襴五端・鸞眼五万疋到來候了、神妙候、太

刀一振・鎧一領遣之候也、

「應永卅二年比較」

九月二日

(義持)

(花押)

嶋津陸奥守殿

(忠國)

「忠國公御譜中ニ在リ」

「右ノ御書ノ正文、歴代龜鑑中ニ在リ」

1051

『正文在正八幡宮社司澤氏』

御親父永穩之證文等、義天御時御披見候て、任理運旨、

被成御下知候之間、同於當御代も御判書候之間、執進之

候、目出候く、恐々謹言、

「應永卅二年」

十月十七日

(本巴)

重恒(花押)

澤殿

1052

(本文書一〇五一号文書ト同文ニツキ省略ス)



1053 澤殿身上之事、故屋形義天之御時、任道理之旨、被成御判候之間、當屋形之御判おも無相違、本田方被進取候上者、聊於物(マ)も不可有子細之儀候、仍狀如件、

應永卅二年十月廿一日 執印紀朝臣善範(花押)

澤殿

1054 『福昌寺文書』

奉寄進

谷山郡山田之村大河内之内水田岩下三段十之夏

右、彼水田者、爲正智禪尼菩提料、奉寄進建忠寺處也、但此水田本物返三貫三百文之賣得之所也、自然本主被請候者、彼本物之析足、寺家可被召上候、仍爲後日狀如件、

應永卅二年乙巳十月廿七日

沙弥尼正智(花押)

1055 『島津國史 卷之十一』

大岳公 初名貴久、後改忠國、義天公之子也、幼字虎壽丸、稱又三郎、歷修理大夫、任陸奥守、法名大岳玄蒼深固院殿、

應永三十三年丙午春二月二十八日、公講犬追物、據大岳公

譜書

三十四年丁未、事缺不書、

1056 『福昌寺文書』

寄進申

薩摩國給黎内枚久見塩屋一取所錢一貫文一年中所上塩十六事、爲和泉清峯泉公大禪定門追善、同國谷山建忠禪寺所申寄進也、於此在所、聊不可有違乱、仍寄進之狀如件、

應永三十三年正月廿六日

〔守護代〕薩州 藤原好久(花押)

1057

『忠國公御譜中』  
〔在加治木衆市來太郎左衛門〕

犬追物手組事

應永卅三年二月廿八日

殿 廿一疋  
十七疋  
十七疋

嶋津次郎五郎 九疋  
九疋  
十二疋

島津又太郎 七疋  
七疋

吉田若狹守 四疋  
二疋

蒲生美濃守 七疋  
七疋  
七疋

平田七郎 七疋  
五疋

別府下野守 五疋

安樂七郎 五疋

肝付河内守 十三疋  
十四疋

柏原豊前守 三疋  
七疋

嶋津近江守 九疋

市來備後入道 七疋

檢見

嶋津上野入道

1058

「大崎士伊集院氏藏」

さつまの國なんかうの事、犬子ニゆつりあたふる事実也、此所領におめていらんわつらい申者、子々そん／＼においてあるましく候、仍爲後日ゆつりあたふる狀如件、

應永卅三年八月廿八日

【伊集院氏頼久ナリ】  
道應(花押)

犬子丸  
【頼久ノ三男 継久ノ幼名也】

1059

□さ候てうりわたし申候□田の事、河邊のこほりの内□のむらの内身作ふん五反□年ふん、今年としよりさるのとしの□月まで三年よう六貫文ニ候ハ、□房殿方ニうりわたし申候事実也、かやうにけいやく申候うへハ、□のねんきのあひたハすこしもいらんわつらい申事あるましく候、仍爲後日狀如件、

應永卅三年二月廿九日

【比志島久範】  
了幸(花押)

1060

「河邊玉泉寺文書」

奉寄進

河邊郡之内宮村ちうれい三反松崎長興禪寺に、伊作遠江

守永代をかきりてまいらせ候事実なり、若他のさまたけをする時ハ、此狀ニまかせ御知行あるへし、仍寄進狀如件、

應永卅三年霜月廿一日

久通花押  
【干時代官】  
金田同

1061

「河邊玉泉寺文書」

奉寄進

さつまの國いさくのしやうの内五りやうのしまのうつミ  
なみ一反、けすくりの内十ま一反、伊作加賀守方より河邊郡宮村長興禪寺きしん仕候事実なり、此内そののはら内田実屋敷一所そ多進候、同しかゝのかミ母御方よりけすくりの内さうつしりのミなくち一反、ちやうこうしニ寄進申候、若他のさまたけ候ていらんわつらい候する時ハ、此狀ニまかせ、永代をかきり御知行あるへく候、仍寄進狀如件、

應永卅三年丙午十一月廿六日

伊作加賀守

久秀花押

「按スルニ、玉泉寺ハ薩州國久ノ夫人玉泉知芳大姉忠國公御女御寺ニテ、

明應五年丙辰七月廿三日卒シ玉ヒ、神主并墓モ立テ居ルトノ、往古ハ長興寺ト云ヒ、宮村ノ内松崎ヘアリシトソ

1062 「正文在樺山氏」

用なる子細候間、下大すミくろ木原のしほや一十貫文ニ本せんかゝしニ、樺山殿より渡申候、三年すぎ候ハ、もとの十貫文返申うけ可申候、三年か間ハ三貫文のしほを可進候、爲後日狀如件、

應永卅四年正月廿二日 久安(花押)

(發卷) 樺山殿

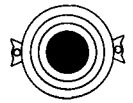
1063 「正文在岸良氏」

大隅國鹿屋院中村之内吹上之堂地別當式之事、任地名圓之坊讓申候上者、相懸候分之勤公事、御一期之間可有知行狀如件、

應永卅二年卯月十九日 (鹿屋) 玄兼(花押)

1064 栗野八幡

應永卅二丁未三月二日、願主崎津留道金正若宮鉦鏡栗野院



1065 「載本田元親譜」

「ウラ」 「道親妙壽」

奉寄進

道親妙壽兩靈位牌田事

合三段者 在所雉牟田

右、彼水田者、爲道親妙壽之後菩提、相除萬雜公事諸役等、奉寄附楞嚴寺者也、聊不可有他違乱妨、仍寄進之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 沙弥安了(花押)

楞嚴寺

(本田元親) 「ウラニ安了」 (花押)

1066 「載本田元親傳」

奉寄進

玄久禪尼靈供免事

合五段者 在所五反島

1068

〔載本田信濃守重恒譜〕

〔ウツラ〕

〔安貞〕

〔長田四反〕

右、彼島者、妙榮大師(婦)限永代買得地也、然而爲先妣玄久禪尼之後菩提、被寄進楞嚴寺上者、聊不可有他違乱妨、隨而相除万雜公夏、所奉寄附之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田元親) 沙弥安了(花押)

楞嚴寺

〔花押〕

合五段者 在所大山

妙榮大姉位牌田事

右、件水田者、爲妙榮大師之後菩提、相除諸役、奉寄附楞嚴寺者也、若後日致違乱煩輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田元親) 沙弥安了(花押)

楞嚴寺

1067

〔載本田元親譜〕

〔ウツラ〕

〔妙榮〕

〔安了寄進〕

〔ウツラ〕

〔大山五反〕

奉寄進

妙榮大姉位牌田事

合五段者 在所大山

右、件水田者、爲妙榮大師之後菩提、相除諸役、奉寄附楞嚴寺者也、若後日致違乱煩輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田元親) 沙弥安了(花押)

楞嚴寺

1070

〔福昌寺文書〕

奉寄進

奉寄進

實翁貞公庵主位牌田事

合四段者 在所長田

右、彼水田者、爲安貞庵主、別而依致志、奉寄進楞嚴寺、永欲令訪後菩提者也、隨而不可有萬雜公事、若重恒於子孫聊致違乱煩輩者、可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田) 藤原重恒(花押)

楞嚴寺

了哲禪定門位牌田事

合四段者 在所濱崎

右、件水田者、爲了哲禪定門之後菩提、相除諸役、奉寄附楞嚴寺者也、聊不可有他之違乱妨、仍奉寄進狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田) 藤原重恒(花押)

楞嚴寺

1069

〔載重恒譜〕

〔ウツラ〕

〔了哲〕

〔ウツラ〕

〔濱崎四反〕

奉寄進

了哲禪定門位牌田事

合四段者 在所濱崎

右、件水田者、爲了哲禪定門之後菩提、相除諸役、奉寄附楞嚴寺者也、聊不可有他之違乱妨、仍奉寄進狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 (本田) 藤原重恒(花押)

楞嚴寺

薩摩國山谷郡本中村之内水田五段三反山本  
二反鉢田

右、彼所領者、爲明山禪門追薦、奉寄進賢忠寺所也、萬雜公事諸役等停止之、於祢寢子孫聊不可有違乱、仍爲後日寄進狀如件、

應永卅四年八月三日

【孫寢】  
沙弥玄清(花押)

1071 『全』

【忠國公御花押】  
(花押)

薩摩國鹿兒嶋郡西田村内宮地園三ヶ所事

右、限永代、所奉寄進賢忠寺也、万雜公事者令停止之、

仍寄進之狀如件、

應永卅二年八月十日

【本田信濃守】  
藤原重恒(花押)

1072 『全』

【忠國公御花押】  
(花押)

薩摩國鹿兒嶋郡花棚内水田一町事三段水上、五段溝  
副、二段榎木田

右、旨趣者、爲安了後生菩提、限永代、奉寄進賢忠寺也、

万雜公事諸役等者、所令停止之也、仍寄進之狀如件、

應永三十二年八月十日

【忠國公御家老】  
【本田(元親)】  
沙弥安了(花押)

1073 「殉國名載中」

應永三十四年丁未

十月廿七日、北郷右京亮義知知久の弟、山東須田木の合戦に  
此二人討死のこと、大岳公の時  
に見、樺山次郎知音 同しき戦  
に死すたり、

1074 「北郷氏庶流系圖」

讚岐守義久之六男

義知

右京亮義知

應永三十四年丁未十月二十七日、戦死于山東須田木云々、

1075

この狀一つ公方にまいらせおき候間、心えられ候へく候、手つきの狀したい文おくり給るへく候、

□うに所領共ゆつり申候事子細なく候、さりながら身かいきて候つるほとたにも□身の無念ニ存候事のミならてうけ給へらす候、まして後へさこそわたり候へんす

れと存候、きやうたいにもすこしつゝおもひあて候と

ころゝ、なに事にてもしらんわつらひを申され候ハ、

日本國中佛神、ことには八幡大ほさつ 山王こけん 天

神 すわの御はつ候へ、了幸か子孫儀あるましく候、ゆ

つり状なんともみなほくたるへく候、かまへてく身の

あとをもち候へんなんとゝハ、おほせあるましく候、

きやうたいともふひんニおほせ候て、うれしく存へく候、

後日ためかきおき候也、

應永卅二年十月廿九日

(比志島久範) 了幸(花押)

1076 ゆつりわたすちやくし二郎四郎義清か所

さつまの國滿家院の内比志嶋・西侯・河田・城前田・上

原藺、以上五ヶ所の所りやうしきハ、河内入道了幸重代

さうてんの本領也、しかれハ度々のあんとききしよ・京

都関東御下文・代々のゆつり状一紙のこさすあひそへて、

義清ニゆつりわたす事実也、たゞし比志嶋内水田藺すこ

しつゝ、きやうたいにもゆつる也、かのちニおいてす

こしもいらんわつらひを申され候ハ、了幸か子孫儀あ

るましく候、仍ゆつり状如件、

應永卅二年十月廿九日

1077

「國史 大岳公」

正長元年戊申、是歲四月改元正長、自三月以前猶是應永三十五年 春正月十八日、

故幕府足利義持薨、號勝定院、據將軍家譜 夏四月二十七日

改元、據和事始

稱光天皇崩、

後花園天皇立、據日本王代一覽 八月二十日、夫人久山妙榮大姉

薨、據始良舍粒寺夫人牌子銘、棟室門梁誌、門梁誌、二十作念、和漢三才圖會、凡十日日句、二十日日念、閔耕餘錄云、吳王之女

名三千、故江南人呼二十為念、北人不為避也、字彙、廿、日執切、音入二十并也、古者竹簡字畫實少、故以二十并也、韻之推播聖蹟、中山何影

有字百廿、毛氏曰、今直以為二十字、參而考之則二十為廿為念、有自來矣、今畫二十日、從牌子銘耳、久山妙榮大姉者忍翁公夫人、氏族不詳、福昌寺年譜、忍翁公夫人、久山妙榮大姉、薨於應永九年十二月十一日、與牌子銘異、而牌子銘又云、至慶大姊卒於應永九年十二月十一日、

至慶大姊者忍翁公之女也、其卒乃與夫人薨同年同月同日、則年譜恐誤、然據年譜則夫人薨在應永九年矣、而至慶大姊卒在此年、亦不可知、疑

以傳疑、姑書其說於此、以後後考、夫人葬皆當書、然得佛公・道佛公・道忍公・道義公・道經公・定山公・齡岳公・義天公・大岳公・節山公・圓室公・蘭窓公・興岳公・大翁公、凡十四世夫人掩葬年闕、不得

而書、天明三年先史尼玉實門作五廟祭祀一卷、以安貞二年十月朔日為得佛公夫人忌日、其後又改十月為十一月、臣正誼・臣正懿・臣貞良竊謂、以此為祭之日、可也、以為薨之日、則妄且誣矣、今不取、

1078

「福昌寺文書」

【志園公御判】 (花押)

定置

寶泉山賢忠寺四至堺之事、東西者自上山古城岸、限佐宇津田後北長迫之奥、北者限主山後高尾、佐宇津田方者限年來、畠荒野分皆可爲寺山也、右此方至行松之内、畝獵芻藁耕芸停止之、并寺前者自佐宇津田前限上山尾崎渡湍、殺生制之、若背此旨輩、可處重過者也、仍爲後日之狀如件、

應永三十五年二月十八日

〔忠國公御譜中ニ在リ〕

1079 悦存候、あつしうといしうゐんとのニ□□にも御たてわかりある事候はん時ハ、ちかうにおよハす候、其外の事におき候てハ、向後御大事□□ハ身の大事と可存候、御同心ニ候ハ、恐悦候、このてういつハリ申候ハ、あふきたてまつり候、正八まんの御はちをまかりかふるハく候、恐々謹言、

卯月廿二日

慈榮(花押)

比志嶋河内殿

1080 『山田氏藏書』「在忠尚譜中」

畏言上

大隅國小河院内一成村四町五反卅 同持富一町三反 一成持富兩村五町八反卅 段錢一貫百七十二文  
應永卅五年五月廿二日  
(山田) 藤原忠豊(花押)

1081 「山田忠尚譜中」

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

段錢請取事

合一貫百七十二文

右、所定段錢之狀如件、

應永卅五年五月廿五日

時任十郎衛門三郎  
榮政(花押)

益山  
淨久(花押)

安樂  
久行(花押)

1082 「伊久一流系圖中犬太郎久林譜中」

〔寫在田布施衆前田彌左衛門重信〕

下 宮古若狹守久種

薩摩國薩摩郡之内宮古村十町事

右、依名字地所望如此、早任先例、可知行之狀如件、

應永卅五年九月二日

1083

「坂本田重恒譜」

「重恒為安了寄進」

「岩崎七反」  
「ウラ」

奉寄進

大隅國曾小河村内水田岩崎七段事

右、彼水田者、爲亡父安了禪定門後生菩提、楞嚴寺所奉寄進也、至子々孫々不可有彼地違乱之儀、仍寄進狀如件、

應永卅五年十月三日

藤原重恒(花押)

犬太郎丸(久林)

元一反冊

久木本田

不十

見冊 西山下 見十口 樋渡志 見一反

下板吹下(マ)ス 十 新加口

新加口

見卅 柳田西 見廿口 乍口 見口 下板吹預

不口 乍廿口 不十口

見口 猿喰 見廿 加津根田 此外口半分

見一反冊 乍一反 見久里町田 元一反 神田

世渡之口口 一屋敷半分 一外蘭半分 一土橋半分

永吉

元一反 乍廿 一新加一反

以上一町七反卅口 此外新加一反十 此外年不一反廿口

鹿屋若狭介

1084 鹿屋院上村相分之事

合應永三十五年戊申十二月六日

元二反 坂本田

元四反 河屋田(良カ)

ツ一反不一反新加十口

元一反廿 榎木田

元二反 馬庭田

元二反卅 下板吹田

新加口

元二反卅 樋下田

1085

「義天公御譜中」

(本文ハ一〇三九号記事ト同文ニツキ省略ス)

1086

「全」

(本文ハ一〇四〇号記事ノ前半ト同文ニツキ省略ス)



「全」

(本文ハ一〇四〇号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

〔表紙〕

忠國公 自正長二年  
立久公 至永享九年

前編 舊記雜錄 卷卅六

〔國史 大岳公〕

永享元年己酉、是年九月改元永享、自八月以前猶是正長二年、永享或作永享非也、按續本朝通鑑、永享取後漢書永享無窮之祥語、文章博士菅原在豐所撰、春三月十五日、足利義教爲征夷大將軍、

據將軍家譜 秋九月五日改元、據續本朝通鑑、冬十一月十六日、公講

犬追物於都於郡、據壹岐彌四郎家藏文書、原書云島津陸奥守殿、伊東六郎殿等凡十二人、蓋公如都於郡、與伊東

氏講大左兵衛尉大太郎改稱久林自山門院出奔肥前高來、既

而還國、居於日向、據島津系圖總州家譜、久林奔山門院事在上卷應永二十七年、

二年庚戌冬十一月朔日、公殺久林於眞幸院德滿城、久

林、定山公之玄孫也、總州家本宗至此而絕、承定山

公後者唯碓山氏、據島津系圖總州家譜、德滿城遺墟在加久藤地頭館西一里許、係川北村

〔西藩野史〕

忠國公

久豊公の長子、母は伊東大和守祐安日州都於郡の主、女也、應永

十年癸五月二日、日州穆佐院高城に生る、私に云、其地今杉榎を植て驗とす

虎壽丸と稱す、元服して又三郎貴久と稱す、應永三十貳

年乙巳正月、久豊公に繼て立つ、修理太夫忠國と改む、

後に陸奥守と稱す、八月二十日、將軍義持足利尊氏四世、使を薩州

に遣し書を齎し告て曰、薩隅日三州守護の任恒例に従へ、

忠國公謝す、

永享二年己酉、應永三十五年四月廿七日正長と先是嶋津上總介改元二年九月五日永享と改元

久世師久公の世子、太夫判官伊久の子、播磨守守久の長子、伏誅事ハ久豊公應永二十四年にあり、の後、其

子犬太郎河邊を去て事ハ久豊公應永二十七年にあり、山門院に走り、又去

て肥前國高木郡に居し、左衛門尉久林と稱す、又日州眞

幸院德滿城加久藤也に居す、按に、德滿ハ北原氏が封内なり、北原氏に據るか、忠國公軍を

發し是を討す、久林城中に自殺す、十一月十八日、久林の像を刻んで阿弥陀佛と

爰に至て師久公の嫡流断ふ、按に、師子三郎左衛門尉久安碓山と號す、其裔碓山次右衛門是也、馬関田平ニ立ツ、伊久の次子山城守忠朝の後、都城に有て相馬氏を置ス、

嘉吉元年辛酉、永享十三年二月十七日嘉吉と改元

先是將軍義教の弟僧と成て京師嵯峨大覺寺に居し、義照

大僧正尊宥と號す、性強悍にして多欲なり、潜に將軍を

弑して立ん事を欲す、發覺して將軍大に怒り極刑に行

わんとす、義照恐れて其從數人と亡命して日州福嶋に至

り、野邊氏に依り、將軍是を聞き、忠國公に命して是を

誅せしむ、依之桃山美濃守教久世四、山田出羽守忠尚後聖

稱す、山、新納近江守忠臣・北郷佐渡守未考、以上西本田信

田氏七世、命を奉し福嶋に至る、傳云、牧一旅、鹿屋、

濃守重恒中老、命を奉し福嶋に至る、傳云、牧一旅、鹿屋、

恒吉三氏是に従ふ、三月

十三、尊宥永徳寺に入て自殺す、山田忠尚其首を撃つ、從

者別垂讚岐坊有善坊、防き戦ふ、衆是を殺す、首を京師に

獻す、將軍親書を作り腹巻領一・太刀備前國を賜ひ、琉球

國を加封して其功を賞す、教久等も亦太刀を賜ふ、傳云、

山教久に賜ふも亦國宗の太刀也、永祿中義久公權山安藝善久陽州長

濱の第に臨の時是を獻す、後に又賜ふ、近世主計久初に至て又獻す、

に寺を府下椿木川邊に立て、按に、永正五年一月忠治公立つ、或ハ

二十一日、千臺山眞乘院大興寺眞言宗、坊津と號し僧正の靈を

祭る、傳云、昔時琉球國貢税を文給、五色を以て載て獻す、器物許多品

を大興寺に寄進せらる、國老通判の書今に存す、今に至て琉球

國の貢米十五石、及三月十三日・七月十四日祭祀

米四石を大興寺に賜ふ、有善か神主亦此寺に有り、又福嶋に怪異あ

り、邑人恐れて僧正の靈崇をなすとす、有司美作守社を

立て祭る、後に嶋津豊後守忠朝福嶋の宰たるの時、神社長

從二位吉田兼俱に因て神號を請ふ、於是後土御門帝百四

勅して福嶋大明神と號す、十二月、將軍義勝、忠國公に

十二日細川左京大夫勝元關野辺刑部少

世四

世四

世四

世四

世四

命命宜合カ貴久事して薩摩守持久忠國公の弟、後高木孫三郎世三侯院高城の内高木邑を食む

市來太郎等を誅せしむ、私云、其事詳ならず、越智通古か記に、

高木孫三郎逆意に由て退治せらるると云の

ミ、按に、今年六月廿四日赤松滿祐將軍義教を殺す、故に群臣義勝を立て

將軍とし、滿祐を討し党與を諸州に求めて誅す、三人も亦其徒に與する歟、

不、忠國公師を帥ひ日州梶山を圍ミ攻む、終に是を抜く、

守將高木長門守是家・左衛門尉殖家父子誅に伏す、所謂

郎か一族孫三

なるへし、

(注)「永享八年丙辰五月二十五日、西郷出雲守宗貞入道慶宗及其三男助

三郎宗伴二十〇隅州帖佐春毛村ニテ討死云々、伊集院氏夜ル平

山城ヲ襲フ、城兵堅拒之、伊集院衆引兵春毛ニ走ル、平山發兵追

之、餅田平松亦出テ船津ニ要テ撃、平松入道香林死之、平山氏賞

其功、平松欲清二千本十二町ヲ昇云々」

4990

『入來家臣宮里氏文書』

奉沽却

薩摩國宮里郷之内ぬまの

九郎次郎殿當居屋敷にしニ付之十之事

右、件箇者、胤正相傳知行無相違地也、然間依要用候、

萩之次郎五郎殿御方ニ、代之用途八百文ニ限永代奉賣渡

候事実也、守此旨、子々孫々にいたるまで、無他妨可知

行候也、仍爲後日沽券之狀如件、

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

正長二年かのへのとし二月十七日ぬまの種正(花押)

1091

□うく候にて、うりわたし申水田の事、□まの内  
 きたいつくり三反、ねんく一石二斗の□ころ、しろのか  
 へり五貫文定、本物かへしに□申事実也、三年すぎ候  
 ハ、いつもし本物のかわりにてうけ申へく候、この水  
 田へとしよちのかい候て、もたれて候を、かり申うり申  
 候、(衍カ)うり申候、なん時も本物かわりをまいらせ候時ハか  
 へし給へるへく候、本物まいらせす候尅分ハ、いさよか  
 いらんわつらい申ましく候、仍爲後日狀如件、

正長二年つちのとの二月廿八日 了幸(比志嶋久範)(花押)

1092

「在感應寺」

眞如寺住持職事、早任先例、可令執務給之由、所被仰下  
 也、仍執達如件、

正長二年五月十五日

畠山左衛門督持國入道徳本判

尚祐西堂

是ハ感應寺八世住持也

1093

『廣濟寺文書』

薩州伊集院寺脇名内圓福寺開山和尚讓与、先師南仲以  
(忠國)爲師資之相續、因之先孝無等以自筆證文、相加田島等

讓于南仲、南仲任彼狀讓於某崇悟、是專先考之遺愛、

而先師之相紹也、依有志不殘寺領一ヶ所所讓小師聖春、

凡寺院之繁興者、能紹法運禪道爲最、而不論土地之多

少、仍就室設禪床、以坐爲勤寺、曰、伴道余本意也、

始先考重開山道行起圓福、臥開創圓勝一基、後改圓勝

作廣濟、々々以故息山爲開山初祖矣、開山忌四月十一

日、南仲十二月十九日、無等十月十日、月庭正月八

日、毎月以四ヶ日齋次諷誦、大悲呪一返不可怠者也、

一爲聖春後紹者、不擇自他之門派、爲寺家以修理造營可爲

任人、而法眷中談合可定、不可以私好爲本、思之思之、

正長二年巳八月二十二日 住定山桃隱(伊集院)(花押)

熙久(伊集院)(花押)

「此文書、伊集院熙久謄中ニ在リ」

1094

『今國分郷上小川村』

上小河里の山野境内の事

古ハ清水ノ地也、今國分の新城也

一西ハはや人城の西のさかりひおとり山おさかう、いぬ  
第子丸のすミハてしまるミやうをさかう、  
今清水ノ内也

一北のさかいハはや人の城の北のさかりよりしてけなし  
毛無の城をさかう、うしとらのすミハあしたにしりをさ  
野の城をさかう、  
今清水ノ内也

かう、梅谷のほりまち、中のさこのほりまち、つふる  
野の城をさかう、  
今清水ノ内也

山のほりまちをうちとして、まつかさよりしゆうりて  
【松】 【蓋】 【修】 【理】 【田】  
【二】 【井手】 【赤】 【岩】  
んのおもてのあかゆわおさかう、屋た  
【今八世鳴迫ト云】 【尾立】 【久満】  
けをさかうてゑないざこのおたてをさかう、南へくま  
【鳥】 【尾】  
さきのミネにさかうて御まへのとり井をさかう也、

右、此境目を御さため候し時ハ、雍州之御代ニ山野の境  
【路】 【道】 【教】 【兵】 【主計】  
ふミ事、守護方よりハ、田中たうけう・はま田かすへ  
【厚地】 【淵】 【脇】 【脇】  
との・あつちとの・上井ふちハきとの、以上四人、雍州  
方より若松殿・伊地知殿・借屋入道・古河たうき・同  
大藏・御ちうけん右近せう・上小河おとなにい田のひ  
やうへ三郎・おちミのけんつう・江口檢校・わきのそ  
【名和】  
の、數多もん・なへの太郎ひやうへ・その田道性、こ  
のほか上小河おとなのこらす見申候事実也、  
正長二年つちのとの十月廿五日 伊季(花押)

「羽島氏文書」  
譲与 松豊丸所

薩摩國薩摩郡之内國分寺領坪付者、代々之文書ニ見得候、  
禪惠・禪祐・通松知行分不残一所讓渡候畢、河内國分寺  
領之田島一所不殘讓渡也、是も坪付者代々文書見得候、  
無他妨可令領知候、仍爲後代讓狀如件、

正長二年十一月十五日 惟宗宗友(花押)  
【全】  
譲与 松豊丸所  
薩摩國薩摩郡之内向田一曲讓渡也、  
右、件所職田島者、宗友重代相傳無相違地也、松豊丸可  
領知也、仍爲後代讓狀如件、  
正長二年十一月十五日 惟宗宗友(花押)

「載本田譜」  
よう／＼あるによて、ほんもつかゑしに入をくしろのか  
わり六くわん文之事、こむらのひやうへ九郎かつくりな  
り、ほり二郎ゑもんかつくりくひのさんやを、本物かへし  
ニ六くはん文の方へをく也、ねんき三年すき候ハ、あ  
りようにもとの六くはん文にてうけ申へく、仍狀如件、  
永享二年八月廿四日 さハにしより(花押)  
「ウラニアリ」  
彼在所新殿御請出候了、  
(花押)

永享六年十一月卅日

1098

境目之樣懇ニ可承候、

昨夕川口より罷歸候、春山之事無念此事候、同前候欵、

今度世上愚身一大事候、本末可爲御志候、心落候、可被

意用候、憑入候、伊集院方今程取乱ニよて、無沙汰之事

ハ承候て可被候欵、いか様近日之間、一身罷越候て、諸

事可申候、恐々謹言、

〔永享ノ初カ〕

七月一日

(忠國)  
貴久(花押)

比志嶋殿

1099

〔大口高城氏藏〕

ゆつりあたふ 重政所

薩摩國たきのごほり 温田 水方 三郎丸 國分万徳

新開壹町草道名内在 馬場屋敷<sub>宇</sub> 同國東郷之銚淵村内六

田五反 ゑしの前三反 同しやうの屋しき<sub>宇</sub> 相模國お

ち合の郷内野邊入道か屋しき<sub>宇</sub>

右所領ハ、眞梁ちうたいさうてのところ也、しかるニゑ

いたいをかきてゆつりあたふ所也、そうりやうのめいを

そむかすして、御くうしハせんれいにまかすへし、若重

政子なくハ、きやうたいの中にゆつるへし、このうちき

やうたいともニおもひあてよ、めんくのゆつり狀にま

かせて、そのさをいたすへく候、よて讓狀如件、

永享二年八月廿八日 眞梁(花押)

1100 永享二年庚戌

十一月朔日、本田石見久林君德滿城にて自殺の時殉死也、小田原空亦同し

す、

師久公の御子伊久、其御子守久、其御子久世、其御子左衛門尉久林なり、太守忠國公の爲誅せらる、年拾八とあり、總州家亡ひたり、考に

ふ、備

1101 〔伊久一流系圖中大太郎後左衛門中尉〕

永享二年庚戌十一月一日、來于日州眞幸院、於德滿城爲

太守忠國所凡誅、年十八、法號大義道椿、家臣本田石見

・小田原木工追跡殉死、嗚呼、是亦天平命乎、師久子

孫枝葉至于茲、靡有子遺矣、

1102 〔忠國公御譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

〔牛王〕  
起請文

右之意趣、殿ニ向申候て、いまよておきやしんを不存候、

又ハ自今後としても不忠をいたし、やしんをさしはさミ、

殿をうしなる申候する心あてなと、未かつて不存候之處、

たひ／＼か様之通蒙仰候、餘ニなけかしく存候程に申上

候、又ハ我等か身持などのことも、無理なることなと蒙

仰候て、中を御ちかい候する時ハ、無是非候、我として

殿之御意背候て、別して公方ほうこうのこと存申ましく

候、又ハ女儀付候てむりなること申上ましく候、若此旨

背候ハ、爲後日狀如件、

日本ちんしゆ

伊勢天照大神 熊野三所大こんけん 正八幡大菩薩 誡

訪上下大明神 南無天滿大自在天神しやうはつおのゝま  
かりかうむる可候、 藤原長久(花押)

『調所氏文書恒房傳』

初任勘析引出物廳宣

留守所下 諸郷院

可早任先例、弁濟任一庄御引出物并小神田小寺□

合

一郡役

御館御分上馬壹疋准百疋引副馬壹疋准卅疋  
准五十疋目代方馬壹疋准廿疋

家子御方中壹疋

先使馬壹疋准十疋

曾野郡 小河院

祇寢南俣 帖佐東郷

小名分

御館御分中ニ馬壹疋准五十疋但曾  
得丸弟子丸任替

家子分馬壹疋准廿疋 智能 小河

御館御分中ニ馬壹疋准五十疋重武十疋  
准廿疋内

修理所付任新五十疋 千手丸

勘析 曾野郡 重富一丁也、

長徳寺四段代八疋 大樂寺 勝樂寺一町四段廿八疋

尚佐寺五段代十疋 新千鉢阿弥陀堂三町六十疋

勝善寺一丁二反(廿)四疋(廿)丸廿疋 石殿寺三反六疋

尺迦堂一丁三反廿六疋 大王四疋

城阿弥院堂一丁廿疋 千鉢阿弥堂三段六疋  
米丸

小神田

重富

立神一町廿疋 飯富一反二疋 七社一町廿疋

重杖

又立神二段四疋 元行(北カ)此辰一丁廿疋

用杉松

立神二段四足馬方明神五段十足

重久七社一丁廿足 棟木二反四足

大迫内

安与四段八足 久樂二段四足

隨善寺房三段六足 力善三段小六足四丈

智能北辰三段六足

小河院

寺田

門藏一町廿足 不田子山七段十四足

河内山中寺三段六足 禪林寺壹町廿足

小河田

八龍神田一段半三足 隈崎明神

劬宮五段十足 城子五段十足六足

永野神田一町廿足 楠藤明神三段

明神七段二足 七石神田二反四足

北辰五段十足 歲宮三反六足

加志仇五段十足 劬宮三反半五足

大王二段半五足 北辰二段半五足

二牟禮一町廿足 平宮三段六足

大王二段四足 永利永野神田五段十足

得丸荒神四反八足

桑東郷

寺田

阿弥陀堂一丁廿足 藥師堂五段十足

釋迦堂三反六足 勝福寺壹町廿足

新福寺三段六足 福王寺二反四足重富

石崎寺二反四足 青蓮寺二反四足

小神田

府召草刈馬方

松永上津家形三段六足 武安下津家形三反六足

禪定房三段六足 秋松下津守一反二足

山田三反六足 葛坂明神二段四足

秋重河良谷三段六足 津久谷三段六足

断方

重武落水三段六足 万善北辰三段六足

主丸竹腋三段六足 同名三水尻三段六足

松永大神三反六足 重富國玉三段六足

中津河

宮永大渾三段六足 内志上岐田一段二足



内古家三段六疋 貞次二牟礼一反二疋

重富上津山二段四疋

上津聞岐

大牟四反八疋 軍神二段四疋

金木山一段二疋 志上岐一段二疋

桑西郷

寺

西明寺三段六疋 滿福寺五段十疋

朝日寺三段六疋 長壽寺一町二反廿四疋

藥師堂二段四疋 中山寺三段六疋

文殊山半疋

小神田

府召草刈馬方

牟曾木三段六疋 邊世刈三段六疋

有河一段半三疋 用丸石神六疋

小濱早鈴三段六疋 青山崎三段六疋

有里瀨部六段十二疋 有河神田五段半十一疋

皆尾神田三反六疋

蒲生院

寺田

大日寺二丁五段内重清一疋廿疋  
恒久一町五段

牟礼石一丁廿疋  
米丸

藥師堂一町廿疋 九鉢堂二丁四疋四十疋

久得二丁四十疋

无量壽院三町五反内 恒久一丁五反卅疋

佐聞寺五町百疋

吉田院

帝釈寺七段十四疋

祢寢南侯

寺田 石殿寺五段十疋

小神田得富

歲宮三段四疋 開聞五段 部世河一段二疋

御靈宮三段六疋 志加天五反十疋

部墓神田一段二疋

武安

歲宮二反四疋 戸柱神田二反四疋 若宮一反二疋

松澤御崎神田一丁三反廿六疋 直世神田一丁廿疋

元行稻牟禮一反二疋

安行

天留御子一反二疋 歲宮一段二疋 智口神田二反四

疋

若宮神田一反二正

加治木郷

崎守五段三十疋 永谷三段六反

鍋倉五段十疋

右、件御引出物并勘析、任先例、可令弁濟狀如件、

永享三年三月 日

調所書生(花押)

目大中臣(花押)

厨家書生

惣切手檢校(花押)

田所檢校達部(花押)

惣檢校藤原(花押)

大介兼稅所檢校(花押)

目代藤原(花押)

〔國史 大岳公〕

三年辛亥、事缺不書、

四年壬子夏五月十三日、

公與廻氏盟書、據大岳公舊譜、廻氏曰見上卷應

永十九年、而此云廻氏、據福昌寺奉加帳、蓋豐後守元政、按廻源兵衛系圖、源三位賴政子曰伊豆守仲綱、仲綱子曰肥前守宗綱、治承四年宗綱領隅州廻子孫因以為氏、十五、日、賜比志島河内守義清盟書、據大

岳公舊譜、比志島隼人系圖、比志島久範見上卷應永十九年、六月

晦日、公與阿多某書使領伊作莊大野、據島津支流系圖、公

支流系圖置之於阿多飛騨守忠清傳、按忠清、久清字、永享九年、公與阿

多龜德書使領邑、龜德、忠清幼字、然則此年忠清尚幼、而久清在否不審、

所謂阿多殿者或指久清、亦不可知也、下文、三州反者蜂起、稱國一

探、樺山助太郎家藏其祖孝久永享四年七月十三日書一通、其一遣北郡

急事、又壹枝瀨四郎家藏文書云、永享四年尚、皆言當時國步艱難、公家危

島津殿不克、山東諸邑陷沒、又東光坊藏伊東家略記云、永享四年、薩隅

日一揆兵亂起、則置於此、公不能討、乃使弟薩摩守好久久

始名、攝守護職擊國中反者、而公自鹿兒島徒末吉、據節

舊譜、舊譜載節山公一書、書中言某幼稚時、聞永享中國一揆蜂起、奧州使

其弟薩摩守用久攝守護職、而奧州自鹿兒島徒末吉、此書後半殘欠、不詳

與誰人、又年月不可知、但據上文所引壹枝瀨四郎文書、伊東家略記、則

其事在是年明矣、而下文用久與樺山孝久盟書、且使伊作教久、山田忠尚

守護職之後矣、故置之於此、秋八月二十七日、好久與樺山次郎

三郎孝久盟書、孝久、教宗之子也、據島津支流系圖、樺冬十

月十一日、好久使伊作安鶴丸領伊作莊北方及西城、其舊

邑也、據伊作家譜、安鶴丸、克久之十一月三日、公使阿多某

領、河邊泊之津、據島津支流系圖、二十四日、好久使山田出羽守忠尚

領谷山郷山田村如故、又使領大隅恒吉三町地、忠尚、久與之子也、同上、山田久十二月七日、使阿多某領伊作院和

田、大野、多布施高橋、河邊田邊田、田上、野間、今田、泊津、同上、郡村高辻帳、伊作郷有和田又與之盟書、同上、河邊郷有田之上村、野間村、

1105 「載本田重恒譜中」

一永享四年壬子二月三日、自 太守貴久公後号陸奥守忠國公、賜本  
田之姓地頭檢断代々免許證狀於重恒、

1106 本田名字、於領地在之所之諸口事出來之時、地頭檢断代

々指免所也、自今已後相違之儀是有間敷候狀如件、

永享四年壬子二月三日 貴久(忠國)(花押)

(重恒)  
本田殿

1110 『上原氏文書』

薩摩國伊作庄之内大野事、所宛行也、早任先例、可被領  
知狀如件、

永享二年六月卅日

(家久)  
阿多殿

(忠國)  
(花押)

1107 「阿多氏系圖中」

久清—忠清—經久

初家久 龜徳丸 飛彈守

1108 「正文在志布志土阿多飛彈忠縣」

河野邊内田野上十八丁并高橋三十六丁、此外之事者伊集院  
現形候時、關所次第立替七十丁、爲所可相計狀如件、

永享二年卯月廿日 (忠國)  
(花押)

(家久)  
阿多殿

1109 「全上」

谿山中村之内

三町はきあいの門

鹿兒嶋之内あらた  
うきめん

一町さいくまち

并鹿兒嶋小野之内

六反廿いわ下の門

并原良之内

五反 おき

同所  
二反 嶋めぐり

并さうむたの内  
【草 弁田】

二反 寺地

并いつミさきの内  
【泉 崎】  
今ノ上山寺アタルカ、島津山城守忠朝入道道  
聖モ鹿兒島ノ泉崎ニ居ラレシコト旧記ニアリ

五反

以上水田六町廿

1111

永享四年五月十三日 守秀(花押)

「忠國公御譜中」

「正文在始良衆大圓坊」

右、意趣者、

一世上如何様雖轉變候、無二用ニ立被立可申事、

一今度別而志之至、自今以後忘不可申事、

一如此申談候上者、不慮之荒說讒者時者、直ニ落居可申

事、

此條ニ偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者

正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天滿天神可蒙寵御爵

候、

永享四年五月十三日

(忠國) 貴久(花押)

(完卷) 廻殿

1112

「正文在比志島監物範貞」

一右、意趣者、世上如何様雖轉變候、無二心可憑存事、

一此刻忠節、於生涯不可忘申事、

一如此申承候上者、不慮之和讒凶害申事候ハ、直ニ可申披事、

若此條ニ偽申候者、

伊勢天照大神宮 諏方上下大明神 八幡大菩薩可蒙御

罰候、

永享二年五月十五日

(忠國) 貴久(花押)

(後述) 比志嶋殿

「忠國公御譜中ニ在リ」

1113

嫡子大房丸所ニ薩摩國滿家院の内比志嶋・西侯・河田・

城前田・上原蘭、五ヶ所の惣領職ハ、源義清重代さうて

んのち也、しかれハ関東安堵御下文代とのつきの状等

をあひそへて、ゆつりわたすところ也、方々の御くうし

等ニおいてハ、せんれいのむねニまかせてきんしすへし、

以此旨、永代無相違可知行狀如件、

(比志島) 源義清(花押) 永享二年六月一日

1114

「谷山伊佐智佐權現文書」

奉寄進

右、意趣者、伊佐智佐權現修理之柳田三段卅寄進之狀如

件、

永享二 壬子六月晦日

伴兼忠

1115 「正文在樺山氏」

大方愚意雖令啓上候、重く申置候、身之事今度之刻、  
屋形之立御用、捨命候事勿論候へ共、本望候、雖然則時  
ニ一跡絶失候する事、餘なげかしく存候、鍋増丸か事、  
高木殿を一向ニ憑申候より外の無了簡候、彼仁か事、城  
所領にもはなれ候へぬ様ニはくくまれ候へ、來世まで  
も心安かるへく候、志和知への御中媒を憑存候、又老母  
姉にて候ものか事、申上候までもなく候へ共、是又御芳  
志をなしてたのミ申さす候、いかに御ふち候へく候、  
とても申入候はずとも、御ふさたあるへく候共、不存候  
之間、不能巨細候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

永享二年

七月十三日

(樺山) 孝久(花押)

梅殿和尚  
侍者御中

「上包」  
安國寺

衣鉢侍者

御中

孝久上

「此書、樺山氏五代滿久譜中に在リ」

1116 「正文在樺山源三郎久清」

以面雖可啓候、生死之習今より難定候間申置候、就其愚  
身か事、屋形之立御用、捨命候事本望候、雖然一跡則時  
ニ絶失候する事、餘なげかしく存候、なへます丸か事、  
御殿人とおほしめし、城所領ニもはなれ候へぬ様ニ御方  
便候て、人たてられ候へ、來世までも可心安候、偏憑  
存候上へ、親類内者も、御意共ニそむき候事あるましく  
候、尚く彼仁か事、乍恐子とも被思召、又親ともたのミ  
申へく候分を申付て候、相構く申候意趣、御ちかへある  
ましく候、恐く謹言、

永享二年

七月十三日

(樺山) 孝久(花押)

北郷殿

次郎殿

「此書、樺山氏五代滿久譜中にあり」

1117

「正文在樺山氏」

尚く鍋増か事、恐なから子ともおほしめし、又親と

もたのミ可存候由、かたく申付候、

生死之習今より難定之間、先者不令啓候、就其三か國之事、如此罷成候て、屋形之立用、捨命候事本望候、雖然一跡則事ニ絶候する事、餘ニなげかしく候、なへますか事存候へす共、御近所と申可憑存候、ましてまきれぬ子細にて候ほと之意趣を申入候へハ、中々隔心ニ相當候欵、此仁か事、ともかくも御身持のことく候て、城所領にもはなれ候へぬ様ニ御計候て、御殿人とおほしめし、人たてられ候へハ、來世までも可心安候、今度之刻度々此趣申候き、定て可被思召合候、一向憑申候上者、親類内者も御意ニそむき候事あるましく候、相構々令申分、不可有御違候、恐々謹言、

永享二年

七月十三日

(權山) 孝久(花押)

高木殿

「上包」高木殿

孝久

「此書、樺山氏五代滿久譜中ニ在リ」

「正文在樺山源三郎久清」

讓与

御下文御教書探題御判相共敷通、代々宗領御文書、代々讓狀、孝久當知行不知行、不残一所、愚息鍋増丸仁讓渡所也、既彼仁孝久一跡お令相継間、親類内者聊不可成疑者也、仍讓狀如件、

永享二年七月十三日

嶋津鍋増丸殿

「四代美濃守也」孝久(花押)

「此書、樺山氏五代滿久譜中ニ在リ」

「權山氏四代孝久譜中」

「正文在樺山源三郎久清」

雜務之沙汰之事、なにとしてもよくつりひいきによて、しやうつよく申候事つねのならひにて候、少事か大事ニ成事うたかひなく候、しよむろん・下人さた・ぬす人さたなどハ、地はんはちと物よハくあるへく候、必沙汰を大にしなし候て、わかうせ候するニ成候て、うちすて候事いま程ある事にて候、不可然候、またしき時物よハく候ハ、外のひハうをハ請ぬ事にて候、相構々かんにんあるへく候、尚々またしき時、しやうこハく候事もつたいたなく候、よく談合候て相計ハれへく候、

七月十三日

(權山) 孝久(花押)

おとな若衆之中

1120

「正文在樺山氏」

(本文書ハ二一九号文書ト同文ニシキ者略ス)

1121

「正文在樺山源三郎久清」

契約

右、意趣者、雖爲天下轉變、無二可申談事、

一於自今以後、御大事由身大綱と存、就萬事無違篇可憑

存事、

一如此申談候上者、自然和讒凶害申者候共、聊不可有承

引事、

此條々若偽申候者、

日本國中大小神祇、殊ニ取分伊勢天照大神宮 熊野三所

大權現 八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿天神可蒙御

罰候、

永享二年八月廿七日

(用込)  
好久(花押)

(筆込)  
樺山殿

「此御書、樺山氏四代孝久譜中ニ在リ」

1122

「山田忠尚譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

契約

右、意趣者、於自今以後者、就大小事可申入事、抑於私者、親類縁者又者國々傍輩中之儀にもひかれましく候、

御大事之時者、身之大綱と存、御用ニ可罷立申候、か様

申定候上は聊不可替申候、若又和讒凶害之輩出來、如何

様之子細を申候共、不可及信用候、則以面直申承可散不

審お候、若此条々偽申候者、

伊勢天照大神宮 正八幡三所大菩薩 諏方上下大明神

四十九所大明神之御罰お可罷蒙候、

永享二年八月吉日

(用込)  
河内守兼元(花押)

(忠尚)  
山田殿

1123

「立久公御譜中」

女子

伊集院大隅守熙久室、母新納近江守忠臣女也、後發

心、大徳寺之爲住持、

女子

島津薩摩守用久室、母同前、

—女子

新納近江守忠續室、母同前、友久

又太郎 右馬頭 相模守 母伊作四郎左衛門尉勝久女也、○以生他腹不爲家督、○子孫記別紙、  
十一代  
—立久

又三郎 修理亮 陸奥守

永享四年壬子十一月五日誕生、母新納近江守忠臣女也、

1124 「御系圖」

—立久

又三郎 修理亮 陸奥守

永享四年壬子十一月五日誕生、御母新納近江守忠臣

女也、

「古系」  
「寛正元辰御年廿九歳ヨリ文明六甲午マテ治國十五年」

1125 「在子伊作教久譜中」「正文在卷本トアリ」

嶋津之御庄薩摩方、伊作之庄北方并西之城、爲祈所宛行也、早任先例、不可有領知相違狀如件、

永享二年十月十一日

「薩州家元祖用久也」  
好久(花押)

伊作安鶴殿

「教久嘉吉二年正月十九日卒」  
「伊作譜中ニ此年月ナシ」

1126

「阿多氏飛彈守忠清譜中」  
「正文在志布志士阿多飛彈忠縣」

薩摩之國河邊之内泊之津事、依忠節當行所也、早任先例、

可爲領知之狀如件、

永享二年十一月三日

(忠國)  
(花押)

(忠博)  
阿多殿

1127 「全上」

薩摩國伊作院内和田・大野、多布施内高橋、河邊内田邊

田・田上・野間・今田、泊津之事、爲祈所當行所也、任

先例、可令領知狀如件、

永享二年十二月七日

(用久)  
好久(花押)

(忠博)  
阿多殿

1128

薩摩國河邊別府先立式之事、忠節無意篇者當行狀如件、

永享二年十一月十六日

(忠國)  
(花押)



二宮八郎左衛門

〔忠國公御譜中ニ在リ〕

1129 嶋津御庄大隅方恒吉内三町并薩州谷山内山田先知行分事

右、爲祈所充行也、早任先例、不可有領知相違狀如件、

永享四年十二月廿四日

好久(花押)

山田殿

1130 〔阿多飛彈守忠清譜中〕

〔正文在志布志土阿多飛彈忠縣〕

契狀

一右之意趣者、天下てんへん候いふ共、相替申ましき事、

一御大事之時者、身之大綱と存、御用可立申事、

一如此申談候上者、若わんさん、くわうかい出來候する

時者、以面可申承事、若此条、偽申候者、

日本國中大小神祇、別而者伊勢天照大神 熊野三所こ

んけん 八幡大ほさつ 諏方上下大明神 天滿天神御

罰可罷蒙候、

永享二年十二月七日

好久(花押)

阿多殿

1131 〔樺山氏文書〕「在源三郎久清」

大隅・薩摩・日向之所と買得之所領事、早任先例、可爲領知狀如件、

永享二年十二月十三日

陸奥守(花押)

樺山殿

〔此御書、樺山氏四代孝久譜中ニ在リ〕

1132 〔國史 大岳公〕

五年癸丑夏五月十九日、好久使富山氏領大禰寢瀨筒村地

頭職、曰、俟有闕所、然後與以本領、據島津支流 系圖用久譜 秋七月八

日、公使樺山孝久領日向方諸縣莊入名及宮原村、據島津支流 系圖

金欄五端・沈二本・酒器一箇・鉢一對・鷲眼二萬匹至、其一屬飯野郷 其一屬三俣院

殊荷厚意、報以太刀鎧、不宣、據大岳公舊譜、此書原文止云閏七月十一日、下書義教花押、無

年、據明時館長曆法、自應永至嘉吉四十餘年、其間七月置閏者三、其一

在應永二年乙亥、其一在二十一年甲午、其一在永享五年癸丑、而義教應

永中爲天台座主、永享元年己酉任征夷大將軍、嘉吉元年辛酉

爲赤松滿祐所弒、則其書云閏七月者、在是歲永享五年明矣、

六年甲寅、事缺不書、

1133 〔野邊氏文書〕

大隅國深川院此内二<sup>(十)</sup>町除、相殘候分之事、爲料所宛行

處候也、然者早任先例、領知不可有相違如件、

永享五年二月廿四日

〔伊集院照久  
爲久(花押)〕

野邊殿

野邊殿

1134  
〔全〕

盛仁一跡之事、平次郎盛覺仁相續不可有他之妨、一家之

爲惣領上者、盛仁拜領悉可知行也、仍狀如件、

〔年紀不詳〕

〔宛書ナシ〕

1135  
〔大騎士伊十院氏藏文書〕

犬子之間之事、雖兄弟之事候、已養子たる子細申候上者、

於自今以後、無二心可存候、仍如此互申談事候之間、南

郷懸持在所之事共、所領出來候する時者、立替候て一圓

ニ可遣候、後日爲證文進之處候也、仍如件、

永享五年卯月一日

〔照久ノ初名  
爲久(花押)〕

犬子殿

〔照久ノ三男三郎左衛門維久ノト也〕

1136  
〔全〕

南郷之内あきしたひに、知行あるへき事如件、

極月廿七日

〔照久ノ幼名也  
犬千代丸〕

犬子殿

1137  
〔伊集院照久譜中〕

〔正文在田代縫殿清長〕

大隅國串良院之内上条十町并岩弘十八町、爲祈所宛行處

也、然者早任先例、領知不可有相違狀如件、

永享五年卯月廿九日

爲久(花押)

田代<sup>(清定)</sup>彦太郎殿

1138  
〔薩州家用久一流系圖〕

用久

初好久 中持久 薩摩守 母伊東氏女也、

九代之 太守陸奥守久豊公二男也、

1139  
〔薩州家系圖〕

永享年中奉 忠國公之命、爲守護代預政務三年、

1140 「正文在善入志々目正兵衛義辰」

嶋津御庄大隅方祓寢院大祓寢内瀬筒村地頭職、爲給分所宛行也、早任先例、可領知、并先知行代地事、闕所次第可致其沙汰之狀如件、

永享五年五月十九日 好久(花押)

富山殿

「此文書、薩州家用久ノ譜中ニ在リ」

1141 「在樺山氏」

きやうとへあつらへ物

一てうしひさけ一く 内しろく外くろ しゃくとうも

んハまるニ十もんし 一貫百五十文 代七百文

一れゐしきたち二ふり 一貫百文 代八百文

一すいはし一そく 四百五十文 代三百五十文

一すみ五ちやう 代五十文 一かきあわせ

一こすちのおり物一上 代二貫三百文

一ねりぬきかたノ上 代一貫三百五十文

一きぬ一上 代二貫文 以上れうそく七貫五百文

永享五年六月十一日 のミミたに(花押)

1142 「樺山氏」「在源三郎久清」

嶋津御庄日向方諸縣庄之内入名并宮原村、爲祈所々宛行也、任先例、可被領掌之狀如件、

永享五年七月八日

陸奥守(花押)

樺山次郎三郎殿

「此御書、樺山氏四代孝久譜中ニ在リ」

1143 「正文在楞嚴寺」

「寄進状」

中道玄祐

奉寄進

右、意趣ハ、善神王島一段事、代用途一貫五百文ニさた

め候て、本錢かへしのしちけんニ、師子神人馬四郎檢校

手より中道玄祐取て候を、本文書相そへ、二親爲後生善(菩提カ)

清水のれうこん寺ニ奉寄進處実也、何時も本主うけ申候

する時ハ、此新足にて別在所をもめされ候へく候、本文

書相副奉寄進状如件、

永享五年九月八日

宮内中道玄祐(花押)

1144

「正文在楞嚴寺」

「寄進狀」

つまかり兼友

奉寄進田之事

合貳段定

在坪へ五の坪一丁の内お二段川ニそい候お  
へ堂場ニ寄進申候。其ノ上ノ二段にて候

右、件田者、爲月峯淨光禪門後生菩提、楞嚴寺ニ寄進申

處實也、若於子孫親類煩申候者候へ、永不可爲子孫親

類候、只シ此田者買得之處にて候間、若本主よりうけ申

され候へんする時へ、本主より料足四貫文おめされ候へ

く候、仍爲後日證文寄進狀如件、

永享五年癸丑十二月十四日

つまかり兼友(花押)

1145

『福昌寺文書』

建忠寺御寄進

坪付

三段 光長之内

大キヤウ

二段 同名

木佐木

二段 乙松名

木佐木

二段 同名

外蘭田

以上水田一町

永享六年

正月廿六日

「志園公御家老平田美濃守」

氏宗(花押)

「本田信濃守」

重經(花押)

1146

『正文在宮内社司澤氏』

奉寄進

正八幡宮御寶前

帖佐濱益田村内御供田六段、  
薄生米丸内四段、以上一町事、

右、爲志者、天下泰平、國土豊饒、殊心信大施主平氏宗

子孫繁昌、武運長久、号正宮御供田、限盡未來際、奉寄

進者也、不可有祐家知行相違、仍寄進狀如件、

永享六年二月一日

平氏宗(花押)

澤殿

1147

「伊集院照久譜中」

「正文在伊集院圓通庵」

薩摩國伊集院石谷之内たかひ一町二反并屋敷一所、限永

代奉寄進圓通菴候處也、早任先例、可有知行之狀如件、

永享六年卯月十六日

「伊集院」

照久(花押)

「圓通菴寄進狀」

1148 「國分宮内澤氏藏」

奉寄進 正八幡宮御寶前

大隅國帖佐郷寺師村内水田 八段向田 二段背木、以上一町事

右、旨趣者、爲天下泰平、國土豐饒、殊者信心大施主藤

原重經武運長久、壽命長穩、子孫繁昌、所願成就、号

正宮毎年正月二日御供祈田、限盡未來際、奉寄進所也、

然者不可有相違社家知行、仍寄進之狀如斯、

永亨六年六月二日 (奉) 藤原重經判

1149 『福昌寺文書』

よふくあるによつてうりわたし申候本せんかへしの水

田の事

合五反者

右、件の此すいてんへ、たけの内大意まち五反代のよふ

とう拾貫文にさため候て、西郷殿へうりわたし申候事実

也、三ヶ年内へうけ申候ましく候、それすぎ候てなくと

きも、ありかりに本せんをかへし申候てうけ申へく候、

そのときいさゝかいらんわつらい仰られましく候、仍爲

後日狀如件、

永亨六年甲寅四月廿三日 (奉)

(花押)

小旨熊一(花押)

1150 『公』

奉寄進鹿兒嶋郡武之内水まち

已上五段事

右、此水田者、代用途十貫文質券申定、爲二親施入福昌

寺聖僧侍者寮、以爲年年定坐之茶料者也、何時も日本之

被請候する時者、以本錢別田地、御方便有度候、爲後證

質券狀相副申候、仍狀如件、

西郷前參河入道親鼻(花押)

永亨六年甲寅八月廿九日

1151 「伊集院照久譜中」

「正文在伊集院廣濟寺」

(本文書ハ一一六〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

1152 「正文在正八幡宮杜可澤氏」

(本文書ハ一一四八号文書ト同文ニツキ省略ス)

1153 爲御祈禱、御馬共進宮候、此内ニ鹿毛一疋之花柄者、其

ニ可被立置候也、恐々謹言、

七月廿五日

(本巴) 重經(花押)

澤殿

「山田忠尚譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

〔牛王〕

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心御用可罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通雖催促、無

承引へ、其仁一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ侘申、無

承引者、身之大綱と存、相共ニ可爲一味事、

一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致催促、

無承引へ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、若不慮在

讒者、和讒凶害荒説出來者、直申披き可承事、若此条

々偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所權現 當國鎮守正八幡

大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧嶋六所大

權現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 十五社大明神

之御爵子々孫々可蒙罷候、

永享六年六月廿二日

(平田右馬助重宗) 右馬助姓宗(花押)

(忠尚) 山田殿

「山田忠尚譜中」

〔牛王〕

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心御用可罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候之者、不可然通雖致催促、無

承引へ、其仁一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ侘申、無

御承引者、身之大綱と存、相共ニ可爲一味事、

一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致催促、

無承引へ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、若不慮之

有讒者、和讒凶害荒説出來者、直ニ申披キ可承事、

若條々偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所權現 當國鎮守正八幡

大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧嶋六所權

現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 上下大明神御爵

ヲ子と孫と可蒙寵候、

永享六年六月廿三日

(野辺) 藤原盛豊(花押)

(總徳) 山田殿

1156

〔全上〕

〔牛王〕

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心ニ御用可罷立事、

一無謂自訴申、公方お恨申候者、不可然通雖致催促、無

承引ハ、其仁一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ恠申、無

御承引者、身之大綱と存、相共ニ可一味事、

一就境目所務等之事、無謂事お他所へ申懸者、是又致催促、無承引ハ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、有讒者、

和讒凶害荒説出來者、直ニ申披キ可承事、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所權現 當國鎮守正八幡

大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧嶋六所大

權現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 上下之大明神

之御爵子と孫と可蒙寵候、

永享六年六月廿三日

(石井) 平忠義(略押)

(總徳) 山田殿

1157

〔全上〕

〔牛王〕

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心御用可罷立事、

一無謂自訴申、公方お恨申候者、不可然通雖致催促、

無承引ハ、其人一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ恠申、無

御承引者、身之大綱と存、相共ニ可爲一味事、

一就境目所務等之事、無謂事お他所へ申懸候者、是又致催促、無承引ハ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、不慮有讒

者、和讒凶害荒説出來候者、直ニ申披キ可承事、若此

条々僞申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所權現 當國鎮守正八幡

大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧嶋六所大

權現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 四十九所大明

神(狩カ) 將長大明神御子之孫之可蒙寵候、

永享六年六月廿二日

(肝世) 周防守兼政(花押)

伴兼直(花押)

山田殿(忠徳)

1158

「全上」  
「牛王」

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心御用可罷立事、

「外敷行同文略」

永享六年六月廿二日

興長武清(花押)

山田殿(忠徳)

1159

「全上」  
「牛王」

契約

一仰 好久、雖爲世上如何様轉變、一味同心御用仁可罷立事、

「外前文ニ同シ略」

永享六年六月廿二日

河内守兼元(花押)

伴兼忠(花押)

伴貴重(花押)

山田殿(忠徳)

1160

『廣濟寺文書』

薩摩國折原名内今寺并林藺山内辻各々堂地同草水等田畠并山野之事、坪付在別紙、彼三ヶ所者、有屋田有久廣濟寺仁寄進たりとゆへとも、子息清久退出候上者屬缺所候間、あらためて歸付申候処也、於爲久子之孫之いらんわつらいなく可有御知行候、仍爲後證狀如件、

永享六年六月廿六日

(享) 爲久(花押)  
【照久初ノ名カ】

廣濟寺衣鉢侍者禪師中

1161

『入來家臣東郷善兵衛藏』

永【永 享】いきやう六ねん【永 享】きのへ 八月日、さしきしうのとのとところにおきて、す【炭 浦 殿】みうらとのへなかしまのはたけの御さた、とうかうちのおとなと申さたむるところなり、よ(東 郷)てあんもんをそゑおく、仍爲後に日記如件、

八月廿七日

宗裔(花押)

1162

『廣濟寺文書』



「上方本」  
「輪津長門守殿御件判」

奉記進

薩摩國給黎院下長吉之内鈴源兵衛か塩屋公料一貫三百文、早任

先例、可有御知行候、仍記進狀如件、

永享六年九月廿日

沙弥天用判

伊集院光濟寺

1163

『公証』

薩摩國日置之靈徳寺者、奉願興仙之建立也、最初南中和

尚を開山祖と定処、尔來廣濟寺之末寺たる事百余年、雖

然、寛忠自興仙退出候上者、属缺処旨、重任先例、桃隠四代

西堂讓与申候也、於熙久子と孫と無相違可有勤行候、於

寺家檢断并雜務等事免除申候処也、仍寄進狀如件、

永享六年甲寅十月五日

伊集院  
熙久(花押)

1164

『公証』

圓福寺寺領田島等之事、任無等并道應寄進狀、重寄進申

處也、於于熙久子と孫と無相違可有御知行候、仍後證一

筆如件、

永享六年甲寅十月廿九日

伊集院  
熙久(花押)

「伊集院熙久譜中ニ皆在リ」

1165

『福昌寺文書』

下大隅市木内八郎次郎塩屋一年貢三貫文定、爲先父道亨

奉寄進福昌禪寺夏実也、於此塩屋万雜公事、到于子孫不

可有相違候、仍寄進狀如件、

永享六年甲寅十月廿九日

平石井平次郎忠義(花押)

「本ノマ、」  
「打死日永享四年二月七日」

「忠國公御譜中ニ在リ」

1166

「圓通庵文書」 「伊集院熙久譜中ニ在リ」

又右道道應寄進在所共、熙久爲重代相傳所領候之間、懸

判お相副奉寄進處也、於此在所違乱候する仁へ、熙久不

可爲子孫候、仍無相違可有知行狀如件、

永享六年十二月十五日

伊集院  
熙久(花押)

伊城山

圓通庵  
寄進狀

1167

永享七年乙卯

1168

「國史 大岳公」  
 七年乙卯夏六月九日、公使伊地知縫入道領下大隅伊地知方、曰、有闕所輒復與之、  
據大岳公舊譜、上卷應永十九年有伊地知縫殿介季豊、縫入道豈季豊歟、津流系圖、田代甚右衛門系圖、田代久助子、曰肥前守清定、此云肥前守、當是清定、  
 好久使田代肥前守領大隅田代村・佐多川口三粟如故、  
津島  
 盟書、以安房君爲託、  
據島津支流系圖、 安房君者、公之長子也、

據島津系圖 二十三日、好久使山田忠尚領小河院恒吉六町・花田平房五町、同上、垂水家臣伊集院吉左衛門家藏文書、小河院謂上小平房、曾小河等地、郡村高辻帳、上小河村・上井村、曾小河村屬東國分郷、廻村屬福山郷、佳例川村屬加治木郷、平房村屬百引郷、佳例川即加禮河、秋八月二十三日、公使禰寢出羽守直清入道領大隅州佐多十町地、直清、清平之弟也、  
據大岳公舊譜、冬十月十四日、公與重經 本田忠勝末弘因盛財部久安伊地知助家永野殖家高木好資柏原孝久樺山元政總知久北郷親平木殿忠臣新納久町田彌阿殿正直和田盟書曰、寡人出言不敢自是、宜聽輿議從其善者、有渝斯言、諸神殛之、重經等亦上盟書曰、同心同德敬服君事、盡忠竭誠、毋所隱、有

1169

「薩州家用久譜中初好久」  
〔遊谷加兵衛重增藏〕  
 渝斯言、諸神殛之、  
據島津支流系圖、樺山氏譜、 十二月五日、公使禰寢直清領鹿屋院恒見八町地・揖宿院奈良弓切八町地、  
據大岳公舊譜、小松氏系圖、揖宿郷西方村有奈良門、

嶋津御庄薩摩方郡之内、白波市井中嶋之事、爲祈所所宛行也、早任先例、不可有相違領知狀如件、  
〔用久〕 好久〔花押〕  
 永亨七年五月廿四日

1170

「樺山氏四代孝久譜中」  
〔案文在樺山源三郎久清〕  
 立申起請文之事  
 一世上如何様雖轉變候、無二心御用可罷立事、  
 一安房若御之御事、殊以大切存御用可罷立事、  
 一自然讒者出來候時者、則子細お被仰下可申上事、  
 若此条々偽申候者、  
 日本國中大小神祇、別者伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神可罷蒙御討候、

永亨七年六月六日

末弘殿

孝久

1171 「薩州家元相用久譜中」

「正文在田代縫殿清長」

嶋津御庄大隅方田代村一圓并佐多内川口三栗事、依爲本

領所宛行也、早任先例、不可有相違領知狀如件、

永亨七年六月九日

好久(花押)

田代肥前守殿

1172 「秩父氏藏書」

大隅國下大隅伊地知方事、爲由緒所宛行也、其外者闕所

次第領掌不可有相違也、

永亨七年六月九日

貴久(花押)

伊地知縫入道殿

「忠國公御譜中、在伊地知縫殿重治トアリ」

1173 「正文在樺山源三郎久清」

契約

一天下雖轉變、可成一味同心思事、

一安房間之事、可存憑入事、

一和讒凶害之時、直承可申披事、

此条々偽申候者、

日本國中大小神祇、別而伊勢天照大神宮 諏訪上下大

明神 熊野三所大權現 天滿大自在天神 正八幡三所

大菩薩可蒙御爵候、

永亨七年六月十二日

陸奥守貴久(花押)

栴山殿

「此御書、栴山氏四代孝久譜中ニ在リ」

1174 「山田忠尚譜中」

嶋津御庄大隅方小河院之内恒吉之村六町并花田平坊五町

爲祈所所充行也、早任先例、不可有領知相違之狀如件、

永亨七年六月廿三日

好久(花押)

山田殿

1175 「大崎主人伊十院某藏」

1178

〔樺山氏四代美濃守孝久譜中〕

1177 一永享七十月十四日之文を以大覺寺を可誅旨被相觸人數  
〔信濃守〕 本田重經 〔備前守〕 末弘忠勝 〔左馬助因盛〕 伊地知久安  
〔左京亮〕 永野助家 〔孫三郎力〕 財部因成 〔縫殿允〕 伊地知久安  
〔左馬助〕 廻 元政 〔高木殖家〕 柏原好資 〔美濃守〕 桃山孝久  
〔中務少輔〕 北郷知久 〔能登守力〕 加治木親平 〔近江守〕 新納忠臣  
〔左馬助教弘力〕 町田一久 〔遠江守〕 和田正直 〔出羽守入道聖榮〕 山田忠尚  
〔左馬助教弘力〕 税所弥阿

1176

〔忠國公御譜中〕

〔正文在彌寝右近重水〕

大隅國佐多十町之事、早任先例、可爲領知狀如件、  
〔孝〕 永享七年八月廿三日

衾寢出羽入道殿

〔忠國〕 陸奥守(花押)

嶋津御庄薩摩方河邊之郡事、長門入道方知行并五嶋七嶋  
 坊泊津除、爲斷所闕所次第所宛行也者、不可有領掌相違  
〔新力〕  
 之狀如件、  
〔孝〕 永享七年六月卅日  
〔額久三男三郎左衛門羅久幼名也〕 伊集院大子丸殿  
〔薩摩守用久初名〕 好久(花押)

1179

〔樺山氏四代孝久譜中〕

仍起請文如件、  
〔孝〕 永享七年十月十四日

伊勢天照大神宮 霧嶋六所大權現 正八幡三所大菩薩  
 諏方上下大明神 天滿大自在天神御爵お各々之身中ニ可  
 罷蒙候、

一 一味同心可罷立御用事、  
 一 意見御尋之時不殘心底可申上事、  
 右此条々偽申候ハ、  
 日本國中大小神祇冥道

〔寫在樺山源三郎久清〕  
 請文

本田殿 重經 末弘殿 忠勝  
 財部殿 因盛 いちし殿 久安  
 永野殿 助家 高木殿 殖家  
 柏原殿 好資 桃山殿 孝久  
 廻殿 元政 北郷殿 知久  
 かちき殿 親平 新納殿 忠臣  
 町田殿 一久 税所殿 弥阿  
 和田殿 正直

〔寫禪山源三郎久清〕

證狀

一國立栖談合之時、無蟲眞不殘心底可承由候上者、愚存(柄方)も可專順旨事、

一愚意お申出、集義お承、可任多分之儀申事、(衆力)

一如此申談候上者、申候する儀お何度も可以料申事、(御斯カ)

此條爲申候者、

正八幡大菩薩 天滿大自在天神御爵可蒙候、

永享七年十月十二日(享)

貴久御判(忠國)

面々御中

1180 〔忠國公御譜中〕

〔正文在彌寝右近重永〕

大隅國鹿屋院之内恒見八町分之事、爲料所々宛行也、早任先例、可有知行之狀如件、

永享七年十二月五日

陸奥守(花押)(忠國)

弥寝出羽入道殿(直博)

1181 〔全上〕

〔全上〕

薩摩國指宿院之内奈良弓切八町分之事、爲料所々宛行也、早任先例、可有知行之狀如件、

永享七年十二月五日

陸奥守(花押)(忠國)

弥寝出羽入道殿(直博)

1182 〔忠國公御譜中〕

〔正文在北郷氏内都城梅北土佐入道〕

大隅之國於串良五町、爲料所可宛行所也、任先例、可領知狀如件、

永享七年乙卯十二月十五日(享)

奥陸守(花押)(本マ、忠國)

梅北橋野殿

1183 〔庄内神柱大明神大官司梅北正兵衛藏〕

〔本文書ハ一一八二号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1184 〔國史 大岳公〕

八年丙辰春正月十八日、公以串良院岩弘名爲大慈寺領、

據大岳公舊譜、公以岩弘名九町為大慈寺領、曰見上卷應永三十二年、至是復以岩弘名為大慈寺領、豈以其全地給之者乎、夏五月二十日、公使山田忠尚領下大隅二河村、據島津支流系圖、郡村高辻帳、牛根郷有

二川閏月二十日、公以栗野院九町地・帖佐郷餅田十町地為正八幡宮領、據大岳公舊譜、秋八月三日、公使禰寢直清領

始良莊牧山名二十町地、據大岳公舊譜、使禰寢右馬助後改稱山城守、

重清領始良莊末次名五町地、重清、元清之弟也、同上、禰寢元清見上卷

應永二十一年、使樺山美濃守次郎三郎改稱美濃守孝久領日向白杵院上相左馬助舊領

宮崎郡戶次丹後守舊領大隅始良西俣地頭代官職、又許以日向舊領島津莊牧方地、曰、俟有關所、然後授之、據島津支流系圖、

九年丁巳春二月二十八日、公使禰寢氏悉領舊邑在谷山・揖宿者、據大岳公舊譜、夏五月二十八日、使阿多龜徳領河邊郡今田八町、據島津支流系圖、秋八月一日、使禰寢重清領下大隅

1185 「正文在大慈寺」

奉寄進

日向州龍興山大慈禪寺嶋津庄大隅方串良院岩弘名右、為佛法紹隆、天下安全、家門繁昌、兆民快樂、奉寄進之狀如件、

永享八年正月十八日

陸奥守(花押)

「忠國公御譜中ニ在リ」

1186 「伊集院圓通庵文書」

薩摩國伊集院石谷之内たかひ一町二反并屋敷一所、限永代奉寄進圓通菴候處也、早任先例、可有知行之狀如件、

永享八年卯月十六日  
圓通菴寄進狀  
照久(花押)

1187 「山田忠尚譜中」

嶋津御庄大隅方下大隅郡之内二河村之事、為給分充行處也、早任先例、領掌不可有相違之狀如件、

永享八年五月廿日  
山田殿  
陸奥守(花押)

1188 永享八年丙辰

五月二十五日、西郷出雲守宗貞帖佐の春毛にて戰、西郷助死、年六十一歳

三郎宗伴宗貞三男にて同し、戰死、二十三歳

間歳、上井四郎光秋大岳公の家弟持久と鹿上井美作守満中、兒嶋に戰給ふ時死之

溝邊にて戰死とあり、此に置て考を俟つ、

「忠國公御譜中」

「正文在澤永賢」

嶋津御庄大隅方栗野院内

正宮御神領之事、四季之

大般若田四町南郷二町  
北郷二町有

同仁王經田二町四段南郷町二反有  
北郷町二反有

佛聖田六段南郷三反有  
北郷三反有

以上七町之事不可有相違所也、

永享八年壬五月廿日

澤殿

陸奥守貴久(忠國)(花押)

「忠國公御譜中」

「正文在澤永賢」

嶋津御庄大隅方栗野院内

正宮御神領之事、八月彼岸初日五段、同二日五段、十一月

正御祭田壹町、以上二町之事、不可有相違所也、

永享八年壬五月廿日

陸奥守貴久(忠國)(花押)

岩下  
龍圓坊

「全」

「全」

奉寄進

正八幡宮御寶前

大隅國帖佐郷餅田之内十町

右、意趣者、天長地久、殊者國土安穩、武運長久、子孫

繁昌故也、然早可有彼地知行、仍限永代、奉寄進所如件、

永享八年潤五月廿日

澤殿

陸奥守(忠國)(花押)

「正文在樺山氏」

於如御意趣我等も、今度奥州御用ニ罷立候上者、後々ま

ても以前之御契約、又者此刻之忠節御忘候者、衆中ニ訴

可申候、若於私に御大綱之時者、無二心可罷立御用候、

此条々偽申候者、

伊勢天照大神 熊野三所權現 八幡大菩薩 諏訪之上下

大明神 天滿大自在天神御爵各々可罷蒙候、

永享八年六月廿二日 熙久(伊集院)(花押)

樺山殿(孝久)

1195

「正文在樺山源三郎久清」

日向國臼杵院上楯左馬助跡、同國宮崎郡之内戸次丹後守跡、大隅國始良西俣地頭代官職事、任御下文之旨、可被

領知之狀如件、

永亨八年八月三日

〔忠國〕  
陸奥守(花押)

〔孝久〕  
樺山美濃守殿

1196

「全上」

日向國嶋津庄同所牧方之先知行分之事、所相計也、早任先例、闕所次第可領知之狀如件、

永亨八年八月三日

〔忠國〕  
陸奥守(花押)

〔孝久〕  
樺山美濃守殿

「此二通、樺山氏四代孝久譜中ニ在リ」

1197

『正文種子嶋氏家藏』

契約

一天下向如何様雖爲轉變、無二可憑存事、

一万一御大綱之時者、用立可申事、

1193

「忠國公御譜中」

「正文在禰寢右近重永」

嶋津庄大隅方始良庄之内牧山名二十町事、爲祈所々宛行也、早任先例、可被領知之狀如件、

永亨八年八月三日

〔忠國〕  
陸奥守(花押)

〔直清〕  
禰寢出羽守殿

1194

「全上」

「全上」

嶋津庄大隅方始良庄之内末次名五町分事、爲祈所所宛行也、早任先例、可被領知之狀如件、

永亨八年八月三日

〔忠國〕  
陸奥守(花押)

〔重清〕  
禰寢右馬助殿



一如此申定候上者、自然讒者出來、和讒凶害雖申候、無

信用直可申披事、

若此条々偽候者、

伊勢天照大神宮 熊野三所權現 正八幡三所大菩薩

諏訪上下大明神 天滿大自在天神御爵可蒙候、

永享八年八月七日

(用久)  
好久(花押)

種子嶋殿 〔左近將監轉時〕

1198 『正文在種子嶋家』

薩摩國川邊郡内七嶋伊集院知行分嶋二、爲祈所々宛行也、

早任先例、可令領知之狀如件、

永享八年八月十日

(用久)  
好久(花押)

種子嶋殿 〔轉時〕

1199 『全』

嶋津御庄薩摩方河邊郡鹿兒半分廿町代地事、闕所之時、

最前爲祈所可相計處也、早任先例、不可有領知相違之狀

如件、

永享八年八月十日

(用久)  
好久(花押)

種子嶋殿 〔轉時〕

1200 「正文在樺山氏」

契約

右、意趣者、

一自然御大綱時者、身之大綱と存、御用ニ可罷立候、乍

恐身大綱時者平ニ可預御助事、

一縱雖爲天下轉變、一篇ニ御用ニ可立事、

一和讒凶害輩出來者、急々ニ可申披事、

若此条偽申候者、

伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡大菩薩 天

滿大自在天神 諏訪上下大明神御爵可蒙罷候、

永享八年八月十日

(季久)  
沙弥玄清(花押)

樺山殿 〔季久〕

1201 「正文在樺山氏」

契約

一如仰自然御大綱之時者、身之大綱と存、可罷立御用候、

身之大綱之時者、平ニ可預御助事、

一縱天下雖爲轉變、一篇仁可罷立御用事、

一和讒凶害輩出來者、急々仁可申披事、

若此条偽申候者、

神名

永享八年八月十三日

祢寢殿

美濃守孝久

『入來院氏文書』「忠國公御譜中ニ在リ」

嶋津御庄薩摩方羽島六町、任先例、可致領知狀如件、

永享八年九月十二日

陸奥守(花押)

入來院殿

〔包紙〕  
「忠國ヨリ預候羽嶋之判形也」  
「裏ノツマニ」  
「羽島之」筆奥州より判形也

1203

加冠

嶋津次郎三郎

藤原滿久

永享八年十二月十三日

陸奥守貴久(花押)

「此書、樺山氏五代滿久譜中ニ在リ、正文在樺山源三郎久清トアリ」

1204

『入來院氏文書』

〔押紙〕  
「拾壹ノ内寺尾四郎左衛門〇」

幼少之時親父諸重討死候ニよつて、諸重之所領等之讓狀もなく候と承候、又妙勝(重名)以來之手續の狀をもうしなわれ候よし承候、但此段存知之事候之間、彼文書共へいつ方ニ候共、所領等之事ハ、四郎重位知行あるへく候、他の妨あるへからず候、田島同屋しき等之坪付別紙ニあり、仍爲後證狀如件、

永享九年丁二月廿八日

重頼(花押)

重長(花押)

向四郎殿

〔狭谷重位〕

1205

「正本種子島氏家藏」

就今度之弓箭被勳懇志候、喜悅之至候、然者於三ヶ國中、自然之地百町、爲忠節之賞可宛行候也者、證狀如件、

永正八年十二月廿九日

種子嶋武藏守殿

〔忠時〕  
〔本文書編年ヲ誤レリ、一八三三号文書ト重複ス〕

1206 「忠國公御譜中」

「正文在禰寢右近重永」

永享九年八月一日

嶋津御庄薩摩方谷山内先知行并指宿之内先知行分、任先

禰寢殿(重清)

(忠國)陸奥守(花押)

例、宛行所也、早可領知狀如件、

永享九年二月廿八日

(忠國)陸奥守(花押)

禰寢殿

1207 「阿多飛彈守忠清譜中」

「正文在志布志土阿多飛彈忠縣」

嶋津御庄薩摩方河邊郡内今田八町事、爲祈所所宛行也、

早任先例、可領掌之狀如件、

永享九年五月廿八日

(忠國)陸奥守(花押)

阿多龜徳殿(忠清)

1208 「忠國公御譜中」

「正文在禰寢右近重永」

下大隅内木志々名事

右、爲祈所宛行所也、仍不可有領掌相違之狀如件、

「大崎士人伊集院某藏」

(継久)  
犬子丸

永享十年二月廿八日

(伊集院頼久)  
道應(花押)

薩摩國給黎院一圓依志有、代々本領たるあひた、犬子ニ  
ゆつりわたし候事貞也、於此所領他之さまたけなく可有  
知行候、如此ゆつりわたし候上者、於子と孫といらんハ  
つらい申ものあるましく候、仍爲後日ゆつり狀如件、

1209 「大崎士伊十院氏藏文書」

前 編 舊 記 雜 錄 卷 卅 七	忠 國 公
	自 永享十年 至 文安元年

(表紙)

1211

「大口高城氏藏」

「引カヘシニ」  
「松五郎ゆつり」

犬子丸

「頼久三男継久ノ幼名也、後三郎左衛門尉ト云」  
(伊集院頼久)  
道應(花押)

永享十年二月廿八日

薩摩國河邊郡一圓依志有、犬子丸ニゆつりわたし候事貞  
也、於此所領他之さまたけなく可有知行候、如此ゆつり  
わたし候うへハ、於子と孫といらんハつらひ申者あるま  
しく候、仍爲後日之狀如件、

ゆつりあたふ 松五郎所

薩摩國たきのこほり 温田 水方 三郎丸 國分万徳

新開壹町草道名内在 馬場屋敷<sub>宇</sub> 同國東郷之鋒淵村内六

田五反 糸しの前三反 同しやうの屋しき<sub>宇</sub> 相模國おち

合の郷内野邊入道か屋しき<sub>宇</sub>

右所領ハ、重政ちうたいさうてんのところ也、しかるニ

ゑいたいをかきて、ゆつりあたふ所也、そうりやうのめ

いをそむかすして、御くうしハせんれいにまかすへし、

若松五郎子なくハ、きやうたいの中にゆつるへし、この

うちぎやうたいともにおもひあて、めんくのゆつり

狀にまかせて、その沙汰をいたすへし、よて讓狀如件、

永享十年三月十四日

河内守

重政(花押)

1212

鹿兒嶋諏訪大明神祭禮法様之事

陸奥守貴久御代ニ頭殿居頭と云事始也、此根本ハ日本國の祭心也、頭殿ハ勅使、居頭者上使也、七月一月之間、頭殿之儀式者、勅使會釈之儀也、号頭殿事ハ、公卿藏人勅使之心也、号居頭ハ上使なれハ、諸衆之上ニ居心也、頭屋之寄頭也、しかれハ祭之日、天下之爲御祈禱、頭殿御幣、次爲國之祈念、居頭御幣、次ニ三ヶ國爲祈念、貴久御幣、如是心也、末代迄此旨を存知、嶋津家を扱者能く可致奔走者也、爲子孫書付置者也、

永享十年戊午五月七日

本田信濃守

氏親判

「右書付、先年今井松岡寫置候由、被差出御記録所へ寫有之候處、元祿九年子四月廿三日之夜、御記録所焼失之節、右寫正文焼失候、右之正文ハ何方へ可有之哉、不相知也」

1213

福昌寺佛殿造營之勸進

奉加 馬壹疋

沙弥存忠(花押)

代錢三十貫文、此外五拾貫者、棟木牌爲也、拜

錢也、

奉加 馬壹疋

藤原貴久(花押)

代錢五貫文

奉加 馬壹疋

近江守忠臣(花押)

代錢五貫文

奉加 馬壹疋

安藝守教宗(花押)

代錢三貫文

奉加 馬壹疋

大隅守重久(花押)

代四貫文

奉加 馬壹疋

興長兼清(花押)

米三石三百疋

奉加 馬壹疋

藤原重恒(花押)

代五貫文

奉加 馬壹疋

沙弥禪祖(花押)

代錢三貫文

奉加 馬壹疋

安藝守武味(花押)

代貳百疋

奉加 馬壹疋

遠江守久主(花押)

代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
澁谷 彈正少弼重長(花押)  
奉加 馬壹疋  
佐多 伯耆守久親(花押)

奉加 馬壹疋  
代貳貫  
北郷 中務少輔知久(花押)  
奉加 馬壹疋  
和泉 沙弥光朝(花押)

奉加 馬壹疋  
代錢貳貫文  
北原 周防守久兼(花押)  
奉加 馬壹疋  
井口 左近將監仲保

奉加 馬壹疋  
代錢三貫文  
曾木之分 藤原久直(花押)  
奉加 馬壹疋  
杉 參河守保則

奉加 馬壹疋  
代貳貫  
菱刈之分 藤原明熊丸  
奉加 馬壹疋  
知色 下野守守保

奉加 馬壹疋  
代三貫  
廻 源 元正(花押)  
奉加 馬壹疋  
上村 圖書助貫保

奉加 馬壹疋  
代三貫  
池袋 建部親宗  
奉加 馬壹疋  
平山 越後守武豊

奉加 馬壹疋  
代貳貫  
比志島 源 義清  
奉加 馬壹疋  
高城(高城) 津攝守武宗

奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文  
蒲生 美濃守忠清  
奉加 馬壹疋  
餅田 紀 武井

奉加 馬壹疋  
米三石  
稅所 左馬助敦弘  
奉加 馬壹疋  
財部 左馬助國盛

代錢貳貫文

代貳百疋

奉加 馬壹疋

平世  
信濃守武子

奉加 馬壹疋

羽月  
豐後守元忠

代錢六百文

奉加 馬壹疋

飯  
美作守義武

奉加 馬壹疋

菱刈  
藤原久家

代三貫

奉加 馬壹疋

限本  
酒井久宗

奉加 馬壹疋

山野  
因幡守頼元

代百疋

奉加 馬壹疋

築瀬  
酒井元爲

奉加 馬壹疋

梅北  
豊前守兼永(花押)

代百疋

奉加 馬壹疋

加治木  
沙弥覺統

奉加 馬壹疋

長野  
信濃守幸定

代錢貳貫文

奉加 馬壹疋

祢寢  
沙弥立清

奉加 馬壹疋

酒井親久

代錢貳貫文

奉加 馬壹疋

祢寢  
建部毗沙房丸

奉加 馬壹疋

別府  
平五郎丸

代錢三貫文

奉加 馬壹疋

大寺  
美作守元幸(花押)

奉加 馬壹疋

阿久根  
播磨守良忠

代錢壹貫文

奉加 馬壹疋

伊地知  
沙弥久阿(花押)

奉加 馬壹疋

平田  
右馬助重宗(花押)

代錢壹貫文

奉加 馬壹疋

牛尿  
越後守久元(花押)

奉加 馬壹疋

佐田  
左近太夫忠元(花押)

代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
柏原 豐前守好資  
奉加 馬壹疋  
長野 左京亮助家

代錢壹貫文  
藤原 忠豐山田  
奉加 馬壹疋  
大豆壹石

奉加 馬壹疋  
藤原 忠豐山田  
奉加 馬壹疋  
福永 新藏人爲勝

代貳貫  
藤原 武久  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
澁谷 左衛門尉重持  
奉加 馬壹疋  
得丸 平 久良

大豆拾石  
澁谷 左衛門尉重持  
奉加 馬壹疋  
米五石

奉加 馬壹疋  
湯田 杉板五百枚  
奉加 馬壹疋  
小田 酒井久秀

代壹貫  
湯田 杉板五百枚  
奉加 馬壹疋  
石井 平 元義(花押)

奉加 馬壹疋  
宮里 紀 忠正  
奉加 馬壹疋  
西村 興長遺清

代錢壹貫文  
石塚 平 種惟(花押)  
奉加 馬壹疋  
北原 藤原久能(花押)

奉加 馬壹疋  
伊集院 沙弥道應(花押)  
奉加 馬壹疋  
肥後 藤原豐盛

代壹貫  
伊集院 沙弥道應(花押)  
奉加 馬壹疋  
田代 建部助信(花押)

奉加 馬壹疋  
肝付 河内守兼元(花押)  
奉加 馬壹疋  
代五百分

代錢五貫文米五石  
肝付 河内守兼元(花押)  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
長野 中原助豐  
奉加 馬壹疋  
小山田 大藏元平

代錢五貫文  
長野 中原助豐  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
代錢貳貫文  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

代錢貳貫文  
代錢貳貫文  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

奉加 馬壹疋  
代錢貳貫文  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文

代錢貳貫文  
代錢貳貫文  
奉加 馬壹疋  
代錢壹貫文



奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

志々日  
藤原義豊

奉加 馬壹疋

五百文

野邊  
美作守盛孝

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

大始良  
藤原貴義

奉加 馬壹疋

壹貫

長井  
周防守利久

奉加 馬壹疋

壹貫文

濱田  
藤原義藤

奉加 馬壹疋

百疋

野邊  
小野盛良

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

河田  
紹顯(花押)

奉加 馬壹疋

百疋

野邊  
小野盛豊

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

佐多  
淨了

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

忠正

奉加 馬壹疋

百疋

和田  
遠江守正右(花押)

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

胤雄

奉加 馬壹疋

百疋

野邊  
薩摩守盛在

奉加 馬壹疋

代錢壹貫文

宗友

奉加 馬壹疋

貳貫文

和田  
淡路守年則(花押)

奉加 馬壹疋

代米壹石

妙久  
福崎尼

奉加 馬壹疋

壹貫文

野邊  
小野盛治

永亨(享)拾年之秋

奉加 米拾石

徳林庵  
祖仲

奉加 馬壹疋

五百文

野邊  
尾張守盛光

奉加 米四石

淨惠寺妙惠

1214

〔國史 大岳公〕

十年戊午、事缺不書、

十一年己未春二月十八日、持久好久更  
名持久、以鹿兒島郡坂本山

下水田三段爲慧燈院領、用資壽山久公大姉冥福、曰、後

世有違此者、非吾之子孫也、據島津支流  
系圖用久譜、壽山久公大姉、

公及持久之母也、據島津系圖、  
廟堂要覽、夏六月、持久以鹿兒島郡上

伊敷流田三段爲諏方大明神社領、據島津支流  
系圖用久譜

1215  
『正文在福昌寺』

奉寄進

薩摩國鹿兒嶋郡坂本之内山下水田三段者

右、彼所領者、爲壽山久公大師（施）菩提料、奉寄進惠燈院所

也、若於此所有違亂輩者、不可爲持久子孫者也、仍爲後

代寄進之狀如件、

永亨（享）十一年二月十八日  
〔守護代薩州〕  
持久（花押）

1216  
『全』

『押札当寺三代仲翁和尚証判』

守護代薩州持久加判』

（花押）

福昌寺慧院各々田島寄進狀  
（證脱力）

一薩摩國鹿兒嶋郡花棚村之内琵琶田三段、本田安了寄進狀、有義天御判、

一薩摩國鹿兒島郡西田村之内水田五段、益山傑受寄進狀、爲二親也、有義天御判、

一薩摩國鹿兒嶋郡西田之村内水田二段、住吉大明神、義天御寄進之狀、

一（道）向島西堂之村平田重宗爲支親禪門寄進狀、有義天御判、

一谷山福本之内住吉之内水田五段、祢寢山本殿寄進狀、爲圓清禪門於河邊打死之時、

一谷山中村之内水田一町、平田重宗寄進、此内五段者  
為慈母、有義天御判、

一鹿兒島郡岳之村内水田一町、蒲生美濃守寄進狀、有貴久御判、

一向嶋野尻村貴久御寄進、爲義天每日靈供、

一向嶋赤水之内園一ヶ所、高崎太傳禪門寄進、有義天御判、

右、彼寄進狀者、慧燈院殿義天大禪定門各々有御判、依寺家回祿彼重書失却、仍爲停止萬雜公事諸役等、本寺大檀那持久御判重而取置者也、若後代於彼寺領有違亂時者、以彼狀可有沙汰者也、

永享十一年二月十八日

(朱印)

前惣持中翁老納誌之

〔花押〕

1217 『安養院文書』

奉寄進 諏訪大明神

鹿兒嶋郡上伊敷流田之内門田三段

此内一段嶺大樂寺稻荷

同二段諏方田二氣之彼岸

御祈禱大般若經於于御拜殿、可有轉讀狀如件、

永享十一年六月吉日

諏方座主律師慶任房

〔此文書、薩州家用久之譜中ニ在リ〕

1218

〔阿多郷上宮熊野權現社ニアリ〕

一御鏡 豎横九寸方鍬銘 一面

但本尊弥陀花立獅子口

右裏板ニ

大願主七郎介藤原經久

永享十一年己未九月吉日

1219 「正文在楞嚴寺」

〔ウラ〕  
「はた井田四反」

依要用候、本物返しのしちけんに入おき申候はた井田の内ミナミにつけて四段の事、

合代錢參貫文定

右、件の田ハ、大津の平五重代相傳の田なり、しかるといへとも、ようく候によて、ほんもつ三くわんもんにさためて、肥後弥三郎殿の御方へしちけんにおき申候ところ実也、若かの地にいらんわつらい候はん時ハ、もとのようとう三くはんもんを返し申へく候、まんさうくうしりんしくわやくのなし物ハ、一かうほんみやうにとめ申候、但毎年のほんく米一たんに五もんつゝ御さた候へし、仍爲後日本物返ししちけんの狀如件、

永享十一己未年十月廿一日 平五俊秀(花押)

俊与(花押)

1220

〔樺山氏四代孝久譜中〕

〔寫在樺山源三郎久清〕

日向國人野邊在所ニ大覺寺居住之由被聞食候、不日上進之候者、忠節不可過之候、於恩賞者、可隨望之由、野邊

堅可申付候也、

〔朱力世〕  
〔永享十二年款〕六月廿日

1221  
〔全上〕

〔義昭〕  
大覺寺在所注進并彼狀取進之、神妙被思食候、不日致計略可上進之、万一其儀不可叶候者、可討進之、雖爲何篇忠節不可過之候、委細彼使被仰合候也、

〔朱力世〕  
〔永享十二年款〕六月廿日

1222  
〔全上〕

大覺寺事、分國中居住之由、以前注進之時委細被仰訖、然者不日可致沙汰之處、於于今延引如何様子細哉、定雖不可有疎略之儀、不廻時日令落居者、万代忠節不可過之、併被憑思食候、巨細猶大内修理大夫可申候也、

〔宛力キ何モナシ〕

1223  
『上原氏文書』

契約

一於天下向者、如何躰之雖轉變候、申談可致忠節事、  
一自今以後、弥無二申談、御大事お身之大綱と存、見繼

可申事、

一如此申談候上者、不慮之有讒者、和讒凶害雖出來候、即時以面申承可散事、

若此條々偽申候者、

伊勢天照大神 熊野三所大權現 八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神御討お可罷蒙候、

永享十二年十一月廿五日

〔島津權摩守用久中頃ノ名也 奉  
恩國公命爲守護代故爲此盟ナラン〕  
持久(花押)

1224  
『福昌寺文書』

玉龍山福昌寺定法之事、元久草創以來既誓狀等有之上者、可守先例之外無他事、然處到忠隆代而、國家怨敵之族、一旦憑寺家而罷出之刻、慮外之狼籍出來、無是非次第也、但非自身之發起、雖然手之者所行之企所歸一身欵、迷惑不過之、於茲重而書進一筆者也、然者到福昌寺末寺末庵、縱雖大犯三ヶ條之者、走入不可及刃傷之儀、況於于本寺之領等哉、已如此悔先非以申出之所、若背此旨輩者、不可爲忠隆子孫之至孝者也、仍爲後日之狀如件、

永正十二年拾一月廿七日

忠隆(花押)

進上 福昌寺

侍衣禪師

(本文書編年ヲ誤レリ、一八六四号文書ト重複ス)

惶敬白、

二月十日

河内守久逸(花押)

1225

「伊作家八代久逸譜中」

久逸

初久俊 字龜房丸 又五郎 式部大輔 河内守

永享十二年庚申誕生、母新納近江守忠臣女也、

犬安丸早世、而伊作家將断絶、于時臣等請使龜房丸繼

家統於 太守忠國公、公不許、於茲乎戲遊之際、家

臣等潛懷取我、去伊作、令犬安妹妻我連續當家、實忠

國公三男也、

進上 一乘院 御同宿中

「上包」

河内守久逸

「上包裏有之」  
嶋津

1227

「全譜中」

元祖久長以降領知伊作莊、居住當莊者尚矣、當乎 立久

公太守時、賜乎日州櫛間院、以移居當院也、

1228

「國史 大岳公」

十二年庚申、事缺不書、

嘉吉元年辛酉、是年二月改元嘉吉、正月是永享十三年、春二月十七日改元、續據

本朝 初幕府弟大學寺門跡義昭僧正尊有或作謀作亂、陰

募大和河内及筑紫兵衆、誘菊池・大村等、同 遣北鄉氏

家臣鬼塚備中守書曰、速應召募、據都城家臣鬼塚常心家藏文書、此書尾書永享十一年六月二十五日、下書押字、鬼塚或作鬼

東、東塚和讀皆曰津加、故當時通用、 遣樺山孝久書曰、義教放

恣政道不正、四海擾亂、職此之由、滅國覆宗、將不可救、

今欲拯民生全家門、已諭諸國召募兵士、至者日衆、願君

1226

「伊作久逸譜中」

「正文在坊津一乘院」

二春之御大慶勝例年重疊、雖申事舊候、尚以不可有窮限

候、珍重々幸甚々、抑先日御祈念之事申上候、忝被懸御

意候、千秋万歳目出畏入存候、殊ニ御祈念之内ニ自屋形

様國名拜領満足此事候、隨而寶生院爲御使僧御光臨、御

卷敷所持、忝畏入存候、其時分我等鹿兒嶋ニて不致參會

候、心外存候、如何様以參上御礼等可申上候、万吉、恐

應此義舉，若有軍功，當加賞賜，據島津支流系圖樺山氏譜，原

據上文遺魂塚備中守書，疑亦永享十一年，月日下，據續本，書皮書云，尊有

色求之，朝通鑑，尊有奔鎮西，匿日州櫛間院，別垂讚岐房

有善從，幕府命，公誅之，公與樺山孝久，新納近江守

忠續，肝付三郎，後改河，兼忠，本田信濃守重恒，北鄉讚岐

守持久謀，遣山田忠尚及鹿屋某，牧某，恒吉某殺之，三

月十三日，尊有自殺於櫛間永福寺，忠尚斬其首，別垂有

善在外，聞變而還，則尊有已死，乃念呪數遍，自以獨鉗

擊額而死，據大岳公舊譜，島津支流系圖北鄉氏，樺山氏，山田氏譜，

新納市正系圖，黃套舊記，山田氏譜，黃套舊記皆云，公

以尊有將軍之貴子弟也，不使士卒加刃於其身，特命忠尚斬之，續本朝通

鑑曰，義昭僧正匿於薩摩民家，見農具，而不知之，問其名，農夫怪之，因

察其貌似物色，乃劫之，探其懷中，得菊池氏贈答書及和歌一首，連歌

一首，皆曰是也，明日率衆圍其舍，殺義昭及坊官大和法眼，傳首京師，

此與大岳公舊譜，島津支流系圖等異，而所謂大和，忠續，忠臣之孫，

法眼者，疑是別垂讚岐房，抑亦別有一人乎，俟考，兼忠，兼元之子，重恒，忠親之弟，持久，知久之子也，津支

流系圖，肝付甚兵衛系圖，本新家總譜，島津支流系圖北鄉氏譜，公與新

納近江守忠續等謀謀尊有，而本家總譜，亦載其事，然考世

系，近江守忠續父曰修理亮，治，治父曰近江守忠臣，實德元年二月忠

臣卒，治嗣，實德二年三月治卒，忠續嗣，是歲嘉吉元年在實德元年

之前，忠臣尚在，忠續不容與其大父，同時並稱近江守，而黃套舊記，作

新納江州，蓋謂近江守忠臣，其大父，同時並稱近江守，而黃套舊記，作

然，今按令幸董驗首，則有，十三日教書，賞誅尊有功，賜

之矣，云五月二日首至者謬，公腹卷，太刀，馬，樺山孝久，肝付兼忠，新納忠續，北

鄉持久，本田重恒皆賜太刀，據大岳公舊譜，島津支流系圖樺山

幕府嘉五人者之功，各賜御劍，新納長光，北鄉國行，肝付國行，本田正

恒，樺山國宗，新納長光言賜長光所造刀也，北鄉以下，以劍工，本名為

劍名，猶干，十五日，赤松滿政遺，公書曰，今日十日，大

覺寺殿首至，然圓宗院未得，幕府猶有憂色，請速逐捕，

據大岳公舊譜，圓宗院，幕府復賜，公琉球國，亦賞誅尊有之

功也，據島津諸略，琉球舊作流球，亦作流求，後作琉球，明人以為，

義未之聞也，慈眼公舊譜三十三云，永萬中，鎮西八郎為朝從流求國而得

之，故名，按流求之名，見於隋書，隋書成於唐貞觀中，而貞觀十九年即

本朝大化元年，下臣永萬五百餘年，則為朝名曰流求者，其說左矣，又按

是年二月十七日改元嘉吉，三月十三日改元嘉吉，六月二十四日，赤松滿

祐弼義教，則義教賜公琉球，在自三月至六月之間矣，而慈眼公舊譜卷三

十三，以為永享年中，義教賜公琉球，蓋以是年二月日後，仍為永享十三

年，琉球國在南海中，其與日本通，不詳自何世，新井君美

耳，引國史以為，推古天皇二十四年放狄來，文武天皇大寶中併放狄島為多志

島，按狄，多禮即琉球也，考證果數十言，辨則辨矣，未知果是，今不

取，然據是歲幕府賜公琉球，則是歲尚忠即位之明年也，琉球國

前此琉球通於日本，蓋已明矣，其國始出隋書，王世譜

云，永享十二年尚忠即位，永享十二年歲在庚申，明年辛酉改元嘉吉，則是歲為尚忠即位之明年矣，其國始出隋書，

其後不復與唐宋元通，始祖曰天孫氏，天孫氏二十五世而

曰安女美末己、頗與阿摩久相似、所謂天孫氏者、疑是出於日本神代之際、然別無所考、不敢質言、姑錄其說以備異聞、中山傳信錄又引明史實錄云、洪武五年、察度奉表獻方物、是為琉球通中國也、五月二十六日、之始、按明洪武五年、歲在壬子、即日本應安五年也、五月二十六日、友貞遺本田信濃守書曰、大覺寺殿雖誅、而圓宗院未得、

此子叛人張本不可不誅、宜速捕之、據大岳公舊譜、友貞史逸其姓、張本依當時語、猶言渠魁、與左傳杜註張本意、義微異、六月十七日、幕府遣使齎書、賜公馬・太

刀・刀、復賞誅尊有之功也、同、二十四日、赤松滿祐弒將軍義教、據將軍家譜、尊有雖誅、而圓宗院未得、幕府猶有憂色、遂為其臣下所弒、所謂季孫之憂、不在顯喪、而在於蕭牆之內者也、

管領細川右京大夫持之等、立足利義勝爲主、義教號普廣院、同、初、公從末吉、使弟持久居鹿兒島、事見上永既而享四年

悔之、復歸鹿兒島、逐持久、持久奔谷山、遂以城叛、高木孫三郎、市來太郎等應之、據大岳公・節山公舊譜、高木傳右郎章家、市來次左衛門系圖、太即名久家、家親之子也、市來家親見上卷應永二十五年注、按大岳公舊譜、三月八日、足利義教賜公內書、使擊大友中務大輔持直、大內新介息、而九月二十一日、公遺赤松殿書、辭以持久之難、見樺山助太郎文書、二書無年、今因持久事、而附錄之、

秋九月十二日、持久遺樺山孝久盟書曰、今日同盟、以及子子孫孫不敢相負、有渝斯言、諸神殛之、和田江右衛門

佐正存・高木左衛門尉殖家遺孝久書爲盟、皆持久之黨也、據樺山助太郎文書、高木傳右衛門系圖、殖冬十二月十二日、細川家、匡家之子、高木匡家見上卷應永十九年

持之遺樺山孝久・禰寢重清・吉田若狹守・野邊刑部太輔書、使助、公擊島津持久及高木孫三郎、市來太郎、據大岳公舊譜、島津支流系圖樺山氏譜、小松氏、吉田納右衛門、野邊主計文書、吉田若狹守據系圖、當是兼清、而兼清、清慶、清名、道豐皆係清正之

子、注於兼清傍曰清正之甥、蓋清正以甥爲嗣云、吉田清正見第八卷應永五年注、野邊刑部太輔據系圖、當是盛仁、盛仁見第八卷應永十七年注、北鄉氏家傳、以此爲北鄉持久鄉誤、其說見後享德二年注、

1229 「薩州家國久譜中」

國久

三郎太郎 薩摩守 名齊爲甫

嘉吉元年辛酉誕生、

立久公之時爲守護代者六ヶ年也、

1230 「權執印文書」

奉寄進

八幡新田宮所領等之事

薩摩國入來院中村之内山口在家田畠事

右、件之所領者、重長重代相傳之所也、然者爲五郎重用

當病平愈之祈禱、又者迄子と孫と、爲蒙大菩薩之應護、

限永代彼在所令寄進者也、仍狀如件、

永享十一年二月九日

彈正少弼重長(花押)

檀那權執印

1231

『廣濟寺文書』「伊十院照久譜中ニ在リ」

當寺山林之松、於剪伐堅禁制之狀如件、

永享十一年二月初五日 照久(花押)

廣濟寺侍衣禪中

1232

『公』

奉寄進

薩摩國給黎之下永吉鈴源兵衛塩屋一所之事、廣濟寺ニ寄

付申候處也、右爲不盡用公禪門追膳意寔也、久景か子、

孫々、以此旨不可在相違候、仍寄進狀如此、

永享十一年己未三月二日 藤原久景判

1233

「正文在福昌寺」 「此文書薩州家用久袖判有リ 用久譜中ニ在リ」

〔本文書ハ一二一六号文書ト同文ニツキ省略シ〕

1234

「正文在福昌寺」

〔本文書ハ一二一五号文書ト同文ニツキ省略シ〕

「此一書、薩州家用久譜中ニ在リ」

「在樺山家」

桃山早水寺柱之内 北郷之内 嶋津之内買得所々知行分

現作四十六町 段錢十三貫八百文 目錢四百十七文

已上拾四貫二百十七文進上仕候、

土持太郎殿給分

嶋津之内福富須田別符之内

現作五町七反冊口

段錢一貫七百三十七文 目錢五十一文

以上一貫七百八十八文

「永享十年段錢之欠、次年十一年六月十五日、此日之記末弘方へ遺候」

六月十五日 教久(樺山)

1236

「島津舊記中」

嘉吉元年辛酉

將軍親書ヲ作り、腹卷・太刀ヲ賜ヒ、琉球國ヲ封シテ其

功ヲ賞ス、樺山美濃守教久等へモ又太刀ヲ給フ云云、

1237

「山田忠尚譜中」

城州嵯峨大覺寺前住大僧正尊有者、將軍家義教卿號普光院

足利判官義康、令弟縑素之冠上、昆弟之交亦如水魚、然爰永

享末年既會叛逆之得聲矣、時運之不祥乎、天命之當然乎、



未知所其然也、于時 大樹痛懼闔于牆之有禍、而有矛楯之隔於生胸宇、其起於內者已著於外矣、尊有一窺見之、則能知害之逮夫身矣、是故潛出寺門、微服徒行到于一浦、

求得扁舟遠渡西海、適于日州福島院、主于野邊氏某家、

深窺身體厚韜聲名者也、傳聞 大樹脫寇於蕭牆中者、忽不忍令骨肉隱惡之陷罪、以至于此矣、蓋夫然乎、人而破大倫則隣于禽獸、是可忍也、孰有一人之爲眞服者哉、雖

然欲爲朝敵亂天下者、不可不誅、以不得已、而搜求者、自邦畿暨四海、未能得焉、漸經年月之後、漏聞于京師、

則曰、是天所以與吾、敢勿徬徨、即差使節、告誅戮之命於 太守、因茲 太守陸奧守忠國公遣鹿屋氏・牧氏・恒

吉氏・忠尚四輩爲弑戮、且有命曰、大覺寺者、其身 大樹令弟位階大僧正也、不可不敬、忠尚島津家之一族其源

不卑、必可爲梟首役云云、不獲固辭、而嘉吉元年辛酉三

月十有三日、弑于福島院、尊有享年三十七且復近臣有別垂讚岐

房宥善者、役小角之流也、自他所歸其席、瞋目切齒呪咀當敵、以把獨古即刺己額立殉死畢、主從與俱嗚呼哀哉、

忠尚孰謂、云 大樹連枝、云大僧正位、何莫所弑之罪乎、不如追跡殉死、以子孫安泰之爲陰謀、丁此之時 忠國公使新納某・北郷某傳命曰、彼者朝敵、未嘗伐朝敵不以干

戈者也、唯汝何罪陷之有乎、敢勿自殺、及再三加制禁、是以全命經八十有餘歲霜也、

1238

〔北郷氏五代讚岐守持久譜中〕

大學寺〔本マ、義〕義昭僧正尊有、將軍義教 有陰謀之企而事發覺、故

潛出京窺居于日州福島、時 太守忠國公應鈞命、嘉吉元

年三月十三日、使新納近江守忠續・肝屬三郎兼忠・本田

信濃守重恒・樺山美濃守孝久・北郷讚岐守持久戮殺義昭

僧正于福島永徳寺、爲其忠賞 大樹義教公賜寶刀國於

持久、同賜感贈之由、雖傳之、今無之赤松播磨守滿政所被進 忠國公之

書並拜領物目錄寫左記之、

五人面々今度粉骨候由云々、以下略

御太刀

新納 長光 〔朱力半〕 〔新納近江守忠續〕

北郷 國行 〔〃〕 〔北郷讚岐守持久〕

肝付 同銘 〔〃〕 〔肝屬三郎兼忠〕

本田 正恒 〔〃〕 〔本田信濃守重恒〕

樺山 國宗 〔〃〕 〔樺山美濃守孝久〕

此分被遣候、

一後花園院永享十二年云々、今年足利義滿ノ男嵯峨大覺寺ノ住職義性僧正京ヲ逐電ス、島津古○南方傳ニハ、

八月、大覺寺ノ門主大僧正義昭ハヨク人ヲ憐ミケレハ、

崇敬スルモノ多シ、南帝也、後龜山院トアルハ非、小倉宮ナルヘシ、ノ宮ト常ニ

交深カリシカハ、或時義昭宮ニス、メ申ハ、將軍今威

ヲフルヒ奢ヲ極メ、公家武家悉ク困窮ス、願クハ君ヲ

大將トシテ義教ヲ討、萬民ノ苦ヲ止スンハイカニ、シ

カラハ五畿内(ヤマト)ノ官方并ニ世保一色カ一族將軍ニウラミ

アレハ、是ニ與センカ、今關東モマタ大ヒニ亂ル、時

ナレハ、九州ノ菊地(アサ)・大村ヲ催サンニ勢不足アルヘカ

ラス、天下ノ反覆コノ時ニアリト、南帝ノ宮大ヒニ

悦玉ヒ、蜜ニ此ヨシ菊地ニ仰下サレシカハ、菊地マタ

答申ヤウ、來年中結城ノ城警固ナラハ、天下必反覆ス

ヘシトナリ、是ニヨリ官方舊好ノ士ヲ催シ、大覺寺殿

ハ病ト稱シ蓄髮セシカ、此ヨシ義教ニ奉シケレハ、討

手ヲサシ向ル處ニ、九月、義昭僧正坊官大和法橋一人

ヲ召具シ、行方シラス成行タリ、義教ソノ形チヲ繪圖

ニウツシ、普ク天下ニ觸ナカシ、此僧正ヲ討トル人ニ

ハ其賞望ニマカスヘキヨシツタヘケルト云、又同書ニ、

是時猶伊勢ノ國司ノ息男中將顯雅卿ハ大河内ノ城ニ居

玉ヒ、少將教具朝臣ハ多氣ニコモリ官方ヲ催シ玉フ、然リトイヘトモ、官方ハ日ノニ其威ヲ失フニヨリ、

イカ、ハセント思ハル、處ニ、將軍義教モ今東國蜂起

ノ時ニアタリ、上方ニシテモ戰アラハ由ノシキ大事

ナルヘシ、一統ノ後追討スヘシ、先ツ和睦スルニ如シ

ト頻ニ執シ申サレシカハ、伊勢ノ國司モ是ニ同心セラ

レ、和睦ナリシト云、アクレハ永享十三年二月十七日、

改元ニテ嘉吉ニウツル、サキニ京ヲ没落セシ大覺寺義

性僧正ハ、還俗ノ後九州ニ落下リ、坊官圓宗院ト共ニ

彼方ニ赴ク處ニ、日向國櫛間ト云所ニ於テ里人ノ爲ニ

アヤシメラレ、三月十三日、義性僧正自害ヲトクル、

圓宗院ハイカ、シテ遁レケン、此所ヲ落去リ所在ヲシ

ラス成行タリ、島津陸奥守忠國討取ル所ノ大僧正ノ首

ヲ脚力ニテ京ニ贈リシカハ、義教喜悅ノアマリ、直筆

ノ書及ヒ國安ノ太刀・淺黄糸ノ腹巻・青ノ馬ヲ島津ニ

贈リ、猶圓宗院ノ在所ヲタツネ求シム、島津氏○南方傳

記傳ニ、大覺寺義昭僧正ハ去年京都ヲ出奔シ玉ヒシ程

ニ、其繪圖ヲアマネク諸國ニ觸タリケル、斯クテ僧正

ハ薩摩國ニ至リ、民家ニウチ入りヤスラヒケルカ、稻

ヲヒク唐春搗臼ノタグヒヲ見テ其名ヲ知ラス、農人ニ

名ヲ問タリケル、里人はヲアヤシミ召捕ントス、ソノ折カラ義昭ノ許ヨリ菊地ニ贈ル書ヲモ里人奪ヒケル、是ヲ披キ見ルニ歌アリ、

花ハいかに我をあたしと思ふらんつねニかはらぬこ  
とし成けり

山かけの花こそ今ハ咲そむれ都は末とおもひやらる

ノ

イヨノアヤシミヲナシケレハ終ニ義昭ヲ討トリ、ナ  
ラヒニ大和法橋ヲモ討タリケル、是時僧正ノ辭世ニ、

あたなりとおもひし花の齡さへうらやましくも明日  
をしる哉

1240 「忠國公御譜中」

一嘉吉元年辛酉三月十三日、弒大覺寺殿於日州櫛間院、  
雖爲將軍家義教卿之令弟、有謀反企、其隱謀既露顯、是  
以不得居于邦畿之内、潛下于當國、深窺身體韜聲名、  
而漏達 將軍家之聞、以有誅戮之嚴命、以故如斯事終、  
則獻其首於京師矣、

1241 「正文在卷本」 「全御譜中」

大覺寺事、依計略早速落居、忠節之至無比類候、向後弥  
憑思食候、兼亦一紙披見、殊神妙、旁以心中趣、感悦不  
少候、仍太刀一腰・腹卷一領・馬一疋遣之候、委曲滿政  
可申候也、

「嘉吉元年」

卯月十三日

「義教」  
〔花押〕

〔忠國〕  
嶋津陸奥守殿

1242 のほるへき雲井のひはり地に落ておとろかしたに音をの

ミそなく

いつわりのある世をしらて頼けむわかこゝろさへうらめ  
しの身や

面影ハ又もミヤこに歸りけるすかたハ野邊のけふりとそ  
成

花いかに我をあたなとおもふらんつねにはかなきことし  
なる物

御腹に刀を御立候て

山影の花ハいまこそさきそむれミヤこをすゑと思やるへ  
き

あたなりとおもひし花のいわるさようらやましくもあり  
としる哉

治部卿

小野く露野邊のしつくそきえはてよよしありと言人そは  
かなき

此程へよそとおもひし涙川いま我袖になかれつ哉(る脱カ)

さぬき房

1243 承應二年癸巳七月御再興棟札寫

奉再興 客殿 一字

右、當院者、自開基以降草堂也、代々國守課郡民修補之、  
既年尚矣、梁高而暴風患、雨霑而腐廢共、予謂卑宮而覆  
蓋以板乎、若然風雨失共除郡民之勞則無矣、是以訴公門、  
衆議僉宜之、遣工師數十人、創建之功不日而成矣、伏希、  
答此白業一天泰平、國土安穩、檀門日々榮康、子孫繁茂、  
國家年々安寧、人民豊樂、乃至寺家長久、佛法紹隆、二  
世大願速疾圓滿、

皆承應二年癸巳夷則廿日

大檀主嶋津大隅守源光久朝臣

奉行

河上五藤兵衛

市來五兵衛

大工

柴山土佐

長田納右衛門

黒木志摩介

大願主大興寺八代住法印盛印

1244 大隅國百曳内歌丸之門田數合壹町五段、此内五段卅、仏

神領堀町川成已上、

右、爲大學寺殿御領、天正八庚辰歲義久寄進之、爲義弘  
不可有相違之狀如件、

天正十七年己丑

八月十日

義弘(花押)

大興寺

「右、義弘この御判物、貞享二年七月十二日、水戸様より同國の使者  
佐々木助三郎(於)大乘院拜見」

1245

「樺山氏四代孝久譜中」

「正文在樺山源三郎久清」

就大覺寺事、致粉骨之由、被聞食候、忠節之至、尤以神  
妙、仍太刀一腰遺之也、

〔朱力斗〕 嘉吉元年 四月十三日

〔義教〕 (花押)

〔孝久〕 樺山美濃守殿

〔上包〕 樺山美濃守殿

1246 「全譜中」

大覺寺者、將軍家義教卿之連枝也、亂六親之禮義、有陰謀既露顯、以故逐電、而潛到于日州屈居者實久矣、漸漏觸于將軍家耳、于時有誅戮命、不得已而嘉吉元年三月十三日、弑於櫛間、好其忠節賜感牘及寶刀、治工備前 三郎國宗以為家珍者也、

1247 「正文在之」

〔義忠〕 大覺寺殿御事、於于日向國櫛間、被召御腹候、彼御頸既到來候、(義忠)公方様御快然過賢察候、天下大慶此事候、隨而嶋津方より(忠國)公方様へ、後々何事にても言上之時者、三条殿に付申候て、可有披露候、我々にも可申通之旨、自是可申下之由、或方指南候、如何様上意之趣、存知子細候哉、氏神も照覽候へ、非虚言候、此分いかにも堅固可有御諷諫候、爲後日存旨候之間、以誓言申候、恐々謹言、

〔嘉吉元年〕 卯月十四日

〔大内〕 持世 (花押)

〔今ノ村田(持朝)〕 菊池殿

「忠國公御譜中ニ在リ」

1248 「正文在村田大右衛門」

去月十四日御注進、今月九日到來候、則致披露候了、抑大覺寺殿御事、依御計略早速令落居候、御忠節之至、可及御子孫候、異于他候、同十日、御頸京着候、御感余被下御自筆御書候、并御釵國安・御腹巻淺黃絲・御馬青、被遣之候、御面目之至無比類候、尚以自私可申旨、被仰出候、就中今度之儀、雖御斟酌候、沙汰被申之由御申事、御不重之由被仰出候、諸人又不得其意候哉、如此次第能々可有御心得候也、將又先度以告文、御心中通言上候、今度之儀相當之間、殊御悦喜候、(義昭坊官)次圓宗院事、大覺寺殿にも不相劣思食候之處、被漏之条、御無念無極候、如何様之次第候哉、且御不審相殘候、早々被尋出之、被召進候者、猶々可爲御忠節候、委曲御使令申候、恐々謹言、(嘉吉元年) 四月十五日 (赤松) 滿政 (花押)

嶋津陸奥守殿(忠國)

「此正文在文庫、忠國公御譜中ニも在リ」

1249

「正文在文庫」

五人面々今度粉骨之由、令披露候之間、即被下 御書候、  
并御劔被遣候、御面目之至、目出候、定而御祝着候哉、  
尚々今度御忠節異于他候、如何様於向後、連々可申入候、  
每事不可存疎略候、御同心候者、可爲恐悦候、併期後信  
候、恐々謹言、

(嘉吉元年)

卯月十五日

謹上 嶋津陸奥守殿

(忠國)

「赤松氏」  
播磨守滿政(花押)

「此寫、北郷持久譜中ニ在リ」

1250

「藤野氏藏本」

(本文書ハ一二四九号文書ト同文ニツキ省略ス)

1251

「在樺山源三郎久清」

(本文書ハ一二二二号文書ト同文ニツキ省略ス)

「本末月日ナシ」

1252

「野邊告文事者、被置其ニ候て可然候之間、被遣返候、

即此之使渡申了、兼亦不被仰出候之處、自其遮而以誓文、  
御心中通言上候、御悦喜之由、猶々可申旨、不被仰出候、

左様之趣、巨細此御僧令申候、併期後信候、恐々謹言、

(嘉吉元年)

卯月十六日

「赤松」  
滿政(花押)

(忠國)  
嶋津殿

「此正文在文庫」

1253

「正文在樺山源三郎久清」

「牛王」(讀)

起精文

右之意趣者、

一去二月十二日 屋形之御書、末弘方より被遣候ニよて、

同十二日拂曉ニ志布志へ可參にて候し程ニ、日來も行

候時者、和田方へ狀使者之間にて音信仕候へ共、俄ニ

罷立候し程ニ、中郷前田所まで以使者申候意趣者、志

布志より被召候、遅參候よて、御意悪候哉、末弘方及

御書候、彼御書其方へ被進候間、可有御披見候哉、定

明日拂曉ニ罷下候、親子共ニ留守之事情、自然之時者、

預御扶持候者悦喜可申之由、高城へ心得候て被申候者

悦喜候、次ニ志和知之事、菟角巷説申候、如何様候哉、

不審候者、定而之儀ニハ可聞得候哉、左様之時者、き

かせられ候ハ、悦喜可申之由、以隠蜜前田方へ私尋

候、此二ヶ条より外ニ別ニ意趣お不申事、

一屋形今度此堺ニ御上之時、栲山殿御談合候て、志和知へ可有御勢遣にて候通、此邊より申出候之由承候へ共、努々不存知篇目にて候事、

一如此子細自是御出候者、屋形へ濃州之御讒言候之通、

我々承候之由候事、人の申候も不承候、心中にも不寄思候事、

若此条々偽申候者、

日本國中之大小神祇、殊ニハ伊勢天照大神宮 熊野三所

大權現 八幡三所大菩薩 霧嶋六所大權現 神柱妙見大

菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神、各々御罰可罷

蒙候、

永享十三年 辛酉五月十日

(北總) 知久(花押)

栲山殿 (孝久)

「此書、樺山氏四代孝久譜中ニ在リ」

「正文在文庫」

就大覺寺殿御事、先度御注進之通、御忠節誠無比類候、

且者屋形までも面目之至候、定御使面々下着候哉、兼又、

圓宗院事、急被召捕進候者目出候、如何様にも被尋究、

急速可被捕進候、彼者張本人事候間、殊以肝要之由被仰

出候、猶々被廻御計略候之者、千万可目出候、餘度々被仰出候間、態以飛脚言上仕候、此之趣可預御披露候、恐惶謹言、

〔嘉吉元年〕

五月廿六日

友貞(花押)

進上 本田信濃守殿

〔忠國公御譜中ニ在リ、正文在手鏡トアリ〕

「正文在栲山家」

契約

右、意趣者、

一仰 公方、於其下者、御大事之時一身之大綱と存、可

罷立御用事、

一身之大綱之時、平更御力お憑存候事、

一如此申談候上者、不慮仁讒者出來、和讒凶害申候時者

則承、直仁可申披事、

若此條々偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 熊野三所大權

現 霧嶋六所大權現 諏方上下大明神 天滿大自在天神

各可蒙御罰候、

〔嘉吉元年也〕

永享十三年五月廿八日

伴貴兼(花押)

栂山殿

1256 さいをとり候て、はく地のせうふ仕事候へ、 諏方

天神の御はつをまかりかうふるへく候、

八月五日 (標山) 満久(花押)

1257 「正文在之」

就大覺寺事、以前玄照上洛之時、且雖被仰候、今度儀忠節之至、無比類候間、態以使者被感仰候、仍馬・太刀・

刀遣之候也、

「享吉元年」 六月十七日 「義政」 (花押)

嶋津陸奥守殿 (忠國)

「忠國公御譜中ニ在リ」

1258 「在樺山源三郎久清」

(本文書ハ一二二〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

1259 「全」

(本文書ハ一二二二号文書ト同文ニツキ省略ス)

1260 「全」

(本文書ハ一二三二・一二三二号文書ト同文ニツキ省略ス)

1261 「樺山氏四代美濃守孝久譜中」

「正文在大興寺」

一天四海之逆乱更不得其期、是偏義教公恣行惡逆無當之政道故也、然間於一門之中、不退此乱惡者天命之至、落着可及當家滅亡欵之上、別而者又爲勝定院之猶子間、云由緒旁以存立處、全非私曲之儀、併爲助万民續家門也、依之方方成下知之間、諸國存其志、既時節純熟之間、念欲全現形、然者應順路之儀、早爲御身方之隨一致忠節、廻計略者、可爲御本意、於恩賞者、隨望可有其沙汰、猶々軍忠之一段、別而憑訖、仍狀如件、

八月廿五日 (義昭) (花押)

「孝久」 栂山殿

「上書」 栂山殿 尊有

「右之包紙如此有之」 大覺寺義昭僧正御眞筆之御狀、故以預從栂山殿候、

權少僧都頼園

「此書、永享中ナルヘシ、此ニ入置也」



1262 「正在大興寺」

(本文書ハ一二六一号文書ト同文ニツキ省略ス)

1263 「正文在肝付氏」

就大覺寺事、致粉骨之由、被聞食候、忠節之至、尤以神妙、仍太刀一腰遣之候也、

四月十三日

肝付三郎殿

(兼忠)  
(花押)

1264 「正文在樺山源三郎久清」

(本文書ハ一二四五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1265 「藤野氏藏本」

御太刀

新納 近江守忠續 長光  
北郷 讚岐守持久 國行  
肝付 三郎兼忠 同銘  
本田 信濃守重恒 正恒  
樺山 美濃守孝久 國宗  
此分被遣候、

1266 「樺山氏四代孝久謹中」

「正文在樺山源三郎久清」

契約

一天下雖爲轉變、爲一方可申談事、  
一しせん御大事之時者、身の大綱と存、是非ともに捨申ましき事、  
一今度申談候うへ者、於于子孫も相違之儀有ましき事、  
一申出し候する事、違篇之儀有ましき事、  
一如此申談候うへ者、自然わさん之儀出來候はん時ハ、  
面をもて可申披事、

此条々偽候者、

日本國中之大小神祇、殊伊勢天照太神宮 熊野三所大權現 正八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神之御厨可蒙候、

嘉吉元年九月十二日 (用込) 持久(花押)

(兼忠) 樺山殿

1267 「正文在樺山家」

(本文書ハ一二六六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「正文在栴山氏」

契約

右、意趣者、

一仰 持久、於私者、自然御大事之時、身之大綱と存、

御用罷立之事、

一今度之刻一段申談候上者、於子と孫と捨すてられ申候

ましき事、

一如此申談候上者、讒者出來、和讒凶害之時者則承、可

申披事、

若此條と偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照太神宮 熊野三所權

現 八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神

御爵可蒙候、

嘉吉元年九月十二日

(和巴) 正存(花押)

(奉込) 栴山殿

「按ルニ、山之口修善寺觀音鑿口銘ニ、寶徳中大旦那大江正存トミニ  
レハ、和田氏ニテ、三俣高城邊ノ領主也」

「正文在栴山氏」

契約

右之意趣者、

一仰 持久、於私者、自然御大事時、身之大綱と存、可

罷立御用事、

一今度刻一段申談候上者、於子と孫と捨すてられ申候ま

しき事、

一如此申談候上者、讒者出來、和讒凶害之時者則承、可

申披事、

若此条と偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照太神宮 熊野三所權現

八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神御爵

可蒙候、

嘉吉元年九月十二日

「高木長門守是家ノ子左衛門殖家ノコト也」 殖家(花押)

(奉込) 栴山殿

1270 嘉吉元年辛酉

閏九月三日、西郷壹岐守宗滿戰死、其場を詳に  
せす、年四十七歳、

1271 「正文在栴山氏」

一日不寄思候之處、ふと入御候、誠と悦喜仕候、馳而參  
候て、か様御礼可申上とも病氣後未絡候程、以吉日可參

之由存候て、于今延引候、恐入候、先爲御札次參進候、

委細可申候之哉、又一日之御狀、臈彼使ニ請取せ候、御  
狀見申候、御意通悦喜申候、自是之御返事案文進候、可  
有御披見候哉、就其屋形御座所其外、薩州不審聞得候者

承候ハ、隨而江州より一昨日得狀候、意趣者、去十九  
日大崎へ肝付・和田より勢遣候、内藏向ニハくしきより  
勢遣候て、在家二三ヶ所放火候、重而廿三日可有勢遣候、

合力之由被申候程、昨日内者廿十人計遣候、爲御不審、  
令啓候、恐々謹言、

八月廿三日  
（孝心）  
（北郷）  
知久（花押）  
枕山殿

「正文在楞嚴寺」  
「ウラ」  
「まくだた島」  
「ウラ」

1272

寄附

奉寄進楞嚴寺國府まくだたの島伍段之事

右、彼島ハ、社家桑幡田方より鎌田道賢かしちけんに、  
本物五貫文ニ取所也、雖然、道賢爲菩提、本主文書相副  
て、所寄進當寺也、但本主うけられ候へんする時ハ、本  
物五貫文をもて、別田島をめされ取、忌日御とふらひに

あつかるへく候、  
（為脱之）  
仍後日寄進之狀如件、

嘉吉元年十一月十一日  
沙弥道賢（花押）

1273

「忠國公御譜中」  
「正文在吉田次郎兵衛爲清」

嶋津持久・高木孫三郎・市來太郎以下事、所被加治罰也、  
早令合力嶋津陸奥守、  
（忠國）  
可被抽忠節之由、所被仰下也、仍  
執達如件、

嘉吉元年十二月十二日  
（細川持之）  
右京大夫（花押）

吉田若狹守殿  
（上包）  
吉田若狹守殿  
右京大夫持之

1274

嶋津持久・高木孫三郎・市來太郎以下事、所被加治罰也、  
早令合力嶋津陸奥守貴久、  
（忠國）  
可被致忠節、就中對貴久無貳  
之旨申之、尤神妙、向後弥可被抽戰功之由、所被仰下也、  
仍執達如件、

嘉吉元年十二月十二日  
（細川持之）  
右京大夫（花押）

野邊刑部大輔殿

1275

「正文在枕山源三郎久清」

嶋津持久・高木孫三郎・市來太郎以下事、所被加治罰也、  
早令合力嶋津陸奥守、(實心)可被抽忠節之由、所被仰下也、仍  
執達如件、

嘉吉元年十二月十二日

〔細川持之〕  
右京大夫(花押)

(季心)  
椋山美濃守殿

〔上包〕  
椋山美濃守殿

右京大夫持之

「此書、椋山氏四代孝久譜中ニ在リ」

1276

『廣濟寺文書』「伊集院熙久譜中ニ在リ」

圓福寺住持職之事申定上者、田畠山林等不違一所可有知  
行者也、聊不可有他妨、特於彼在所成違乱煩之輩、不可  
爲熙久之子孫也、仍爲後證之狀如件、

嘉吉元年辛酉十二月十三日

(伊集院)  
大隅守熙久(花押)

廣濟寺住持眞超長老

1277

「正文在椋山氏」

借用申候御れうそく元二貫文

りふん一貫文

合三貫文定

1278

「國史 大岳公」

右、いなます名の内かきもとの水田三反うりわたし申候、  
三年過候ハ、本物を返進候へく候、此下地分請申候へ  
く候、り分一貫五百六十文内五百六十文ハ進し候、り分  
残一貫文、元二貫文、都合三貫文、代々水田三段うりわ  
たし申候、爲後日狀如件、

嘉吉元年十二月廿八日

信家(花押)

二年壬戌春三月十七日、持久使本田氏領溝邊六町地・向島  
有村、據島津支流系圖用久譜、此時本田氏有重恒、有重經、此  
云本田氏、不詳的為誰也、郡村高辻帳、有村屬向島郷十八  
日、使山田忠尚領小川院百引六町、據島津支流系圖、冬十月二十

五日、足利義勝令管領畠山德本遣入來院彈正少弼・吉田  
若狹守書、皆使助 公擊島津持久・高木孫三郎・市來太

郎、據大岳公舊譜、遣入來院彈正少弼書、月日下書沙弥、復書畠山持  
國押字、連吉田若狹守書、月日下書沙弥、不書押字、而書皮書畠  
山德本、按將軍家譜、管領畠山左衛門督持國雜髮號德本、比而觀之、則  
二書皆為德本所遣明矣、入來院主馬文書、有入來院彈正少弼重長嘉吉元  
年傳孫菊五郎昌狀、則此云入來院彈正少弼者、為重長亦  
明矣、菊五郎名重豐、重長之孫重茂之子、後稱彈正少弼、十一月七  
日、足利義勝爲征夷大將軍、據將軍家譜、

三年癸亥秋七月二十一日、足利義勝薨、號慶雲院、同上

文安元年甲子、是年二月改元文安、正月猶是嘉吉四年、春二月五日改元、據續本  
朝通鑑、

冬十月十四日、伊東六郎右衛門尉祐堯遺樺山孝久盟書曰、

凡吾同盟共守舊約、以及子子孫孫不敢相負、有渝斯言、

諸神極之、據島津支流系圖、伊東祐堯、祐豐後守盛吉遺孝久盟立之子、見上卷應永十九年注。

書亦如之、同上、二十二日、高木殖家・和田正存復各遺孝

久盟書亦如之、同上、是歲琉球王尚忠卒、據琉球國王世譜

1279 「載本田重恒譯中」

一嘉吉二年壬戌三月十七日、自薩摩守持久得溝邊六町・

同城并向島之内有村、不知何故、

1280 嶋津庄大隅方溝邊六町・同城并向嶋内有村事、爲給分所

宛行也、早任先例、領知不可有相違狀如件、

嘉吉二年三月十七日

(用久)持久(花押)

本田殿

「薩州家用久譯中ニ正文在本田作左衛門宣親、持久守護職之時御判形トアリ」

1281 「載山田聖榮譜」

嶋津庄大隅方小川院内百引六町事、爲祈所宛行也、早

任先例、領知不可有相違狀如件、

嘉吉二年三月十八日

(用久)持久(花押)

(忠尚)山田殿

1282 (本文書ハ二八一号文書ト同文ニツキ省略)

1283 老衰仕候へ共、いまも狩鷹心中計ハ數寄候同前候哉、

世上以後無音候、定而侘事候哉、隨而引目木望候、持せ候て給候者歡喜候、恐々謹言、

六月九日

忠國(花押)

(忠尚)山田殿

「元本上包」山田殿

忠國

1284 「大騎士伊集院氏藏」

坊津之事、持久より所領被預候する程者、可有知行候、何時も御所預於被給候者、坊之事者歸し可給候、仍爲後證之狀如件、

嘉吉二年五月十二日

(伊集院)大隅守照久(花押)

(継久)三郎左衛門殿

『入來院氏文書』

讓与

所孫菊五郎丸

【十代彈正少弼重長幼名】

一所 薩摩國入來院內清敷北方同南方

一所 北方内上副田村

一所 市比野村

一所 塔原村

一所 中村

一所 楠本村

一所 倉野村

一所 久住村

一所 柏嶋村

一所 薩摩國薩摩郡内永利名同地頭職

一所 筑前國柏原水田屋敷

一所 筑後國永淵屋敷同國みなきの屋敷

一所 甲斐國西嶋内葦入在家田畠

一所 美作國河繪庄内下森上山大足

一所 相模國澁谷曾司郷ふちこゝろの屋敷立野等之事

右、於所領等者、重長重代相傳所領也、仍孫菊五郎丸仁相

副次第調度手繼證文等、限永代所讓与也、於御公事者、

任先例、可致支配者也、次重長以後所領事、雖有數輩之

兄弟、守其器用、惣領一人仁、一所ヲモ不殘可讓与之也、

若背此旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重長之子孫

云云、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分讓、任此狀之

旨、於惣領一人之計、押而可知行者也、且爲後證所書載

置文之趣也、仍讓狀如件、

嘉吉元年二月廿七日

【八代家督也】

彈正少弼重長(花押)

『感應寺文書』

下桑原田并落水寄進狀一通

嘉吉二年八月十三日

伊作左京太夫久清判

『忠國公御譜中』

「正文在吉田次郎兵衛為濟」

嶋津持久・高木孫三郎・市來太郎以下事、先度被成治罰

之處、尚令出張、既陸奥守忠國及難儀旨、不廻時日、合

力忠國、可被抽戰功、若有背御成敗族者、可爲彼三人同

罪之由、所被仰下也、仍執達如件、

嘉吉二年十月廿五日

(島山持國) 沙弥

吉田若狹守殿

「上包」  
吉田若狹守殿

沙弥徳本

1288 『入来院氏文書』

「忠國公御譜中、名宛ノ末ニ、澁谷彈正少弼殿 武藏守義行トアリ」

嶋津持久・高木孫三郎・市來太郎以下事、先度被成治尉

之處、尚令出張、既陸奥守忠國及難儀云々、不廻時日、

合力忠國、可被抽戰功、若有背御成敗族者、可爲彼兩三

人同罪之由、所被仰下也、仍執達如件、

嘉吉二年十月廿五日

「管領富山左衛門督持國入道」  
沙弥(花押)

入来院彈正少弼殿

「包紙」  
入来院彈正少弼殿

沙弥徳本

1289 「谷山伊佐智佐權現文書」

内侍屋敷目錄

谷山のこほりわたのひこ二郎か屋しきのうち、いさちさ

のいちとのさい所、しゝそん／＼までも、いちやしきた

るへき事しちなり、もしいらん申ともから候する時は、

狀をせう文として、さをいなくかの有所にはなれられま

しく候、よて爲後日如件、

か吉二年十月廿六日

やなせ好爲

1290 「大口高城氏藏」

澁谷出雲彦太郎

平重宗

嘉吉二年十一月十五日

1291 「正文在楞嚴寺」

「見祐」

「重經」「ウラ」

奉寄進

見祐靈位田字内丸伍反事

右、件之田地者、先妣天桂祐公大師号毎月廿一日忌日祈

田、除万雜公事、限盡未來際、所奉寄進楞嚴寺也、但爲

買得之地之間、本主請還時者、以本物十七貫文、又有買

得下地、可有吊尉彼命日、如掟昔日者、不僞孝道 諸佛

薩陲垂哀愍、於被合掌者、令得菩提之条、不可有疑者哉

者、至于重經子々孫々、無偏破儀守此旨、可致渴仰之懇

志候、仍寄附之狀如件、

嘉吉參天癸亥三月六日

信濃守重經(花押)

1292

『廣濟寺文書』

廣濟寺諸末寺諸塔頭之事、延慶寺・寶壽寺・靈徳寺・龍泉庵・如く院・聚星軒・無量壽院・取得軒、彼諸末寺諸塔頭之事者、自開山南仲和尚、中興桃隠和尚以來、爲廣濟寺之末寺上者、自今以後末寺而可爲本寺之御計、去年以老者共堅雖申定、爲後證重調此狀収寺家、若此外雖有文書、不可用兎角之儀、殊於彼諸在所成違乱煩、背此證狀之旨輩、不可爲熙久子孫之狀如件、

嘉吉三年八月廿八日

(伊集院)  
熙久(花押)

眞超長老

「伊集院氏熙久譜中ニ皆在リ」

1293

『全』

一日妙圓寺御使節御出候、御意趣之通其時こそ承分て候へ、根元山王 諏訪の寄進と存候て、とかく申候つる御物語ニこそ、委細存知仕て候へ、いそき御知行可目出候、満家へもやかにて此謂可申遣候事候、恐く謹言、

(年間未考)  
小春五日

(伊集院)  
熙久(花押)

廣濟寺

新符之御方へ

1294

『廣濟寺文書』

態令啓候、就其者圓福寺の事、於度く承候間、凡可任御意由申候、雖然以面御物語如申候、忠書記・春藏主此兩人ニ被仰付候する事者、不可然候よし申候キ、於于今も其分候、只夫より御覺悟こそ可目出存候へ、猶く忠書記へ被仰付候へは、春藏主之恨もあるへく候之間、如此候、令啓候、外見あるましく候、恐く謹言、

(年間未考)  
九月廿七日

(伊集院)  
熙久(花押)

侍者之御中

廣濟寺へ

まいる

「伊十院氏熙久譜中ニ皆在リ」

1295

『全』

東堂之御一期の後へ、順職之ことくに寺家向之事、可申談候、其の間へ、如何にも御堪忍可目出候、心事以面拜可令申候、恐惶謹言、

(年間未考)  
極月廿九日

(伊集院)  
熙久(花押)

廣濟寺へ

まいる



1296 「正文在栴山源三郎久清」

日向國北郷嶋津并大隅國并薩摩國鷹嶋知覽内所々買得地等事、不可有子細也、早任先例、可令知行者也、仍爲後日狀如件、

〔正文元年ニ当レリ〕  
嘉吉四年三月八日

〔用久〕  
持久〔花押〕

栴山殿

〔此書、栴山氏五代滿久譜中ニ在リ〕

1297 「在感應寺」

先年田与池相博之事無子細、雖然寺家寸土依爲大切、以衆評返地御寺申上者、田地當毛之上、如舊令知行者也、仍爲後證之狀如斯、

〔是ハ、感應寺八世住太叔尚祐〕  
前建長太叔判

文安元年甲子六月十一日

1298 「正文在栴山源三郎久清」

〔上書ニ〕  
「伊東殿ヨリ」

契約

右、意趣者、

一世上如何様ニ雖爲轉變、今度一諾申談候衆中御大綱之

時者、祐堯身の大事ニ存、我等か大事を皆の御大綱ニ被思召、相互ニ御用ニ可立被立申事、

一弓矢方立、各別ニ心ニハよるへからず候、此衆中堅可申談候、縦嶋津殿御兄弟御和睦候而、自何方にても御座候へ、此衆中ニ御身ニ付而も、又我等か身上ニ付而も、無理之子細を被仰懸事候へん時者、分ニ身の大事ニ存、堅可申談事、

一自然奥州ニ御用之時者、承候而可申候、又自是持久ニ可申子細候へん時者、此衆中ニ可申談事、

一自此方向我等ニ列立候て被申通方候共、不可有御拘候、又自其方向此衆中ニ隔候而、我等ニ被申候方候共、御意共放候て申談事有ましく候、殊に自今以後、此衆中御持の御城を、相互ニ忍被忍不可申候、其外小事の和讒等にて候へ、申付事有ましく候事、

一如此申談候處ニ有讒者、不慮の虚事出來事候へん時者、御意を不被殘承、自是も無腹藏可申披候、か様ニ申定候上者、至子ニ孫ニまで成水魚之思、此衆中無ニ無ニ御用ニ立被立可申事、

若此條々偽申候者、

伊勢天照太神 八幡大菩薩 天滿大自在天神 熊野三所

大權現 鶺鴒六所大權現 諏訪上下大明神、殊者當國之  
鎮守妻万五社大明神 其外六十余州大小神祇可罷蒙御爵  
候、仍契狀如件、

文安元年十月十二日

六郎右衛門尉祐堯(花押)

桃山殿

〔此書、樺山氏四代孝久譜中ニあり〕

〔正文在樺山氏〕

契約

右、意趣者、

一世上如何様ニ雖爲轉變、今度此衆中一諾申談候上者、

孝久御大綱之時者、盛吉大綱と存、無二御用ニ可立申

事、

一萬一持久・忠國御和睦候而、自何方にても御座候へ、

孝久又此衆中ニ無理之子細を被仰懸事候へん時者、一

身之大綱と存、堅可申談事、

一如此申談候之處ニ有讒者、不慮之虚事出來事候へん時

者、不被殘御意承、自是も無腹藏可申披候、か様ニ申

定候上者、至子々孫々まで成水魚思、無二無三御用ニ

可立申事、

若此条々偽申候者、

伊勢天照太神 八幡大菩薩 天滿大自在天神 熊野三所

大權現 鶺鴒六所大權現 諏方上下大明神、殊者六十余

州大小神祇可罷蒙御爵候、仍契狀如件、

文安元年十月十二日

豊後守盛吉(花押)

桃山殿

御内

〔正文在樺山氏〕

契約

右、意趣者、

一世上如何様雖爲轉變、此家中一諾申談候上者、孝久御

大綱之時者、殖家大綱と存、無二御用仁可立申事、

一万一持久・忠國御和睦候て、何方よりにても御座候へ、

孝久又此衆中ニ無理之子細を被仰懸事候へん時者、一

身之大と存、堅可申談事、

一如此申談候之處有讒者、不慮之虚事出來事候へん時者、

不被殘御意承、自是も無覆藏可申披候、加様ニ申定候

上者、子々孫々仁至まで成水魚之思、無二無三御用仁

立可被立申事、

若此条々偽申候者、

伊勢天照太神 八幡三所大菩薩 霧嶋六所大權現 熊野

三山大權現 天滿大自在天神 春日大明神 諏方上下大

明神御爵於可罷蒙候、仍契狀如件、

文安元年十月廿二日

左衛門尉(高木)殖家(花押)

枕山殿

1301

〔阿多〕

一薩州阿多郡熊野上宮神祠再興棟札

文安元年甲子十一月

本願大檀那大守藤原朝臣忠國

助成施主四箇所地頭藤原 友久

忠持

〔餘ハ略ス〕